

〈論文〉

山口明穂氏の助動詞「つ」「ぬ」の説をただす

川上徳明

はじめに

山口明穂氏には氏の所謂「時の助動詞」即ち「き・けり・つ・ぬ・たり・り」についての論が多い。このうち既に検討済の「き・けり」に続き、ここでは「つ・ぬ」について検討する。

先ず、氏の論文、著書及び関連する文法辞典等で管見に入ったものを文献一覧として刊行順に揭示する。ここでは一般向けの講座所収の論、啓蒙書の類なども区別せず掲げる。これは右と所謂論文との間に内容・表現上特に相違がないと認められるので、それらも同列に扱う。更に参考として氏を編者とする学習用の古語辞典の最近の版も挙げておく。これによって氏の所説の全貌を知ることが出来ようと思う。

引用に際しては文献①・文献②、文献③の如く示す。ただし文献①・文献④は時に『別巻』・『大辞典』と略称する。

- ① 一九八八・四 『国文法講座別巻 学校文法』（明治書院）
- ② 一九九七・三 『古代日本語に於ける時間の意味』（中央大学文学部紀要）
- ③ 二〇〇〇・九 『日本語を考える』―移りかわる言葉の機構―（東京大学出版会）
- ④ 二〇〇一・三 『日本語文法大辞典』（明治書院）
- ⑤ 二〇〇四・二 『日本語の論理』―言葉に現れる思想―（大修館書店）
- (イ) 一九九四・九 『旺文社『古語辞典』第八版』（旺文社）
- (ロ) 二〇〇一・一〇 『旺文社『古語辞典』第九版』（同）
- (ハ) 二〇〇八・九 『旺文社『古語辞典』第十版』（同）

なお、筆者は既に氏の所説に対する批判の論を発表しており、参照の為に次にそれを示す。引用に際しては、拙稿①、拙稿②の如く示す。

- ① 一九八九・七 「今はただ思ひ絶えなむ」の歌の解(上)―助動詞「ぬ」の意味を中心に―(「解釈」四二二集)
- ② 一九九〇・七 「今はただ思ひ絶えなむ」の歌の解(下)―助動詞「ぬ」の意味を中心に―(同・四二四集)
- ③ 一九九〇・一〇 「国文法講座別刊」疑義一束(札幌大学高橋研究室「史料と研究」第二号)
- ④ 二〇〇八・二三 「山口明穂氏の所謂『時の助動詞』の説をただす 上」(札幌大学総合論叢第二五号)
- ⑤ 二〇〇八・一〇 「山口明穂氏の所謂『時の助動詞』の説をただす 中」(同第二六号)
- ⑥ 二〇〇九・二三 「山口明穂氏の所謂『時の助動詞』の説をただす 下」(同第二七号)

一

一(一) 1

先ず文献①『別巻』の説を見る。

「つ」「ぬ」の二語は、それぞれ、その上に来る動詞に違いがある。「つ」の付く動詞には「ぬ」の付く事が少なく、逆に、「ぬ」の付く動詞には「つ」の付く事が少ない。動詞によっては、「つ」しか付かない、あるいは、「ぬ」しか付かないという語もある。

動詞の意味の差に応じた、意味の違いが、「つ」「ぬ」の二語にあつたと考えられる。もし、動詞の意味に二種類を考えるとすれば、意図した動作・作用、何の意図もなく生じた動作・作用という区別が考えられる。それに合せて、

つ…意図した事の完了。「してしまう」「やってしまう」の意。

ぬ…自然に生じた事の完了。「なってしまう」の意。

という区別が考えられる。(九二頁。傍線筆者)

右によれば、「つ」「ぬ」はそれぞれ上接する動詞の意味に合せて

「つ」は①意図した動作・作用の意味を表す動詞に接続して口「意図した事の完了」の意を表す

「ぬ」は②何の意図もなく生じた動作・作用の意味を表す動詞に接続して口「自然に生じた事の完了」の意を表す

ものだということになる。換言すれば、「つ」「ぬ」は上に来る動詞によって使い分けられ、かつ動詞の意味によって「つ」「ぬ」の意味も規定されるというのである。

右で、傍線部イ・ロはそれぞれ同内容を表すものと解される。なぜならロはイを簡約・換言したものに過ぎないからである。従って、イ動詞の意味とロ「つ」「ぬ」それぞれの意味とがほとんど重なり合っている。まことに目を疑うような内容であるが、これは「つ」「ぬ」の意味を「動詞の意味の差に応じ」「それに合せ」たものであるとする氏の説明を忠実にまとめた結果なのである。このことは後に引用する文献⑤『日本語の論理』における氏自身の言によっても確認されよう。

次は右「つ」「ぬ」の定義に続く具体例の説明である。(以下、氏の例文に通し番号を附す。)

1 今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな(後拾遺集・恋・三)

氏はこの歌の詞書を引用し、それに基づいて、この歌は藤原道雅が、三条院の当子内親王の許に通うことを厳しくとめられた時の思いを詠んだものであることを説明した後、「ぬ」について次のように述べる。

I 歌の意味としては「あきらめてしまおう」の解釈で理解できるが、

II ここで作者が「思ひ絶えなむ」と「ぬ」を使ったのは、「思ひ絶え」という、自分が意図しない形で、あなたへの思いが絶たれる事態が生じてしまう、自分としては、決してそのような事態を招くつもりはないのだが、どうしてもないのだ、という思いがこめられていたからと考えられる。

III それ「ぬ」の意味であり、この歌の場合、それを読みとる必要がある。(九三頁。改行・記号・傍線筆者)

先ず第一の問題について述べる。動詞「思ひ絶ゆ」には通常「ぬ」しか接続しない。例えば八代集において「思ひ絶えなむ」や「思ひ絶えぬ」等という例は計一〇例あるが、「思ひ絶えてむ」など「つ」が接続した例は全然ないのである。この点は『新編国歌大観』(第一・二巻)や『源氏物語』(「大系」)等の例においても同断である。ただし、『夜の寝覚』には「思ひ絶えつる」(『日本古典文学全集』五四頁)の例が一例見られるが、単に例外としてよいのか否か、筆者には現在この異例を的確に説明するだけの用意がない。

「つ」「ぬ」がそれぞれ如何なる動詞に接続するかは時代により若干の変化がある。従つて、この問題はなるべく古いものから見るべきものであらうと考える。ただし、右の「思ひ絶ゆ」に「つ」または「ぬ」が接続した例は『萬葉集』他上代の文献には見られない。これが右で平安時代の例を問題とした所以である。以下、この接続の問題に関して上代の文献に触れない場合は、ほぼその例がないことを意味する。

なお、「思ひ絶えたりつる」及び「思し絶えたりつる」の例について触れておく。

思ひ絶えたりつる年ごろよりも、いとゆかしくおぼえ（寢覚・三八四）

年ごろ思し絶えたりつる筋さへ、いま一度きこえずなりぬるが（源氏・薄雲・二・二二九）

この「つ」は直接「思ひ絶ゆ」「思し絶ゆ」に接続しているのではなく、勿論直上の「たり」に接続しているのである。即ち、右は例えば「思ひ絶えたるも、苦しみまでおぼさるれば」（寢覚・六五）の「たり」に「つ」が下接した形であり、この場合は「たり」との承接関係を考えなければならない。「つ」「ぬ」は完了の助動詞「たり」に次のように接続する。即ち、「つ」の単独形（終止形「つ」・連体形「つる」・已然形「つれ」）は「たり」に接続するが「ぬ」の単独形が「たり」に接続することはない。また、「つ」「ぬ」が下接助動詞を伴う場合、「つ」は「つらむ」「つめり」「ぬ」は「なむ」「なまし」「ぬべし」の形で「たり」に接続する。これが、これまでに確認されている「たり」と「つ」「ぬ」との承接関係である。ここには「つ」と「ぬ」との間に相補性が認められよう。右の二例もこの範囲内にある。要するに、「たり―つる（連体形）」とは言つても「たり―ぬる（連体形）」とは言わないのである。

右に関し、次に若干の例を挙げる。

「この昼、殿おはしましたりつ」といふを聞く。（蜻蛉日記・中・天禄元年六月）

ありしながらうち臥したりつるさま、うちかはし給へりしが、わが紅の御衣の着られたりつるなど（源氏・夕顔・一・一六二）

「引きもかなぐり奉りぬべくこそ、思ひたりつれ」（同・東屋・五・一六八）

「少納言よ、直衣着たりつらむは、いづら。父宮のおはするか」（同・若紫・一・二二五）

「かの家にも、隠ろへてば、据えたりぬべけれど、……」（同・東屋・五・二七九）

『源氏物語』について言えば「たり―つる（連体形）」の例は三五例を数えるが「たり―ぬる（連体形）」の例は全く無いのである。以上の検討により、先の二例を「思ひ絶ゆ」に「つ」が接続することがあるとの傍証となし得ない事は明らかであろう。

本題に戻り、繰り返し言う。「思ひ絶ゆ」には一般に「ぬ」しか接続しない。従って、氏が、ここで作者が「ぬ」を使ったのは「つ」「ぬ」二語の中から「ぬ」を選択したものである、とする（取意）が如きは全く認め難い。「つ」または「ぬ」のいずれか一に限定されている場合に二者択一ということは勿論あり得ない道理だからである。そしてこの一事は氏の説の論拠を根柢から覆すものである。

第二の問題、「思ひ絶ゆ」の意味を中心に検討する。この語は他動詞であり、「世に経むことを思ひ絶えたり」（源氏・濡標・二・一一六）の如く「ヲ格」をとる例も幾つか見られる。古語辞典の類でも「思うことをやめる」「断念する」「あきらめる」「思い切る」等の訳語を当てるのが一般であり、下って『日葡辞書』にも次のようにある。

Vomitaye, ru.eta. ヲモイタエ、ユル、エタ もはや思うことをやめる、または、愛することをやめる。（『邦訳日葡辞書』岩波書店、七一一頁）

若干の具体例を見る。

つらさには思ひ絶えなんと思へどもかなはぬものは涙なりけり（続後撰集・卷一一・七〇八）

辛さに堪えかねて「思ひ絶えなんと思」う、即ち、自ら断念しようと思うのだが、それがかなわぬ歎きの歌である。

あらましになぐさむ程の契りだにわが心より思ひ絶えにき（新拾遺集・卷二二・一〇六九）

右には「わが心より思ひ絶えにき」とあるが、これこそまさに主体自らの能動的な意図を示すものである。問題の「思ひ絶えなむ」を、きつぱりとあきらめてしまおう、即ち、自らの断念の意志の表明と解してなんの問題があるうか。否、それ以外の解釈はあり得ないであろう。

氏は、専ら、作者が内親王の許に通うことを厳しく止められたという外的な事情からこの「思ひ絶ゆ」及び「ぬ」の意味を説明しているに過ぎない。繰り返される「事態」という語がそれを端的に示していよう。換言すれば、肝腎の表現そのものの追究は極めてなおざりである。例えば、

「思ひ絶え」という、自分が意図しない形で、あなたへの思ひが絶たれる事態

というが、自ら断念する意の「思ひ絶ゆ」を「思ひが絶たれる」などと受け身的な説明をするのもそこに由来する。しかも右の如く解するのであれば「ぬ」は「自然に生じた事の完了」の意とともに、自ら（作者）の思ひを絶つ他者の、その力の存在を示すものであるのか。自然と使役、この両者はむしろ相対立する内容ではないか。

次には氏の説明の中心をなす「ぬ」について検討する。

先の論旨をいま一度簡略に示せば次のようになる（記号は先を承ける）。

Ⅱ 「ぬ」を使ったのは、〈A〉という思ひがこめられていたからである。Ⅲそれが「ぬ」の意味である。

右Aの内容を具体的に言えば、「あなたへの思ひが絶たれる事態に対する、どうしようもないのだ」という思ひである。そして、この「思ひ」が「ぬ」の意味だという。ここに至って第三の、かつ重要な問題が出て来る。そもそも先の規定によれば、「ぬ」の意味は

① 自然に生じた事の完了

ということであった。しかるに、ここでは

② 作者（話し手）の思ひ

「それが『ぬ』の意味である」という。ところで、①は客体的な表現対象の有り様を言う。対して、②は主体的な話し手の心情を言う。その意味で両者は完全に異質であり、そこには何の繋がりもない。従って、①は決して②を包摂し得ない。換言すれば、②は如何にしても①から出て来る意味ではない。即ち②は明らかに定義を逸脱し、その埒外にある。

では、この②（話し手の思ひ）はどこから来るのか。右にはその説明は一切ない。これは氏の助動詞観の根柢にある、「助動詞の表す内容は事態に対する話し手の心情である」（文献④『大辞典』三五〇頁。助動詞の「機能」の項）によるものと解される。これは氏の助動詞一般に通底する見解であって、別に「ぬ」に限ったことではない。（拙稿④本誌二五号で詳細検討済）。この、謂わば自明の、無条件で前提されているものを、それがどこから来るのかと求めても、それは不可能なことであった。（詳細後述）

ともあれ、先の「思ひ」は決して「ぬ」の意味ではない。

一 (一) 2

以上、重要な三点について検討した。以下、まとめをかねて補足する。

ここには「思ひ絶えなむ」の「む」についての吟味はないが、氏はこの「む」の意味を「推量」と解しているものである。次は文献口（旺文社『古語辞典』第九版。第十版も同じ）の訳文である。

あなたの方で会わせてくれない今となつては、もうあなたへの思いも続かなくなつてしまふだろうと、ただそれだけのことを、人伝でなく、直接お会いしてお話する方法があればなあ。（傍線筆者）

この他人事のような内容を「人づてならで」直接言いたいと切望するものであろうか。「思ひ絶えなむ」は断念の強い決意の表現でなければならぬ。安東次男氏はこの歌について「断念のことばをせめて自分の口から伝えたい、とまで言い切った歌は、数ある王朝の恋歌の中でも、ほかにはないだろう」（『百人一首』新潮文庫）と述べているが、山口氏の訳は、この「訴の激しく切なる」表現を裏切るものという他はない。要するに、氏の説明は、「思ひ絶えなむ」という表現を解析したものではない。説明の中心をなす「ぬ」にしても、表現を離れて、外部的な事情の説明に終始しているだけなのである。そして、その根柢にあるのは前述の助動詞の意味についての抜き難い謬見である。

なお、右の「つ」「ぬ」の説及びそれに基づく歌の解釈について筆者は夙に詳細な批判を公にしている（拙稿①・②）。ここでは新たな観点から再論した。

なおまた、氏はこの項で「つ」「ぬ」二語の区別を問題としながら、その具体例は右「ぬ」の一例のみで、「つ」の例示は全然ないことを言い添えておこう。

二

二 (一) 1

ところで、この「つ」「ぬ」に対する氏の見解はやがて以下のように一変する。

次は文献②「古代日本語に於ける時間の意味」において平安時代の氏の所謂「時の助動詞」(「き・けり・つ・ぬ・たり・り」)の意味を概説した部分である。そのうちここでは「つ」「ぬ」についての定義を引く。

(1) つ …何者かの意図によって事態が発生したことをいう。

ぬ …当事者の意図には基づかず自然と発生したことをいう。(四頁)

右について検討する。まず、「つ」「ぬ」の定義で注目すべきは、二語の意味の違いは、事態の発生が「何者か」「つ」の場合)及び「当事者」「ぬ」の場合)の意図の有無によるとすることである。即ち、ここには、上接する動詞の意味の差についての言及が無くなったのであるが、これは後に(文献③以後)氏が確言する、動詞の性質―例えば自他―と「つ」「ぬ」との関係を否定することに繋がるものである。この点、先の文献①『別巻』の説を自ら否定するものであって、用例の解釈にも大きな相違をもたらす。

二(一) 2

さて、次が文献②において「ぬ」の意味を具体例について説明する最初の部分である。

①「ぬ」は完了の概念で捉えられるが、

2 散りぬれば恋ふれどしるしなき物をけふこそ桜折らば折りてめ(『古今集』春上・六四)

のような場合、「散り」の事態が完了したととられ易い。しかし、②この歌の場合、「けふこそ桜折らば折りてめ」とある以上、「散り」は完了していない。③「ぬ」が已然形で使われている以上、「散り」は実現している。その意味で、④「散りぬれば」は、「散り」は実現しているが、完了してはいないで今も続いている状況を表していると考えられる。⑤「ぬ」は、前の動詞の内容が、完了していなくとも、それが実現していれば使う語であったのである。その点、現在にいう完了とは異なる点があるといえる。同じ「散りぬれば」でも、

3 散りぬれば後は芥になる花を思しらずもまどふ蝶哉(『古今集』物名・四三五)

4 散りぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風の吹く(『新古今集』春上・五三)

の二例は、①歌の内容からいって「散り」は完了している。その点、同じ「散りぬれば」という語形を持ちながら、異なる意味で使われているように見える。この違いは動詞（この場合は「散り」になるが）にあったのではなからうか。即ち、⑧動詞は、その動作・作用が始って、それが進行していく状態から、済んだ時までを表すのであるから、上に述べた「散りぬれば」の違いは、⑨「ぬ」にあるのではなく、⑩動詞の、その場その場の違いによって生じることになる。このように考えられるが、更に検討を要する問題である。（六頁）

（記号・傍線筆者。なお、氏の例文に附した数字は既述の如く通し番号である）。

この一段の説明が先の定義とどう関るのか明らかではないが、先ずは記述に従ってその内容を見てゆく。前半例文2についての論理を忠実に辿れば次のようになろう。

- ①「ぬ」は完了の概念で捉えられるが、
- ②この歌の場合（下の句の内容により）「散り」は完了していない。
- ③（しかし）「ぬれ」は已然形であるから、「散り」は実現している。
- ④（即ちこの歌で）「散り」は実現しているが、完了しておらず、今も継続している。
- ⑤（つまり）「ぬ」は、前の動詞の内容が、完了していなくとも、それが実現していれば使う語である。

右は、「ぬれ」は已然形であるから、事態は実現している、というのである。しかしながら、この極めて短絡的な見解には致命的な欠陥がある。それは問題の〈已然形―ば〉の用法についての信じ難いほどの誤解である（詳細後述）。

そしてこの見解は右に止まらず、文献③『日本語を考える』・文献④『大辞典』・文献⑤『日本語の論理』・文献⑥『旺文社『古語辞典』第九版（第十版も同じ）等において再三再四取り上げられ、強調されてゆく。今、続く文献③によって氏の意図を確かめ、かつはその誤解の根の深いことを確認することとする。氏は

「つ」「ぬ」の二語は完了の助動詞といわれる。しかし、①「完了」という呼び方には問題があるようである。

として問題の古今集（六四）の歌（即ち例文2）を引き、それを

散ることが始まったので惜しんで恋い慕ってはいるけれどもその甲斐がないけれど、今日ならば桜を折れば折ることができるだろう。と訳した後、次のように述べる。

この初句は「ぬ」を完了の助動詞で、そこからその意味を「…てしまふ」とすると、「ぬれ」と已然形であるので確定条件となり「散ってしまったので」という解釈になる。だが、こう解釈すると、すでに桜の花はなくなり、「今日こそ…」と矛盾する内容になる。そこで、②已然形「ぬれ」を確定条件とはせず、ただ「ば」の意味だけは生かして「散ってしまったば」と仮定条件にする解釈が現在行われている。このように③仮定条件に訳すのは本来の已然形の使い方には合わず、極めて例外的なやり方である。しかし、和歌の意味からいってそうせざるをえない。④こういう無理をしなければならないのは、「ぬ」の意味を「完了」としたことから起こったと考えられる。「つ」「ぬ」の用法を見ると、そこで述べた事態が実現していることを表しており、「完了」というのは便宜的な名称にすぎない。そこで、この歌も、事態の実現と解釈すると、初句は「散るということが起こったあとでは」の意味になり、確定条件としてすこしも無理がない。つまり、⑤この例などは「完了」という便宜的な名称が悪く影響した例と言えるであろう。(文献③・

二〇〇頁、記号・傍線筆者)

ここに至って漸く文献②以来の氏の意図が明らかになったであろう。先ず傍線部②即ち「現在」行われている(とする)「解釈」について見る。これはおそらく日本古典文学大系『古今和歌集』(佐伯梅友校注。昭和三十三年)の頭注等を指すものであろうと思われる。佐伯氏は「散りぬれば」に注して「散ってしまったば」としているのであるが、これは決して初句を「仮定条件」と解しての訳語ではない。従って、それを傍線部②の如くとるのは全くの誤解である。これは、頭注という極めて限られた紙面の、簡潔な訳文のみによって判断した結果であろうが、後に詳述するように、この訳文の由って来たところは傍線部②の理解とは全然別なところにある。

次に、氏は、この「極めて例外的な」「無理」な「現在」の解釈は「完了」という便宜的な名称の悪影響によるものであるという。しかし、これも右の誤解に基づく全般的な外れの見解である。この点も以下の検討によって自ら明らかになるう。

なお、右を「散ってしまったば」と口訳するのはなにも「現在」に始まったことではない。同じ「散りぬれば」(例文3)について夙に『古今集遠鏡』に「チツテシマヘバ」という先蹤があることをここで指摘しておく。(詳細後述)。

なおまた、先に引用した氏の訳文はその巧拙は措くとしても全文悉く甚しい誤訳であつて到底容認し難いものであるが、これについては後述文献④の検討の項に譲る。

二(一) 3

さて、問題の根本は〈已然形―ば〉の用法についての信じ難い程の無理解にある。今更言うまでもなく〈已然形―ば〉は基本的に順接の確定条件を表すが、その一として、所謂「恒常条件」を表すものがある。即ち、ある条件のもとではいつもある事柄が起きるといった、恒常的・慣習的な条件を表す場合である。次は『日本文法大辞典』（昭和四十六年。西田直敏氏執筆）に挙げる例の一部である。

父母を見れば尊し妻子見ればめぐし愛し（萬葉集・五・八〇〇）

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寐寢にけらしも（同・八・一五一一）

あしひきの山の本末も春されば花咲きにほひ、秋づけば露霜負ひて、風まじり黄葉散りけり（同・一九・四一〇六）

老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほしき君かな（古今集・一七・九〇〇）

たかき家の子として、官・かうぶり心になかひ、世の中の榮えにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめん事は、いと遠くなん、思ゆべかめる（源氏・乙女・二・二七七）

命長ければ恥多し（徒然草・七）

ところで、管見によれば、〈已然形―ば〉のこの用法を最初に指摘したのは佐伯梅友氏ではなからうかと思う。即ち、氏はその著『國語史 上古篇』（昭和一二年）において、已然形をうける「ば」の用法を三種（一は前件と後件とが必然的な関係にあるもの、二は同偶然的な関係にあるもの、三その他）に分ち、その三に

楊こそ伐れば生えすれ（萬葉集・一四・三四九一）

足ひきの山の本末も春去れば花さきにほひ秋づけば露霜負ひて、風交りもみち散りけり（一九・四一六〇）

瓜はめば子供おもほゆ栗はめばまして俣ばゆ（五・八〇二）

の例を引き、次のように解説している（右の傍線部はもと萬葉仮名表記であるがいま現行の表記に和らげた）。

これらは、「……するときはいつも……する」といふやうな気持で、前の二種がその時だけの事であるのに対して、これは時を離れていつもあることをいふので、「伐る」「春去る」「秋づく」「瓜はむ」といふやうな動作は現に行はれてゐるわけではない。その点では一種の仮定的ないひ方である。（二二頁）

この説はその後右を改訂増補した『奈良時代の國語』（昭和二五年）に引き継がれ、更に氏の執筆になる文法教科書『国文法—高等学校用』（昭和二八年）、『新古典文法』（昭和三四年）等にも採られたことにより、教育界にも広く知られるようになったものと思われる。なお、右『国文法—高等学校用』では用例の二に

散りぬれば後はあくたになる花を、思ひ知らずもまどふ蝶かな（古今、一〇・四三五）

を挙げている。先の例文3がここで所謂「恒常条件」の例と解されていることを特に注意しておく。

以上の佐伯説は誠に卓見であろうと思う。この見解はその後広く受け入れられ、現在では前掲『日本文法大辞典』の他、文献④『大辞典』（糸井通浩氏執筆）、更には学習用の古語辞典の類でもすべてこの用法に言及する。なお、三省堂『例解古語辞典』（一九八〇年初版、現在第三版）は佐伯氏を顧問とし、小松英雄氏他を編者とする―ただし、佐伯氏『古文読解のための文法』の「凡例」には「私もその編修委員の一人として責任をもつ」旨の記述がある―が、現行の古語辞典の中では右を含む「ば」の用法についての解説が最も詳細であり、参考になる。そして、右辞典には先の例文2の「散りぬれば」を所謂「恒常条件」を表す例として挙げていることを見逃すことは出来ない。先の、大系『古今和歌集』では例文2・3の「散りぬれば」をともに「散つてしまえば」と頭注しているのであるが、その訳文は右の見識によって支えられているのである。また、仮に先の文献③の内容が「大系」以外の説を指すものだとしても、右「已然形―ば」の「恒常条件」の用法を山口氏が無視したことに何ら変わりはない。否、無視ではあるまい、おそらくはそれが少しも念頭になかったものと断じて誤りなからう。

参考までに他の注釈書の説明を引いておく。

久曾神昇氏『古今和歌集 全訳注』では例文2の「歌意」を

散つてしまったならば、いくら恋い慕ってもかいはないのであるから、今日こそ桜の花を折るならば折ってしまおうとする。また例文3の「歌意」を

いくら美しくても散つてしまえばきたない芥になる花であるのに、そうとも知らないで蝶は、その花にまどいたわむれていることよとし、「ちりぬれば」について

散つてしまえばいつでも。「ぬれ」は完了の助動詞「ぬ」の已然形。確定法。恒常条件。(傍線筆者)
と「語釈」している。

更に、右『全訳注』ではこの他

春さればのべにまづ咲く見れどあかぬ花 まひなしにただなのるべき花の名なれや(古今集・一〇〇八)

の「春されば」について、次のように「語釈」している。

春になるといつでも。確定法。恒常条件。(傍線筆者)

右は簡潔にしてかつ間然するところのない注釈であるが、特に「恒常条件」という用語に注目される。これはこの語が既に文法研究者以外にも知られている事を示すものである。

ここで先に触れておいた『古今集遠鏡』の俗言訳を挙げる。

○桜花ハチツテシマウテカラハ ナンボ見タウ思フテモ ソノセンハナイモノヲ 折ルナラ早ウ今日ノ内ニコソ折ウ事ナレ 明日ハ

モウチルデアラウ(六四。波線以外の傍線ママ)

○花ハチツテシマヘバ後ニハ芥ニナツテシマウテ ナンデモナイ物ヂヤニ ソレヲエガテンセズニアハウナ サテモマア花ニマヨウ

事カナ(四三五)

○コレハ春ニナレバ 野ヘンニマヅ一番ガケニサク花デ 見テモ見テモ見アカヌ花デゴザルガ……(一〇〇八)

右の各波線部「桜花ハチツテシマウテカラハ」「花ハチツテシマヘバ」「春ニナレバ」という訳を何人が斥ける事が出来ようか。なお、右第一例の末尾傍線部は俗言訳に際し補ったものであるが、宣長が殊更この「明日ハモウチルデアラウ」という一句を添えた意図を見逃

してはならない。

なおまた、義門の『活語雑話』には右六四番歌の「散りぬれば」が已然言（已然形）なる所以について既に的確な説明が見られる。更にその中で、右『遠鏡』の「散テシマウテカラハ」という訳は「イトワキ、シ」即ち甚だ明白であり、「ウベナリ」としている事を指摘しておく。（『義門研究資料集成』中巻一九五四頁）

要するに、先の例文2・3はこの恒常的・慣習的な条件を表す例と解してなんら問題がない。否、それ以外の解釈はすべて斥けられねばならないであろう。

次は如上の問題点を概括したものである。

〈已然形―ば〉（散りぬれば）

① 確定条件 散ってしまったので

② 恒常条件 散ってしまったば

〈未然形―ば〉（散りなば）

③ 仮定条件 散ってしまえば

右で②の恒常条件を表す「散りぬれば」と③の仮定条件を表す「散りなば」との現代語訳とともに「散ってしまったば」である。ところが、山口氏には②の恒常条件についての理解がすっぱりと欠落しているために、氏は②の「散ってしまったば」という訳語をとらえて③の仮定条件を表すものと速断したのである。なんの事はない、如上の問題はつまるところただそれだけの事なのである。氏はかかる妄断をもとに他の正当にして的確なる現代語訳、延いてその根柢の解釈を難じているのである。しかも、氏はこの見解がよほど得意と見えて、以後もこれを繰り返し繰り返し主張している。問題は右に尽きるが、いましばらく検討を続けることとする。

二(一) 4

氏の誤解は、右に確認したように〈已然形―ば〉の「恒常条件」の用法についての無理解によるが、いま一つは『古今集』の歌の排列についてなんら顧慮するところがないことも与つていよう。周知のように、『古今集』の四季の部は立春から年末に至るまで、風物が季節の推移に従つて精密に排列され、一分のすきもない見事な編集がなされている。問題の六四番の歌の属する『古今集』巻一・春歌上の巻末二〇首(四九―六八)はいずれも〈咲く桜〉の例であつて、この部分に〈散る桜〉乃至〈散り始めた桜〉の例はない。次に問題の歌に続く四首を挙げる。

折りとらば惜しげにもあるか桜花いざ宿かりて散るまではみむ(六五)

さくら色に衣は深く染めて着む花の散りなむのちの形見に(六六)

わが宿の花見がてらにくる人は散りなむのちぞ恋ひしかるべき(六七)

見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし(六八)

六五番の上の句「折りとらば惜しげにもあるか」は前歌(六四)の「折らば折りてめ」を承ける。ここにもその排列のまことに緊密なるを見る。また、その結句「散るまでは見む」は何を意味するか。更に続く三首にはすべて「散りなむのち」とあり、その整齊ぶりはまさに見事という他はないが、その意味を見落としてはならない。

なお、〈散る桜〉の例は巻二・春歌下に入つてからなのである。因みに、巻二の冒頭歌を見るに

題知らず

読人しらず

春霞たなびく山の桜花移ろはむとや色かはりゆく(二・六九)

である。この歌について「日本古典文学全集」では「散る時期が近づいた桜がこの巻の巻頭におかれたことを、契沖は前の巻に盛りの花までを載せたので、以後に散る花を掲げるための準備とするためだとする」と注している。これは『余材抄』の説を和らげたものであつて、要するに、巻一卷末の「(桜の)盛りのほどの歌」と巻二初めの「散るをよめる歌」との「あはひ」に「うつろひそむる歌」を置いたとの契沖の説を紹介しているのである。

今詳説の余裕はないが、『古今集』の編纂意識についての契沖以来の、風巻氏・久曾神氏・松田氏・岸上氏・小泉氏等諸家の研究成果を蔑ろにすることは許されない。「散りぬれば」(六四)を「散り」は実現している」「今も(散り)続いている状況を表している」(文献②)などと解したり、「散ることが始ったので」「散るといことが起こったあとでは」(文献③)などとしたりすることはこの点からも全く容認し得ないのである。

以上、氏の解釈は語法の無理解に加え、『古今集』の編纂意識を無視した極めて恣意的なものであることを見た。

二(一) 5

これまで文献②・文献③の見解を見てきたが、同様の見解は前述の如く文献④『大辞典』以下でも繰り返されている。ここでは先ず『大辞典』の記述について検討する。次は『大辞典』の「ぬ」の「意味」のプランチ①であるが、例文の訳の一部を省略した以外の全文を示す。

①誰の意図にも基づかず、ある事態が自然に生じることを表す語。完了とも。「…なってしまう」の意。

「雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」(雪の解けぬうちに春は来ってしまった。……)(古今・四)

「秋は来ぬ紅葉は宿に散り敷きぬ道踏み分けて問ふ人はなし」(秋は来た。紅葉は家の庭にいっぱい散った。……)(同・二八七)

I 従来、A完了と言われた意味である。但し、A完了の意味は既にその事態が終了したと考えられやすいが、「春は来にけり」は現在春は来ている状態であり、「秋は来ぬ」も今は秋になっている状態、「散り敷きぬ」も庭いっぱい散っている状態である。つまり、Bその事態が実現したという意味である。

II 「散りぬれば恋ふれどしるし無きものをけふこそ桜折らば折りてめ」(古今・六四)

の歌も散り終ってしまったので」と解釈されることがあり、そうすると末句の「折らば折りてめ」との矛盾が生じ、そのため、「散りぬれば」の已然形を「散ってしまったば」のようなC仮定条件に解釈するやり方が行われることがある。

III しかし、「春は来にけり」「秋は来ぬ」「紅葉は宿に散り敷きぬ」などの例から「ぬ」の表す内容は、その事態が生じたということであり、そうになると「散りぬれば」も、「散る」というB事態が実現してしまったので、の意味になり、これをA完了として、「散り終えて

しまったので」とするのは正しくないことになる。(六〇〇頁。私意により、段落Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを分かち、記号・傍線を附した)

煩を厭わず長文を引用したが、右の主旨をごく簡略に述べれば次のようになるう。

Ⅰ 「ぬ」はA完了ではなくB事態の実現を意味する。

Ⅱ 「散りぬれば」の已然形をC仮定条件に解釈するやり方が行われることがある。
しかし、

Ⅲ 「散りぬれば」もB事態の実現を意味し、これをA完了とするのは正しくない。

先の説明はⅠ→Ⅱ→Ⅲと論理を踏んでいるように見える（これは当然の事である）が、右の要約を見れば直ちに知られるようにこれは正当な推論の体をなしていない。具体的に言えば、Ⅱは前後のⅠ・Ⅲとの間になんの関係もない。即ちⅠ・Ⅲは「ぬ」の意味を問題にしているのに対し、Ⅱは活用形（已然形）の用法を問題にしているのであって、両者は全く噛み合っていない。従って、氏の意図に拘らず、Ⅲは少しもⅡを否定するものになっていない。言うまでもなく、「完了」を否定すること「仮定条件」による解釈の当否とは全く別なことだからである。なお、ⅡからⅢへは「しかし」によって展開するが、この接続詞は無意味である。何となれば、観点の異なるものを対比することは出来ないからである。これは順接・逆接の如何を問わない。

簡単に言えば、ここはせめてⅠのみで終わっておけばよかったのである。しかし、氏は文献②以来「散りぬれば」の「ぬ」の已然形の解釈に拘泥し、正当な通説の否定に躍起になっているために、ここにもそれを持ち込んでまことに非論理的な説明を拵えてしまったのである。（氏が、通説を「仮定条件」による解釈と誤解していることについては既に詳説したところに譲る）。

なお、先のⅡの波線部には「散り終えてしまったので」と解釈されることがあり」とあるが、一体どこにそのような例があるというのであろう。またⅢではその解釈を否定しているが、架空の拵え事を否定してもなんの意味もない。

また、『大辞典』では「ぬ」の活用形の例示の項に問題の歌を引き、次の如き訳文を当てている。以下、この訳文の問題を取り上げる。
(A) Ⅰ散り始めてしまったので散らぬよう恋慕しても何の効き目もないのにⅡ今日なら桜を折るならば折ることがきつとできるだらうに。(五九九頁、記号・傍線筆者)

先ず、右を歌を離れて独立の一文として見るに、その意味を理解することは不可能である。何故なら、IとIIとの逆接的な展開は全く意をなしていないからである。これではほとんどまともな日本語とは言えない。更に、文末の「に」の逆接的な言いさしの含意するものは何か。これは先の文献③の訳文にはなかったものであり、ここで新たに添加されたものであるが、この思わせ振りの一語によって右の文意は一層理解し難いものになっている。

次は、訳文としての問題を考える。初句を「散り始めてしまったので」とすることの非はここでは繰り返さない。次いで、この「散りぬれば」に関連して語法上いま一つ見過ごし得ないのは第二句「恋ふれど」の訳である。この「恋ふれど」は〈已然形―ど〉が恒常条件を表す例である。先に紹介した佐伯氏の著書から例を示せば、

二人行けど行き過ぎ難き秋山を、いかにか君が一人越ゆらむ（萬葉、二・一〇六）

雨降れどつゆももらじを、笠取の山はいかでもみぢそめけむ（古今、秋下・二六二）

がある。そして「散りぬれば」「恋ふれど」の両形式は

① 〈已然形―ば〉……恒常条件・順接

② 〈已然形―ど〉……恒常条件・逆接

の形できつちりと対応している。なお、これは已然形であることが問題なのであって、先に例示した如く「ぬ」の有無には関係がない。

山口氏は先に「散りぬれば」について

「ぬ」が已然形で使われている以上、「散り」は実現している。

ことを強調していた。ならば、この「恋ふれど」も

「恋ふれ」が已然形で使われている以上、「恋ふ」は実現している。

とせねばならぬ筈ではないか。事実、文献③では前掲の如く「恋い慕ってはいるけれども」と訳していたのである。それがここで「恋い慕つても」と変わっている。この変化が文献③の誤訳に気付いた結果であるならば、それを機に「散りぬれば」の解釈を改めるべきであった。しかし、それが遂になされなかったのは右の①・②についてなんら認識がなかったものと見る他はあるまい。このことは『大辞典』

の「已然形」の「用法」②「ば・ど・ども」の説明に右の「二人行けど……」を確定条件・逆接の例として挙げ、しかもそれに

二人で行っても通り過ぎにくかつた秋山を……

といったまことに適当な訳を宛てていることによっても知られる。要するに氏には恒常条件の意識がないのである。

次に、第三句「なき物を」を「ないのに」と逆接に訳しているが、これは上の句が下の句の「今日こそ、桜、折らば折りてめ」という決意の理由となっていることが理解出来ぬ故の誤謬である。「ないのに」では意をなさず、これでは上の句と下の句との論理的な関係、延いて一首の意味が何人にも理解し得ない。

次に、第四句の「今日こそ」を「今日なら」（文献③「今日ならば」、文献⑤「今日のうちならば」と訳しているが、係助詞「こそ」がこうした仮定的な条件を表すことは決してあり得ない。思うにこれは

(B) Ⅲ桜は散り始めてしまったが、まだ散り終ってはいないで散り続けているから、Ⅳ今日のうちならば桜を折ることができるだろう。といった意識によるものである。Ⅳの末尾を〈可能・推量〉の意に訳すのもここに由来する。なお、右波線部Ⅲは先に「二(一)2」項で引用した文献②の例文2「散りぬれば」の説明中の④の部分、即ち

「散りぬれば」は、「散り」は実現しているが、完了してはいないで、今も続けている状況を表している。

をこの歌に即して筆者が具体化したものである。ここで注意すべきは右(B)Ⅳの「今日のうちならば」以下は右(B)Ⅲの波線部の内容を前提にしていることである。これなら、一往それなりに筋の通った文となろう(ただしこれは訳文としてではない)。

ところが、前掲『大辞典』の訳文(A)ではこの(B)Ⅳとほぼ同内容の下の句を氏の解する上の句の訳

I 散り始めてしまったので散らぬよう恋い慕っても何の効き目もないのに

に結びつけてしまったのである。こうして、言わば、木に竹を接いだ結果、先の(A)は意味不明の腰折れ訳文となったのである。(先の文献③の訳文も事情を等しくするであろう)。

なおいま一つ、(A)の文末の「に」の意味は何か。原表現には無いものを殊更に加える意図は何か。この逆接的な言いさしの一語は決して解釈に深みを与える類のものではない。のみならず、この恣意的な一語はさなきだに意味不明の訳文に一層無用の錯乱を持ち込ん

だものである。(この歌の「こそ……已然形」は意味上単純な終止、即ち単に強調の意を表すものであつて、奈良時代の「こそ……已然形」の如き逆接的な意味を持たない)。

以上を要するに、先の現代語訳(A)は「散りぬれば」の誤解に発し、自らの先入見を当てはめた結果であつて、全面的に否定されなければならない。

二(一) 6

この問題は更に文献⑤『日本語の論理』(第一章「日本語の論理」)でも繰り返されている。氏が如何にこの例に執着しているかが窺われるのであるが、これは右『大辞典』刊行から三年後のものであり、氏の最終的な見解ということになる。ここでは動詞「散る」の意味を詳説しているが、先ず、初めに一首の現代語訳を引用する。

散り始めてしまったので散らぬように恋慕したところで何の効果もないもののに、それが今日のうちならば桜を折るならば折る事ができるだろうに。(六八頁。傍線筆者)

続いてこれまで同様「散ってしまった」と訳する通説を非とする。理由は、ここに至ってもなお依然として唯一「已然形―ば」は確定条件だからというのみ。次いで、自らの解釈が他の解釈と違うのは、動詞「散る」をどう捉えたかにあるとして、「散る」の意味を詳述する。そして「桜が」散るという事は一時に了るものではなく、時間の幅がある」という。

その意味での現代語訳が右に示したものである。「散りぬれば」は……「散り始めることになつてしまったので」であつてこの解釈は十分に可能であるし、こうすれば、已然形は確定条件という本来の意味に解釈しているし、歌全体の意味も、無理のない解釈となつていと思う。(六九頁。傍線筆者)

右の「散る」の意味及び桜の散り方の説については別に言うことはない。「散る」の意味は、花びらが枝から離れることをいうのである」と言われたら、ただそれを拝聴するだけである。

なお、「散り始めた」と「散り始めることになつた」とは決して同義ではない。従つて、傍線部の「散り始めてしまった」と「散り始

めることになってしまった」とも同様に同義ではあり得ない。つまり、氏の現代語訳とその解説とは明らかに齟齬している。のみならず後者の意味は事態の実現に当たるまい。とすれば、これは氏の言う「ぬ」の定義に即した解釈ではない。

氏はここ文献⑤で、新たに「散る」の意味を取り上げることによって自説の論拠を補強し得たのであるが、右はほとんど無意味に近い。桜の散り方といった客観的な事実を如何に穿鑿してもそれはなんらこの歌の解釈を左右するものではない。桜の散り方は文法とは無縁である。次に「(自説は) 已然形は確定条件という本来の意味に解釈している」というが、その救い難い自縛から解放され、(已然形―ば)の「恒常条件」の用法に想到し得ない限り、遂に正鵠にはほど遠い。更に、「無理のない解釈」だという「歌全体の意味」も先の文献④のそれと全然変わりがなく、その数多の問題点をそのまま引き継いでおり、依然到底認め難い。

以上、例文2についての文献②から文献⑤に及ぶ解釈を煩を厭わず詳細に検討してきた。いま一言にしてこれを覆えば、全くの臆断・妄説。各句の解釈は絡み合っているがこれほどの誤解の連鎖はまことに珍しかろう。一首の解釈に終始自らの思い込みを当てはめた結果である。

また、山口氏はこれだけしばしば、かつ長期に互ってこの問題を論じながら、驚くことに氏の挙げる例は常に右の一例に限られている。この唯一の例によって――しかも、その全く恣意的な解釈、誤解に基づいて――通説を否定し続けているのである。これはほとんど研究上の常道を逸したものと言うべく、尋常ではあり得ないことと思われる。

二(一) 7

さて、次は大きく前後するが再び文献②に戻り、先の例文3・4についての説明を見ることとする。

この二例は①歌の内容からいって「散り」は完了している。2との違いは動詞「散り」にある。(取意。記号は先を承ける)

氏は、例文3・4の「散りぬれば」を「完了」と解するのであるが、3は前述のように「恒常条件」を表すものであり、それを「完了」(この場合、氏によれば「散り終わった」の意)とするのは「歌の内容」が理解出来ぬことから来る全くの誤解である。この点については既

述に譲るが、右の説明の後半部には別に新たな問題が出て来る。

⑧動詞は、その動作・作用が始って、それが進行していく状態から、済んだ時までを表すのであるから、「散りぬれば」の違いは、⑨「ぬ」にあるのではなく、⑩動詞の、その場その場の違いによって生じることになる。(傍線筆者)

氏は、「散りぬれば」という語形が、時に「実現」(散り始めた)、時に「完了」(散り終わった)というふうに異なる意味を表す理由は⑨「ぬ」にあるのではなく、動詞「散り」の⑩その場その場の(意味の)違いによるという。まことに驚嘆すべき見解である。しかしながら、氏はまさにその直前の文で、各例文の「散り」の意味はそれぞれの「歌の内容」(例文2の場合、下の句に「けふこそ桜……」とあること及び「ぬ」が已然形で使われていること)によるとしていたのではなかったか。これは余りにも明らかな自家撞着である。

ともあれ、右によれば、例文2・3・4の三例の動詞「散る」の連用形「散り」が、それぞれ、それだけで、時に動作・作用の「開始」、時に動作・作用の「進行」、時に動作・作用の「完了」を表すことになる。とすれば、これらは

①「散り—ハジメル・散り—ダス」

②「散り—ツツケル・散つ—テイル」

③「散り—オウル・散つ—テシマウ」

の如く「散り」自体が右の片仮名部分(所謂アスペクトの表現形式に相当する)をも含んだ意味を表すことになるのか。次は『八代集』から連用形「散り」が助動詞「ぬ」に続く例を抄出したものである。

散りなば 散りなまし 散りなむ後ぞ 散りにけむ 散りにけり 散りにし花の 散りぬとも 散りぬべし 散りぬめり
散りぬらむ 散りぬる後は 散りぬれば

氏は右十余形式(実数は更に多い)の「散り」について「その場その場の違い」即ち右①・②・③の違いを説き得るというのである。か。先の見解によれば、その相違は「散り」自体にあるというのであるから、右の如く抽象した形でもそれぞれの意味が説明されなければならぬ筈である。しかしながらこれは、如何に氏の如き逞しき想像力をもってしても到底不可能であろうと思う。

そしてまた、このような「開始」「進行」「完了」といったアスペクト的な意味をも合わせ持つ右の「散り」に、更に氏の言う「事態の発生」

の意を表す「ぬ」が下接した場合、それは全体で如何なる意味を表すのか。まさか、「事態の開始が発生した」とか「事態の完了が発生した」などというのではあるまいが。

氏は例によつて、なんの用意もなしに、思いつきでこの部分を書き流したものであろう。動詞「散り」自体が「その場その場の違いによつて」右①・②・③の意味を表すなど、まさに軽率極まる放言と言わねばなるまい。

三

三(一) 1

さて、次は先の文献②の例文2・3・4に続く部分であるが、これがこの論文の「つ」「ぬ」の論の中心をなしている。前掲の定義(Ⅰ)を承けて次のように言う。

(Ⅱ)「つ」「ぬ」は、「ぬ」の自然的な発生に対し、有意的な動作を表したと考えられる(この二語の有意的・自然的という識別は松尾捨治郎氏・佐伯梅友氏を始め多くの人に言われている)。但し、有意的と言う場合、例えば、

5 「雀の子を犬君が逃しつる。伏籠の中に、籠めたりつるものを」(『源氏物語』若紫。大系一・一八四頁)

の場合、「逃しつる」籠めたりつる「と二箇所」「つ」が使われている。後者の「つ」が紫上の有意的動作であることはいうまでもない。前者は、話手である紫上が、「逃し」た「犬君」の有意的動作であると述べていると解釈できる例である。勿論、犬君がその意を持っていた行為とは限るまい。しかし、紫上に見れば、たとえ犬君の不注意であったとしても、それをした責めを求めたのである。伏籠を殊更に開けたのではなく、何か他の事のきっかけで伏籠が開いて雀が逃げたとしても、「逃した」といいたくなるのは、現代語でも同じである。

6

あやしきことなれど、幼き御後見におもほすべく、きこえ給ひてむや(『源氏物語』若紫。同一八〇頁)
の「きこえ給」は、僧都に対する光源氏の発言であり、「きこえ」は僧都の動作である。ここに使われた「つ(て)」は、動作主「僧都」の有意的動作というのではなく、この会話の主である光源氏の意図に基づくものとして使われたと考えられるものである。

7 あな、いみじや。いと、あやしきさまを、人や見つらむ（『源氏物語』若紫。同 一八六頁）

の「見つらむ」は、家を覗く誰かの有意的動作をいうものではなく、「人や見」ることに配慮の足らなかった自分の不注意を顧みた意味と考えられる。他への責めを意識して使うのの対で、自分への責めを意識した例である。（七頁。記号・傍線筆者）

例文の検討に入る前に先ず右冒頭の傍線部について見る。ここには「つ」は「有意的な動作」「ぬ」は「自然的な発生」を表すとある。しかし、先の（Ⅰ）では二語の意味は意図の有無を別にして共に事態の「発生」の意であると規定していたのではなかったか（更に既述『別巻』では二語の意味とともに「完了」としていたのである）。この変化は確たる考えに基づくものであろうか。定義の用語が故なく揺れ動いてはその任に堪えぬであらう。

更に、続く波線部の内容も見過ごし得ない問題を含む。そこでは「つ」「ぬ」自体の意味を述べた自説に続けて、

この二語の有意的・自然的という識別は松尾捨治郎氏・佐伯梅友氏を始め多くの人に言われている。
とする。しかし、果たしてこれは事実であらうか。先ず松尾氏は『國文法論纂』において

「つ」 有意的（わざわざする）動作を表す動詞の下に附く。

「ぬ」 態々でない自然の作用を表す動詞の下に附けて用ひることが多い。（二八一頁。傍線筆者）

とし、更に『國語法論攷 追補版』では「つ」「ぬ」について

意志的動作又は強度の意識的動作を表す動詞の下に附ける。

自然の作用を表す動詞の下に附けて用ゐることが多い。（六九三頁。傍線筆者）

としている。次に佐伯氏は

「ぬ」は、自動詞に伴なわれることが多く、「つ」は他動詞に伴なわれることが多いという傾向があると言える。この限りでは、自然的な作用に「ぬ」を、人の意志的な動作のほうに「つ」を用いるということも考えられようか。（『新古典文法』九二頁。同）

としているのである。右の如く両氏は上接動詞の意味を意志的・自然的としているのであって、決して「つ」「ぬ」自体の意味を意志的・自然的などと言っているのではない。先の波線部の記述は著しく事実に反する。更にまた、そこには、両氏以外にも「多くの人に言われ

ている」などとあるが、これも全く事実無根と断じてよからう。

要するに、この一文は我田引水、自説の正当化を図ったものであろうが、到底容認すべからざる曲説である。

三(一) 2

しかもこのことは氏自身の記述によっても確認される。次は文献④『大辞典』で二語の違いを述べている部分から関連内容を抄出したものである。(六〇〇頁。傍線筆者)

「ぬ」と「つ」の違い 「散りぬ」「散らしつ」というように、古くから前に来る動詞に違いがあると言われてきた。そこから、「つ」「ぬ」には、それぞれ、前に来る動詞の意味に次のような違いが意識された。

「つ」		「ぬ」	
東条義門	使然	自然	
山田孝雄	事実状態の直写	傍観の説明	
松下大三郎	対抗的完了態	逸走的完了態	
松尾捨治郎	有意的動作	自然的作用	
小林好日	動作の完了	完了と共に結果の存続	
佐伯梅友	意志的な動作	自然的作用	

右は「つ」「ぬ」の前に来る動詞の意味の区別についての諸家の見解を纏めたものである(という)。先ず、先に問題となつた松尾・佐伯両氏の説を見る。右によれば、「つ」は有意的(意志的)動作の意味の動詞に接続し、「ぬ」は自然的作用の意味の動詞に接続する、というのが両氏の見解である。とすれば、これが先の(Ⅱ)冒頭の波線部の内容と撞着することはあまりにも明白であり、これでは先の記述の虚構なることを自ら表明するようなものではないか。これを見てもその内容が如何にいい加減なものであったかが知られよう。

ところで、これとは別に右には更にそれ自体に大きな問題を含む。即ち、ここには上接する動詞の意味の区別についての諸家の説を挙

げるとしながら、実際には、「つ」「ぬ」自体の意味の区別を言うものが混在している。確かに、東条・松尾・佐伯三氏の説は前者の例であるが、半数の山田・松下・小林三氏の説は後者の例なのである。例えば、小林説の「動作の完了」「完了と共に結果の存続」が「動詞の意味」であり得ないことは一見して明らかであろう。しかも、遡って小林氏は「つ」「ぬ」を上動詞によつて区別する説を明確に否定している（『國語學の諸問題』三二九頁）のであるから、その説は本来右の表示に入る筈のないものである。他の山田・松下説の内容も「動詞の意味」であり得ないことは言うまでもなからう。まことに信じ難いほどの杜撰さである。

しかも、問題は右に止まらない。個々の内容について見るに、小林説の整理に至つては、「つ」と「ぬ」との内容が逆になっている。あまりの事にただ驚き呆れるばかりである。のみならず「完了と共に結果の存続」とあるのは「……結果の観念を伴ふ」とあるべきものである。（同、三二九頁）。次の山田説は「『つ』は其事実状態を直写的に説明する」「『ぬ』は傍觀的に其の状態動作を説明し」（『日本文法論』三九三頁）によるものと思われるが先の要約は正確ではない。「直写的に説明する」と「傍觀的に……説明し」とを「……直写」と「……説明」とするのは全く原典の意を伝えていないからである。また、松下説を「對抗的完了態」「逸走的完了態」とするが、この「態」はないのが正しい。（『改撰標準日本文法』四二二頁）

尋常では到底考えられないことであるが、右の表示内容にはこれだけの問題を含む。読者の信を裏切ることこれ以上のものはあるまい。

因みに一言する。筆者は前稿で、『大辞典』の助動詞の「定義」において、橋本・時枝両学説における助動詞が「活用のない語」とされていることを指摘した。更にまた本辞典の山口氏執筆の項には実に多くの問題があることを指摘し、その一部については具体的にその誤謬を明らかにした（拙稿④）。ただ、右の助動詞の活用の有無の問題は高校生でも直ちにその不当を悟るであろう。しかし、右の表示内容について一般の読者がその当否を判断することは容易ではなからう。また、仮に疑問を抱いたとしても、そこから進んで直接諸家の原典に当たることは甚だ困難であろうと思う。例えば、一般の利用者が義門説の典拠（『活語指南 下』他）を自ら探索し、その内容（「ぬ」は「大抵自然言ヲ受」、「つ」は「凡ソ使然言ヲ受」）を確認することが出来ないのはむしろ当然なのである。他の諸家の場合も事情はさほど変わるまい。その意味ではこれは一層罪が深いと言わねばならない。

三(一) 1

文献②の定義についての検討が長くなった。以下、先の具体例の検討に入る。第一例(例文5)の「雀の子」の文で、その「つ」の二例中の後者「籠めたりつる」について

「つ」が紫上の有意的動作であることはいうまでもない。(傍線筆者)

という。筆者は初めこれを、まことに舌足らずの短絡的な表現ととった。何故なら、これでは助動詞「つ」自体が「有意的動作」を表していることになるからである。しかし、翻つて思うに、これが氏の真意なのであるうと思ひ直したのである。というのは、右は先の意味規定(Ⅱ)の傍線部「『つ』は有意的な動作を表した」の具体例と見られるからである。尤も、これがまた舌足らずの表現ということであれば、これ以上はなんとも言い様がない。なお、右の傍線部はあたかも当然・自明の事実であるかの如き表現であるが、助動詞「つ」自体が「有意的動作」を表すなどということは論理的にあり得ない。それは次の一例によっても明確に証し得る。

雲隠れたりつる月の、にはかにいと明くさし出でたれば(源氏・橋姫・四・三二四)

先の例において述語動詞は他動詞「籠む」であり、これは意味上話し手の意志を託し得る語である。けれども、そのことと「つ」自体が有意的動作を表すということとは全く別なことである。先に、『別巻』では、動詞の意味と「つ」「ぬ」の意味とが重なり合い、ほとんど同義であるかの如き説明をしていることを指摘したが、右は依然としてその意識を引き摺っているものと思われる。以下に検討する例文の説明も、動詞の意味を説明しているのか、「つ」の意味を説明しているのか、甚だ紛らわしいものになっている。

以上は凡そ氏の説明の文言に沿って述べてきたものであるが、実はこの場合問題の核心は「籠めたりつる」の「たりつる」にある。既に前項(一)(一)(二)で完了の助動詞「たり」と「つ」「ぬ」との接続関係について概説し、「たり―つる」とは言っても「たり―ぬる」とは言わないことを述べた。以下、この問題を具体的に詳説する。

例えば動詞「籠む」「吹きあぐ」には「つ」が接続する。

「たゞいま追ひもて行きて、この北の部屋に籠めてよ」(落窪・一。新大系八四)

「風こそ、げに、巖も吹きあげつべきものなりけれ。」とおぼゆ。(源氏・野分・三・四八)

そして右の動詞に「たり」が下接している場合には

「伏籠の中に籠めたりつるものを」とて（同・若紫・一・一八四）

「風の吹きあげたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ」（同・手習・五・三六六）
 の如くいずれも「たりつる」の形をとる。

一方、次の「荒る」以下の動詞には「ぬ」が接続する。

我なくて草の庵は荒れぬともこの一ことは枯れじと思ふ（同・椎本・四・三四八）

今ひとかたは、主つよくなるとも、かならずうち解けぬべく見えしさまなるを（同・夕顔・一・一三一）

京のことも思ひ絶えぬばかり覚え侍りしよりなむ（更級日記）

なきかげやいかゝ見るらむよそへつゝながむる月も雲隠れぬる（源氏・須磨・二・二二六）

あいなく、思ふ事添ひぬる、人の上なめり。（同・東屋・五・一七三）

阿闍梨は言ずくなにて立ちぬ。（同・総角・四・四五七）

「いとかなしき妻子をも忘れぬ」とて（同・玉鬘・二・三四一）

ところが、これら通常「ぬ」の接続する動詞でもそれに「たり」が下接介在している場合にはこれも次のようにいずれも「たりつる」の形をとる。これは一種意外の感を与えるものであるが、この事実は重要である。

年ごろ住み給はで、すこし荒れたりつる院の内、たとしへなく狭げにさへ見ゆ。（同・若菜下・三・三八八）

うち解けたりつる御手習を、硯の下にさし入れ給へれど（同・若菜上・三・二六八）

思ひ絶えたりつる年ごろよりも、いとゆかしくおぼえ（寢覚・三八四）

雲隠れたりつる月の、にはかにいと明くさし出でたれば（源氏・橋姫・四・三二四）

「添ひたりつる女はいかに」と宣へば（同・夕顔・一・一五七）

立ちたりつる君も、障子口にゐて、何事にかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。（同・椎本・四・三七七）

年ごろうち忘れたりつる、いにしへの御ことをさへ（同・椎本・四・三六三）
 更に、動詞「おぼす」「聞ゆ」には「つ」「ぬ」の両方が接続する。

たぐひおはせぬをだに、さうさうしく思しつるに（同・葵・一・三四一）

あはれと思しぬべき人のけはひなれば（同・夕顔・一・一三二）

「など、聞えつることぞ」と思さるれば（同・賢木・一・四一三）

物狂はしきまで、けはひも聞えぬべければ、退きぬ。（同・手習・五・四〇〇）

そしてこれも「たりつる」と表現されるのである。

人もしたひざまに思したりつる年月は（同・賢木・一・三七〇）

御かたはらさけず、うつくしき物に思したりつるを（同・乙女・二・三〇二）

「今の間、如何に」と聞えたりつるなり。（同・夕霧・四・一二〇）

なお、「思したりつる」の例は『源氏物語』中六、七例に及ぶが、他に一として「たりぬる」の例はないのである。

次に右の例文から問題の部分のみ摘記する。なお、（イ）の項の文末は終止形で示す。

（イ） （ロ）

A 籠めつ……………籠めたりつる

吹きあげつ……………吹きあげたりつる

思しつ……………思したりつる

聞えつ……………聞えたりつる

B 荒れぬ……………荒れたりつる

うち解けぬ……………うち解けたりつる

思ひ絶えぬ……………思ひ絶えたりつる

雲隠れぬ……………雲隠れたりつる

添ひぬ……………添ひたりつる

立ちぬ……………立ちたりつる

忘れぬ……………うち忘れたりつる

思しぬ……………思したりつる

聞えぬ……………聞えたりつる

A・Bの区分は（イ）の項即ち「つ」「ぬ」が動詞に直接する場合に「つ」「ぬ」のいずれが接続するかによる。「おぼす」「聞ゆ」はA・Bの両方に挙げた。

一見して知られるように、（ロ）はすべて「たりつる」の形になっている。そしてそれは（イ）のA・Bの差、即ち動詞に直接する場合の「つ」「ぬ」の別には拘らないのである。換言すれば、Bの（イ）は「ぬ」であるが、（ロ）はすべて「たりつる」なのであって、ここに「たりぬる」という例はない。前述のように「たり―ぬる」という承接はないからである。かくして（ロ）の文末形式は「たり」によって限定、左右されているものと見なければならぬ。ここに「たり」と「つる」との承接関係の緊密さを見るのであり、この表現形式は個人の判断を超える確かな慣例、慣習となっていることを知るのである。そしてこの「○○たりつる」という表現は「たり」による存続の意に、「つ」の確述・完了別けても確述の意味を添えるものであらうと思う。

もし、「つ」の意味が氏の言の如く「有意的な動作を表すものであるならば、氏は右のすべて「たりつる」就中「荒れたりつる」以下の「つ」の意味をもそれで説き得なければならないが、それは到底不可能であらう。とすれば、これは遡って「つ」の定義の当らざることを意味する。以上の「たりつる」の検討を基に結論する。問題の「籠めたりつる」の「つ」は、紫上の有意的動作であることを表すものではない。既に確認したように「籠めたりぬる」という表現はないのであるから話し手が「つ」「ぬ」の中から「つ」を選択することは出来ない。この点から氏の考え方は根柢から成り立ち得ないと言わねばならない。

三(一) 2 (1)

続いて例文5の問題の中心である「逃しつる」の検討に移る。先の説明はこれを

話手である紫上が、「逃し」た「犬君」の有意的動作であると述べていると解釈できる例である。……紫上にしてみれば、たとえば犬君の不注意であつたとしても、それをした責めを求めたのであろう。

とするものであつた。

先ず結論を述べる。「逃がす」(以下「逃がす」と表記する)には「つ」しか接続しない。即ち「逃がしぬ」「逃がしぬる」などという言い方はない。即ち、ここでも話し手紫上が「犬君」の有意的動作であることを示すべく「つ」「ぬ」の中から「つ」を選択したのではない。それは初めから出来ない相談である。この点、先の「籠めたりつる」の場合と全面的にその軌を一にする。氏は以後もしばしばこの例を取り上げ同じ主張を繰り返している(後述)が、この点から見てもそれはすべて意味を持たない。(1)

更に、この「つ」は紫上が犬君の不注意の責めを求めたものである、というが、この見解には到底同じ難い。何故なら、右は先の定義の埒外にあるのみならず、そもそもこれは助動詞の意味などというべきものではないからである。

この点に関し、ここで改めて氏の助動詞観を確認しておく。次は『大辞典』における助動詞の「機能」の説である。

助動詞は具体的な事態・事物を表す語に付いて、話し手がその事態・事物をどう捉えたか、話し手の心情を表す語である。(三五〇頁。傍線筆者)

既に触れたようにこれが氏の助動詞観に通底するものである。氏は助動詞の意味を右の如く解するが故に、例えば助動詞「き」「けり」についてもまさに用例毎に夥しい数の心情・「思い」を挙げていたのであるが、それらはすべて場面的・文脈的な意味を恣に当てはめたものであつてもとより助動詞の意味(文法的な意義)ではない。(この問題は拙稿④において詳述済である)。更に、当面の「つ」「ぬ」に関して次の記述が参考となる。以下は文献口(旺文社『古語辞典』第九版)でいう「つ」の「基本義」である。

そうなったことを、だれかがしたことであると判断した意味を表す。だれかがしたことであるから、それが自分であるならば、自慢・自責など、自分以外であれば、その人への感謝・賞賛・責任追及などの気持ちが含まれることもある。(記号・傍線筆者。第十版には「含

まれることがある」とあり

なお、この見解は文献イ(旺文社『古語辞典』第八版)に胚胎する。そこには

「つ」と「ぬ」との違いは、「つ」がその事態に当事者の意志がかかわっている時に使われるのに対して、「ぬ」は当事者にとつては外部的な力で行われた事態の場合に使われるというところにある。その結果、「つ」であれば、その事態に当事者の責任を問う意が含まれ、「ぬ」であれば、それがない。「つ」と「ぬ」との違いの項

右文献イの刊行は文献②に先立つ。これによって、先の「雀の子」の例で「犬君」を責めたり、後述「人や見つらむ」の例で「自分」または「そこにいる人」を責めたりする意味が判明する。ただし、自分がした場合の自慢、自分以外がした場合の感謝・賞賛等の例を氏が示すことは全くない。おそらくその確たる例を挙げることは不可能であろう。ということは右は単なる思弁・観念の所産、空疎な作文にしか過ぎないことを思わせる。しかも、より重要な点は、ここにいる自責・責任は文脈や場面に随伴するものであって、決してそれを助動詞の意味としてはならないということである。自ら「含まれることもある」「(含まれることがある)」といっているように、これは「つ」の用法に普遍妥当するものではない。従って、これを「基本義」などと称するのはまさに勇み足の最たるものと言わねばなるまい。この点に関しては後にまた触れることとする。

三(一) 2 (2)

ところで、次は問題の例文の直前、若紫の登場する場面である。

中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる着て、走りきたる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、(同・一八四)

氏によれば、この例であまたの「子ども」が「見え(つる)」という「事態」は「何者かの意図によって発生したこと」になる筈であるが、それを意図したのは何者か。また、その意図は何か。

更に、先の例文の直後、即ち問題の若紫の言葉に続いて少納言の乳母が次のように言う。

「雀の子は」いづかたへかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。烏などもこそ見つくれ」

ここにも「つ」が使われているが、まさか、この雀の子は、何者かの意図によつてだんだんかわいらしくなってきたのではあるまい。これら同一場面の、連続する文中の「つ」を氏は何故か黙止するのである。

しかも、右の「なりつる」については別に大きな問題がある。動詞「なる」には通常「ぬ」が接続する。否、「ぬ」しか接続しない。

これは上代「ぬ」の接続例六〇のみ）以来のことであつて、『源氏物語』でも「ぬ」の接続例は三〇〇余例を数える（山崎良幸「詞と辞の接続における意味的關係」高知女子大学紀要・二巻一号）。その中であつて、右は唯一の「つ」の例なのである。従つてこれは夙に伊藤慎吾氏が

このツルは右の多く用例から推せば「成りヌル」とあるべきであらうと考えられるが、源氏物語大成を見ても諸本に異動がないようであり、日本古典文学大系本、日本古典文学全集本にはいずれもツルとある。そうすれば、この場合のツルはヌルの誤りであるとは一概に否定出来ないと思う。（『源氏物語の助動詞完了態用例の新研究（上）』昭和五十三年。二二三頁）

として、詳細な検討が加えられている例である。こうした特異かつ重要な例を含め、同一場面の、連続する文中の「つ」に対してさへ謂わばそ知らぬ風に見えるが、これは自らの定義の妥当性についての検証を初めから抛擲するものではないか。尤も、氏の説が、常に偶然属目の少数例による思いつきの範囲を出ないものであることを思えば、これも自らの帰趨といふべきか。

三（一） 3

さて、本題に戻つて、次は第三例（例文7）の「人や見つらむ」を見る。第二例に先んじてこれを検討するのは物語の展開上、これが第一例に直接するからだけでなく、問題点が第一例と共通することによる。次に先の説明の全文を改行して再度示す。

1 「見つらむ」は、家を覗く誰かの有意的動作をいうものではなく、

2 「人や見」ることに配慮の足らなかつた自分の不注意を顧みた意味と考えられる。

3 他への責めを意識して使うのの対で、自分への責めを意識した例である。

先ず初めに右の論理の構成を確認する。3は2を補足換言したものであるから、2・3の内容を纏め、1と対比して検討する。その上に立って簡単に言えば、右は

Aではなく、Bである。

という構成である。Aは具体的には、

① 家を覗く誰かの ② 有意的動作をいうものではない。

ということである。これは続いて、では、「誰の、有意的動作か」ということになる。この疑問は氏の「つ」の定義から見て当然の勢である。けれども、Bは次のように、それとは全然関わりのない、あらぬ方へ行ってしまうのである。

③ 話し手（「尼上」）の ④ 自分の不注意を顧み、自責を意識した例である。

既に繰り返し確認したとおり、氏の言う「つ」は「何者かの意図によって事態が発生したことをいう」ものであり、「有意的動作」とはそれを換言したものであった。従って、「つ」には常にその意図的・有意的動作の主体、動作主がなければならない。しかし、話し手の尼上はこの発話中の登場人物ではない。従って、如何なる意味でも話中の行為の主体即ち動作主ではない。①の「家を覗く誰か」は既に動作主であることを否定された。従って、ここには「見つ」の主体即ち動作主は全く存在しない。

更に、ここでは「つ」は話し手が「自分の不注意」を顧み、自責を意識したものだと言う。話を単純化しよう。先の文献(口)の主旨を示せば次のようになる。

① 誰かがしたこと → 自分 → 自責等

② 誰かがしたこと → 自分以外 → 責任追及等

既に確認したとおり話し手の尼上は動作主ではない。従って、②は勿論、①にも全く該当しない。つまり、氏の説明は自ら規定する「つ」の意味用法から完全に逸脱したものであり、到底どこからも出て来る筈のないものである。

問題の根本はこれに尽きるが更に附言する。

「つ」は「自分の不注意」を顧みた意味だと言う。けれども、氏の定義によれば、不注意によって引き起こされた事態は初めからその

埒外にある。何故なら、「意図的・有意的な不注意」ということは勿論形容矛盾であって論理的にあり得ないからである。要するに不注意に対する自責の「意識」など単に言葉を弄んでいるに過ぎない。

以上、「Aではなく、Bである」の内容を論理的な観点から解析した。次は文法的な見地から検討する。

先の例文において「人」と「見つ」とが主述関係にあることはほとんど自明のことである。しかるに、氏はIで、「見つらむ」は「人」即ち「家を覗く誰か」の「有意的動作」をいうものではないという。そして、氏はおそらくはそこから、「人」が「見る」の主語であることを同時に否定してしまったものと思われる。少なくとも、そこで、「つ」の機能は「人」から離れてしまったものではあるまいか。ところで、続く2の「自分の不注意」とは「人や見」ることに配慮の足らなかったことを言うのである。これは事実としては「人に見られる」ことへの配慮の欠如である。従って、「自分の不注意」「自分への責め」はこの一文をおそらく

(ワタシハ)——いと、あやしきさまを——人二見ラレタ

と解するところから来たものであろう。謂わば「(われ)人に見えつらむ」乃至「(われ)人に見られつらむ」にでも相当する解釈である。(受身の「る」「らる」には通常「ぬ」が接続する。ただし、『源氏物語』『蓬生』には「つらしと思はれつらむ」という例がある)。とすれば、話し手の尼上は事実上、『受け身の主語』ということになろう。けれども、この解釈は文法的には全く何の根拠もない。場面乃至文脈に依存すれば、受身的な説明乃至現代語訳をしても一往は通るというに過ぎないものであって、それは到底本来の表現に即した文法的説明とは言えない。

繰り返す言う。「人や見つ」において「見る」の主体、文法上の主語は勿論明示されている「人」である。それ以外は決してあり得ないのである。

要するに、先の見解は文法的に見ても到底認められることではない。

なお、文献④『大辞典』でも右の例を取り上げているので、以下それを見る。次は右「つ」の項の②ブランチである。

②必ずしもそうしようという意図に基づいた行為ではなくとも、当事者からは、それをしたことを責める気持ちで用いた語。「…

してしまふ」の意。(例、「雀の子を犬君が逃がしつる」「人や見つらむ」)

ここでは「見つ」と「つ」を付けた」理由ととして

「人」は光源氏であるが、「見つ」と「つ」を付けたのは、「見」る行為が光源氏の有意的動作であるからではなく、「あやしきさまを人や見」る事態を引き起こした、そこにいる人の不注意を責める意味で使われた語である。(四六九頁下。傍線筆者)

という。右の論理の構成は文献②(前掲例文7)のそれと相違がない。ただし、今度は先の説明とは違って、話し手の尼上自身ではなく、「そこにいる人」がその「事態を引き起こした」として責められるのである。それが「つ」の意味だという。既に確認したように、「見つ」の主語は「人」(光源氏) 以外には決してあり得ない(このことは動作が有意的であるか否か、には全く関わりがない)。しかるに、ここでは「人や見つらむ」という一文に如何なる意味でも関わりのない、傍らの「人」(事実としては女房を指すのであろう)が問題とされるのである。これは「つ」が、動作主を含む話題の登場人物あるいは話し手のいずれでもない第三者、否、第三者とも言えない表現外の人物の行為に関わることを意味する。とにかく誰かに責めを負わせなければならないのであって、まことに強引、恣意も極まるものという他はない。その場限りの思いつきに過ぎぬものではあるが、責任を追求された女房もさぞ困惑することであろう。しかも、その「事態を引き起こした、そこにいる人」とは、勿論ブランチ②でいう「それをした」人即ち「見る」の動作主ではない。従って、ブランチの定義と右例文の説明とは全然照応していない。結局、『大辞典』は新たな迷妄を持ち込んだだけである。

更に、問題はこれで終らない。次は文献⑤『日本語の論理』第六章の三、「何故「つ」が使われたか」の冒頭、またも「雀の子」の例と共に右の「人や見つらむ」を取り上げている一節の抄である。

この「つ」は「見る」という動詞だから使われたのではなく、「人や見」という事態は、簾もおろさず、縁先に出ていた自分の迂

闊さがもたらしたものであって、それへの反省の思いの現れと解釈できるのである。(二五五頁。傍線筆者)

こんどは再び「自分の迂闊さ」「それへの反省の思いの現れ」だという。まさに二転三転、もはやいべき言葉もない。なお、訳文を添えているが、問題の部分は「大変にみっともない様子を人が見るようにしてしまっただろうか」(傍線筆者)とある。この傍線部の訳

は自らの説明に合わせた拵え事である。

更に、右にはいま一つ重要な問題がある。波線部で「つ」と動詞「見る」との関係を否定しているが、これは「つ」「ぬ」の使い分けが前に来る動詞によることの否定を前提としている。しかしながら、これは全く事実を無視したものであって、到底認められることではない。

これに関し、以下、「見る」について述べる。古く「見る」には専ら「つ」が接続し（上代、五十余例）、「ぬ」が接続した例は無い（後述の小林好日氏他による）。『源氏物語』でもこの傾向は著しく、筆者の調査によれば「つ」の接続例六二例、「ぬ」の接続例三例である。この「ぬ」の三例はいずれも「見侍りなむ」等「侍り」の介在する例であって、活用形の如何を問わず、「ぬ」が直接「見る」に接続した例はない。なお、「見つらむ」の例は他にもある（浮舟。五・二五九）が、「見ぬらむ」の例は全然ないのである。これは右による当然の帰結である。しかも、この事実は何も「見る」の場合に限ったことではない。伊藤慎吾氏の精緻な研究によれば、「つらむ」と「ぬらむ」とが同一の動詞に接続する例は「す」「来」の二語に限られている。（『源氏物語の助動詞完了態の新研究（上）』三六八頁）。従って、ここで話し手が自省の思いを表すべく「つ」「ぬ」二語の中から「つ」を選択したなどということは断じてあり得ない。これは氏の見解の根本的・致命的な欠陥と言わねばならない。かかる結果を招いたのは「つ」「ぬ」と動詞との接続関係についてなんら事実を追究せず、かつ推論が甚しく演繹的であること、換言すれば自らの定義によって、用例を強引に割り切っていることによる。氏の論の著しい演繹的傾向については既に拙稿④以来随時指摘してきた。

以上で例文7の検討を終える。

三(一) 4 (1)

文献②に戻り、第二例（例文6）の「きこえ給ひてむや」（一・一九〇）について見る。次に先の説明を簡条的に引く。

①「きこえ給」は、僧都に対する光源氏の発言であり、

②「きこえ」は僧都の動作である。

- ③「つ」は動作主「僧都」の有意的動作としていうものではなく、
 ④この会話の主である光源氏の意図に基づくものとして使われた。
 先ず右の疑問点を挙げる。

- 1 ②「きこえ」は僧都の動作であるが、この「つ」は③動作主「僧都」の有意的動作を表すものではないという。
 2 では、話し光源氏の有意的動作を表すものかというに、案に相違して、④「(つ)」は「光源氏の意図に基づくものとして使われた」という。しかし、「意図に基づくもの」を「有意的動作」と呼んだのではなかったか。
 3 次いで、では、その「光源氏の意図」は何か。また、何故「意図に基づくもの」として使われた」となどという持って回った曖昧な説明をするに、これでは肝腎の「きこえ給ひてむや」の「つ」の意味をなんら解き明かしてはいない。では、これを如何に説明すべきか。

三(二) 4 (2)

以下、右の表現形式について筆者の見解を述べる。

「きこえ給ひてむや」という表現は筆者のいう「命令・勧誘表現」形式の一である。中古の仮名文学作品における「命令・勧誘表現」形式は一つの整然たる体系をなしている。即ち、例えば尊敬語「給ふ」(補助動詞)の系列でいえば

- ①……給へ ②……給はむ ③……給はむや ④やは……給はぬ

の如くであり、具体例を示せば次のようになる。

- ①帰り給へ ②出立ち給はむ ③見奉り給はむや ④ここにやは宿り給はぬ

筆者はこれを「命令・勧誘表現の四段型体系」と名づけ、各形式をそれぞれ①型・②型・③型・④型と呼んだ。

この文末に「つ」「ぬ」がつくと

- 「つ」の系列 ①型……給ひてよ ②型……給ひてむ ③型……給ひてむや ④型 /

「ぬ」の系列 ①型……給ひぬ ②型……給ひなむ ③型……給ひなむや ④型 /

となる。この場合は④型の例はない。その理由は「つ」「ぬ」に打ち消しの助動詞の接続した「てぬ」「なぬ」という形式は和歌にはごく少数見られるが散文には確かな例がないことによる。

右には尊敬語「給ふ」の系列を挙げたが、「給ふ」及びその他の敬語なしの常体表現の場合も事情は全く変らない。

なお、ここである「命令・勧誘表現」の意味は広義であって、所謂命令や勧誘の他、勧奨・懲誨・依頼・懇請等々種々の用法を含めている。次に、各型の表現価値を簡潔に示せば、①型は命令形による直接的な命令・勧誘表現であり、②型は推量形式、③型は推量+問いの形式によってそれぞれ婉曲な表現となり、④型は反語……否定の形式によって最も婉曲・間接的な表現形式となっている。以下の説明を含め詳細は拙著『命令・勧誘表現の体系的研究』（平成一七年、おうふう）に譲る。

問題の「きこえ給ひてむや」は右の③型に相当するものであるが、③型は依頼表現として用いられることが多い。ここも源氏が僧都に尼君へのとりなしを鄭重に依頼したものである。

ここで右の命令・勧誘表現形式の機構について確認しておく。まず、「つ」の命令形（①型）の例を基に説明する。

「その衣ひとつとらせて、とく遣りてよ」と仰せらるれば（枕草子、職の御曹司に）

右の「遣りてよ」の場合、ここには次の三要素がある。

(A) 動詞「遣る」の素材の意味（「遣ルコト」の意）。

(B) 完了の助動詞「つ」の持つ基本的な意味。

ここでいう「基本的な意味」とは、「つ」が、活用形の相違・下接語の有無・文脈の如何等に拘らず常時担う「確述・完了」の意味を指す。(2)。訳語で示せば、「たしかに……してしま」「すっかり……してしま」などとなる。

(C) 命令形に伴う、相手（聞き手）に働きかけ、行為の実現を求める話し手の心的態度の表明。

これは所謂ムード乃至モダリテイの一種に相当しよう。右は命令形特有のものであって、それ以外の活用形には当然ないものである。

念のために一言する。動詞命令形―例えば「遣れ」―による命令・勧誘表現の場合は（A）（C）の二要素のみとなる。ここでは助動詞の例を先に取り上げたので右のような説明になったが、動詞の場合はこれで充足しているのであって、別になにかが欠けている訳ではない。助動詞命令形による場合はそれに助動詞の意味（B）が加わったということである。後述のように命令・勧誘表現の基本をなし、用例の中心をなすのは動詞命令形の場合である。

なお、「尼になし給ひてよ」（源氏・手習・五・三八五）などに見られる敬語「給ふ」は文の論理には関らないから、ここではその有無を特に問題としない。

次いで②型・③型について見る。勧誘・依頼等の場合、右の①型を推量表現によって和らげると、②型の

「姉なる人にとたまひてむ」（同・帚木・一・一〇〇）

「今宵ばかりは、ことわりとゆるし給ひてむな」（同・若菜上・三・二四七）

となる。更に、右に相手への問いかけを累加して二層婉曲な表現をとると、③型の

「ぬしに消息きこえむは申してむや」（大和物語・一五七）

「まことは、わがいはむこと聞きてむや」（うつほ物語・忠こそ）

等となる。「や」の意味は通常「疑問」とされるが、これを「疑い」と「問い」に分けるならここは「問い」である。

右の諸例において、相手に働きかけ、その行為の実現を希求する点は①型から③型までのすべてに共通する。ただ、②・③型の場合、その心的態度の表明（C）が、それぞれ婉曲な表現によって和らげられているのである。

なお、（C）の話し手の心的態度は、②型の場合は、「つ」「む」二語の連合「て＋む」によって表明されるのであり、③型の場合は、同じく「つ」「む」「や」三語の連合「て＋む＋や」によって表明されること、右に述べたとおりである。遡って①型の「てよ」の場合も、単に助動詞「つ」の意味によるのではない。前述の如く、この場合は「つ」の持つ基本的意味（B）とともに命令形なるが故に持つ話し手の心的態度の表明（C）があることを見落としてはならない。これが命令・勧誘表現形式の機構である。

右で、②型・③型における話し手の心的態度はそれぞれ「て＋む」「て＋む＋や」という連合によって表明されると述べた。ここでは

更にこの場合の「つ」の機能を中心に細叙する。

「てむ」「てむや」の「て」は未然形であるから、例えば前掲の命令形「遣りてよ」の如き直接相手に働きかけ、行為の実現を求める機能は持たない。ここにあるのは「つ」が常時持つ確述・完了、主として確述（強調）の意味である。

次の「む」は相手の行為の実現を推量の形で述べ、それによって結果的にその行為の実現を求めるものである。続く文末の「や」の意味は前述の如く「問い」であって、相手の意向を尋ねたのである。このように、推量の「む」に問いの「や」を重ねることによって、一層婉曲・間接的な依頼表現となっている。従って、依頼という話し手の心的態度は主として「む」または「む＋や」によって表明されているものと見られる。

この点は、次の比較によって判然としよう。

宮の大夫、御簾のもとにまゐりて、「上達部御前に召さむ」と啓したまふ。（紫式部日記・御五十日の祝）

母北の方に「……（あこき）なきはいとあし。召してむ」とのたまへば（落窪・一）

右②型の場合、命令・勧誘の機能を担うのは推量の「む」であり、「つ」は確述・完了の機能を果たせば事は足りる。

次の③型の場合も事情は変らない。

「いま少し、光見せんや。あまり心にくし」とのたまへば（源氏・玉蔓・二・三六六）

「（五節を）又、見せてんや」とのたまへば（同・乙女・二・三一一）

これによって命令・勧誘表現上、「つ」は必須の要件ではなく、謂わば副次的なものであることが理解されようと思う。（なお、これは「ぬ」の場合も全く同様である）。

因みに、「てむ」の如く完了の助動詞に推量の助動詞が下接する場合、「つ」は「む」の意味を強めるとされることが多いが、これは全くの誤解である。助動詞は、すべて直上の叙述に意味を添えるもので、意味上、下接語に関わることはない。

いま「きこえ給ひてむ」「きこえ給ひてむや」を例に図式的に示せば次のようになる。

「きこえ給ひてむ」……………「タシカニ―きこえ給は―む（推量）」

「きこえ給ひてむや」……「[タシカニ]きこえ給は」―む（推量）―や（問い）

右で「タシカニ」としたのは「つ」の確述・完了の意、即ち行為（「きこゆ」）の確かな実現の意をやや誇張気味に表したものである。これによって「つ」が「む」の意味を強めるものではないことが確認されよう。（なお、これは何も命令・勧誘表現の場合に限らぬこと、勿論である。）（3）

以上に基つき再確認すれば、右の②型・③型は相手に行為の実現を希求・依頼するものではあるが、命令形「てよ」による直接的・直線的な働きかけの強さを和らげ、婉曲・間接的に表現したものである。（4）

三（二） 4（3）

さて、右を踏まえた上で、本題の例文6「きこえ給ひてむや」について結論する。

既に述べたとおり右は③型による依頼の例である。次にこの場合の前掲（A）（B）（C）の三要素を具体的に示し、その意味を確認する。

（A）動詞「きこゆ」の素材的意味（「申し上ゲルコト」の意）

（B）「つ」「む」「や」それぞれの持つ基本的な意味、即ち順に「確述・完了」「推量」「問い」

（C）右三語の連合「て＋む＋や」による心的態度（婉曲・間接的な依頼）の表明

これが「きこえ給ひてむや」という依頼表現の機構であり、かつ、これがここを一般に「申し上げてくださいませんか」等と現代語訳する根拠なのである。（原文に打ち消しはないが現代語訳としてはこのようにする）

先に引用した文献②の説明は右のような分析以前のものであつて何事も解明されてはいない。「……てむや」の「つ」のみを問題にするなど、その端的な現れである。敢えて言えば、何も解っていないということであろう。

三（二） 4（4）

以上でこの例文についての検討は済んでいるのであるが、『大辞典』でもこれを取り上げているので、続いてそれを見ることとする。こ

れは一つには『大辞典』の「つ」の項には別に大きな問題を含むことにもよる。次にそのブランチ③を引用する(例文は簡約抄出して示す)。

③そのする人がしようとしてしたという、意図に基づいた行為ではなく、当事者のそうしたらいいという気持ちから生じることを示す語。(例、「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ」古今・五五二、「聞こえ給てんや」源氏・若紫)

右には二例文を挙げているが、いま後者についての解説を見る(段落・改行・記号・傍線筆者)。

I a 「聞こえ給」うのは僧都の動作である。僧都が自分の意図で「聞こえ給」うことをするのではなく、

⑥これを話している光源氏の意図が「聞こえ給」う事態の実現を望んでいるのであって、その光源氏の意図のあることを「て」は示している。

II a 動作の意図に基づくことを示すのではなく、

⑦「聞こえ給」うことを望む、この話をしてる光源氏の意図に基づき起こることを表している。(四七〇頁)

先ず、問題の「聞こえ給ひてむや」が如何にしてこのブランチの語義「当事者のそうしたらいいという気持ちから生じることを示す」例たり得るのか。右で源氏は僧都に向かって「そうしたらいい」などと呑気なことをいつているのか。これが相手(聞き手)に向かって表明されたものであるなら、それは勸奨・懲懲の意であって、決して依頼を意味しない。

次に例文の説明を見るに、一読、驚かされるのはその記述の冗漫さである。即ち、IIの内容はIのその繰り返しである。細部の⑦a・⑦bもほとんど同語の反復に過ぎない。これは依然として問題の核心が理解出来ぬままに言葉を費やした結果と見られる。繰り返して説明出来ぬことのもどかしさの反映であろう。なお、先の文献②に「光源氏の意図に基づくもの」とあつたものがここで「光源氏の意図が……事態の実現を望んでいる」となったのが僅かな相違であるが、しかし、未然形「て」が如何にして「事態の実現を望」むことに関わり得るのかについては依然として一切説明されていない。そもそも問題意識がそこまで及び得ていないのである。命令・勧誘表現の「聞こえ給ひてむや」が小町の夢の歌「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」と同一ブランチに並んでいるのはまさに一種の異観というべきであろうが、この二つの「つ」の用法が同列に扱われていることもこのことを端的に物語るであろう。

因みに、この小町の歌に関し一言する。次は右ブランチ③におけるこの歌の説明の全文である。

夢に人の「見え」たことは、夢を見る人の意図に基づくこととして「つ」を用いている。

この説明はブランチ③の定義からは出て来る筈のものではないか。何故ならこれは、行為が「そのする人」の「意図に基づく」く事を否定し、「当事者のそうしたいという気持ちから生じることを示す」という定義とは全然別なことであり、かつ矛盾することだからである（この点は後にまた触れるであろう）。なお、「そうしたい」というのは勸奨・懲誨の意である。けれども、何人も自らに勸奨・懲誨することはない。これらはブランチ③の定義とその用例との不整合を意味する。

次に、問題の動詞「見ゆ」と「つ」「ぬ」との接続関係について言えば、「見えつらむ」とはいうが「見えぬらむ」という例は全く無い。このことは既に指摘したとおりであって、八代集・『源氏物語』等においても同断である。この事実は右の氏の説明を一挙に瓦解せしめずにはおかない。

もはや蛇足に類するが、氏によれば、意図的に夢を見ることが出来るのであり、「つ」はそれを表すものだと言う。まことに奇想という他はない。ただし、夢が意図的・有意的な現象である（「つ」がそれを表す）とするならば、何故、小町は「夢と知りせば覚めざらまし」と歎くのか。下の句も「つ」を用いて「夢と知りても覚めざりつるよ」とでも詠えばよかったではないか。さすれば、「ヲシイ事ヲシテサマシテノケタ」（『遠鏡』）と歎くこともなかったであろうに、残念なことをしたものである。

三(二) 4 (5)

さて、ここで、先に指摘しておいた「大きな問題」を取り上げる。先ず『大辞典』の「つ」の項を概観する。ここには意味の「概説」はなく、直ちに「つ」の意味を五ブランチに分けて説明しているが、次にその中の「つ」単独の用法についての三ブランチを抄出する。（ブランチ④は「…てむ」、同⑤は「…つ…つ」の用法）。なお、ブランチ③は前掲、またブランチ②も既に例文7「見つらむ」の項で一度引用しているが、比較のため再掲する。引用に際し傍線を附し、例文は簡約抄出して示す。

①その事態の発生がそれをした人の意図に基づいたことを表す。「…してしまふ」という完了の意味を表す。（例、「籠めたりつるを」

源氏・若紫、「たぎつ心をせきぞかねつる」古今・四九一、「むねに釘はうちてき」大鏡・師輔。他計五)

②必ずしもそうしようという意図に基づいた行為ではなくとも、当事者からは、それをしたことを責める気持ちで用いた語。「…してしまふ」の意。(例、「雀の子を犬君が逃がしつる」源氏・若紫、「人や見つらむ」同)

③そのする人がしようとしてしたという、意図に基づいた行為ではなく、当事者のそうしたらいいという気持ちから生じることを示す語。(例、「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ」古今・五五二、「聞こえ給てんや」源氏・若紫^{たまひ})

先ず全般を一見して先の文献②の用例の多くが早くもここに取り入れられていることに驚かされる。文献②では「つ」を「何者かの意図によ」る「有意的動作」と概説し、その下に各例を説明していたのであるが、ここでは前述のように概説無しに直ちに「つ」の意味が五ブランチに分割されている。そして、先の「雀の子」以下の三例文(例文5は二用例を含み計四例)もそれぞれ異なるブランチの例として挙げられている。これは先の論との大きな相違である。

ところで、右でブランチ①とブランチ③とを分かつものは何か。果たしてブランチ③を立てる意味があるのだろうか。結論すれば、このブランチの立て方は認め難い。このことはブランチ③の第一例小町の歌の説明を見れば、毫も疑念の余地はない。繰り返しになるがそこには次のようにあった。

夢に人の「見え」たことは、夢を見る人の意図に基づくこととして「つ」を用いている。

なんと、これは、前掲ブランチ①の語義「その事態の発生がそれをした人の意図に基づいたことを表す」そのものではないか。これには絶句した。小町の歌の説明で前述の如き矛盾を生じた理由もここにある。

右を承けて、改めて先に引用したブランチ③の「聞こえ給ひてむや」についての説明(I b・II b)の傍線部即ち「光源氏の意図云々」を見るに、この部分も小町の歌の説明と同様、ブランチ①の定義となんら相違がないのである。ここにブランチ①の定義とブランチ③の例文の説明とが一致するという尋常ではほとんど考え難いことが出来したのである。かくしてブランチ③は消滅しなければならぬ。実例の無いブランチは在り得ないからである。

そもそも、ブランチ③(及び同②)の語義「意図に基づいた行為ではなく」というのは氏の「つ」の意味の根本をなすブランチ①「意

図に基づいた行為」とは相容れない。ランチ③の語義はランチ①の語義を否定するものだからである。論理的に言えば、

「Aかつ（Aではない）」ということはない。

であり、このいわゆる矛盾律は何人といえども遂に否定することは出来ない。従って、両ランチが並立することはあり得ない道理である。

何故このようなことになったのか。氏は文献②以来「つ」の意味を有意的・意図的動作を表すとしていたのであるが、ここではそれを三ランチに分かってしまった。これはあるいは辞書としての体裁を整えた心算か、あるいは単なる気紛れかは推測の限りでないが、いずれにしてもそれによって右のような甚しい謬妄を来したのである。

氏は「当事者」の意を「その行為をする人のみでなく話し手のこともある」（文献①、八五二頁）とするのであるから、

事態の発生が当事者の意図に基づいたことを表す。

と規定すればランチ①・③を一括し得るのであり、別にランチ③を立てる必要はなかったのである。

序でに言う。ランチ②も認められない。そもそもこのランチ②の二例文も文献②においていずれも「有意的な動作を表す」例、即ち右ランチ①に相当する例として挙げ、そこから「責め」を表すとしたものである。しかし、「つ」は決して「責め」を表すべく用いられたものではない。これについても既に例文5・例文7の項でその非を詳細に明らかにしたとおりである。従って、ランチ②を立てる根拠は全然ない。

更にここで、改めてランチ①の用例を見る。ここには例の「雀の子」の他、全五例を挙げるが、先ずその中の「籠めたりつる」についての説明は

「籠めたり」という事態もまたそうしようと思っただけのことである。

というものである。これは何を説明したものなのか。勿論、これは「籠めたり」という事態」を説明したものであることは明白である。ところがこれは既に見た例文5の説明では

「つ」が紫上の有意的動作であることはいうまでもない。

とあったものである。この解釈の認められないことは既に述べたとおりであるが、ともあれ、この対比によって明らかのように、前者は「つ」の意味ではない。即ち、ここは上接する③述語の意味（事態）を述べたものであって、④「つ」の意味を述べたものではない。両者が混同されているのであるが、これらは軽々に見過ごし得ないことである。

なおまた、この説明を「つ」の定義に宛てるならば、

「つ」は意図的な事態を表す動詞に接続して、それが動作主の意図に基づく完了である意を表す。

ということにならねばならぬ。これは先に否定した文献①の見解に等しい。

③述語の意味（事態）と④「つ」の意味とが識別されていないことは同じく本ブランチ①に挙げる次の例の説明を見れば一層判然とするであろう。即ち、

山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ（古今・四七九）

について次のように言う。

「見てし」事態は、そうしようと思つてした、当事者の意図に基づいた行為である。

右は「見てし」を一括して問題としており③と④とが識別されていないことは疑いなくであろう。このことは助動詞の意味の説明としてほとんど致命的な欠陥と言わねばなるまい。なお、次の

「そのよやがて、むねに釘はうちてき」（大鏡・師輔）

については例を挙げるだけで説明はない（活用形の例の部で恣意的な現代語訳を挙げている）。ただし、『大辞典』の「てき」の項（山口氏執筆）のブランチ③では右を

他人の行為に対する恨みの念をこめて過去のことを思い起こす。（傍線筆者）

例としている。一つの「つ」が全然別の意味の例とされているのであって、いずれによるべきか、読者は甚だ困惑するであろう。なお、右「てき」のブランチ②では

去年見てし（而之）秋の月夜は渡れども相見し妹はいや年さかる（萬葉・二二四）

を

後悔・自責・悲痛などの思いで、自分の過去の行為を思い起こす。(傍線筆者)

例としている。先の「恨みの念」云々とともに驚嘆に値する見解であるが、これらはそれぞれの背景の事実や文脈の醸成するものであって、もとより「つ」自体の意味ではない。しかも、いずれも各一例のみによって一ブランチを立てるのであるが、ならば、例えば氏が活用形の例の部に挙げる

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき(古今・五五三)

についてはどう説明するのであろう。文脈的な意味は右の二例とは異なるから、これもまた別ブランチを形成しなければなるまい。

本題に戻る。先の「つ」のブランチ①の用例として右の他に

あしひきの山下水の木隠れてたぎつ心をせきぞかねつる(古今・四九一)

時雨の雨染めかねてけり山城の常盤の森の下葉は(新古今・五七七)

の二例を挙げているが、「せきかね」「染めかね」ること、即ち不可能が如何にして「それをした人の意図に基づ」くことになり得るのか。あるいは「かね」は「それをしとげようとしても、不可能・困難の意をあらわす」(岩波古語辞典補訂版、傍点筆者)ものとして、「かね」自体に意図を含むことを認めるにしても、結局は不可能の意である。とすれば、その事態を實現出来なかったことが自ら(主体)の意図に基づくものであることを表すために「つ」を用いたという―不可解な―ことになるのか。なお、上代・中古において「かね」には「つ」しか接続しないことが既に明らかにされている。「かね」に「つ」が接続するのは話し手の個人的な選択の域を超える。ここにはその点についての顧慮も全然見られない。

要するに、これらの例文がブランチを支える用例たり得ないことは既に明らかであろう。これではそもそもブランチ①も成り立たぬではないか。

この項は『大辞典』の定義と例文の説明との関係、延いてブランチの立て方の問題について述べた。右の検討によって『大辞典』の「つ」

の項の中心をなすブランチ①～③の記述はほとんど全面的に崩壊するのである。

三(二) 5

以上、氏の挙げる「つ」の三例(例文5・6・7)及び関連する例について検討し、そのすべてを否定した。

なお、氏は「つ」の意味を「何者かの意図によって……」と規定する(文献②)が、助動詞の意味を「何者かの」などと規定することは尋常では考えられぬことであろう。何故なら、これではほとんど無限定に近く、規定の意味をなさぬからである。尤も例文5・6・7の説明は三者三様であるから、「何者かの……」としか規定の仕様がなかったであろう。

なおまた、氏は「若紫」巻のごく一部分から自説に都合のよい二、三の例を引いたのみである。しかも、その僅かな範囲内の前後の例さえ無視している。否、例によって、氏には初めから用例を博搜しようという姿勢はないと断じて誤りではなからう。

既に例文5に關し、一、二の例文を挙げて反証したが、更に「若紫」の巻を中心に若干の例を追加しておく。次は先の「人や見つらむ」の直後の文である。

「あはれなる人を見つるかな。かゝれば、このすき者どもは、かゝる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。

たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見るよ」とをかしうおほす。(若紫・一・一八七)

右は、源氏の感懷である。「あはれなる人を見」たのはまさに「思ひの外なる」偶然属目のことであつた。従つて、何人もこれを源氏の意図によつて事態が発生したものと解釈することはないであらう。むしろこれは、まさに氏が「ぬ」の意味とする「当事者の意図には基づかず自然と発生したことをいう」例ではないか。

いま一例、次は先の「きこえ給ひてむや」の直前の例である。

幼かりつる(紫上の)ゆくへの猶たしかに知らまほしくて(若紫・一・一九〇)

右の「つ」に何者の意図を見ることが出来ようか。なお、「若紫」の巻他から更に若干の例を挙げる。

をかしかりつる人のなごり恋しく、ひとり笑みしつ、臥し給へり。(同・一・二一九)

いとおどろおどろしかりつる風に（野分・三・五三）

雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡り給へり。（蜻蛉・五・二八三）

右の如き「かり活用」の語に接続する多くの例を氏の見解によつて説明することは到底不可能である。

四

四（一）

「つ」の例についての検討が長くなった。次は先の「つ」の三例に続く「ぬ」の例の説明である。

この「つ」と対になるのが「ぬ」であるが、次のような例がある。

8 今はまだ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな（『後拾遺集』恋三・七五〇・藤原道雅）

の歌は、詞書によれば、作者道雅が斎宮より上った三条院の皇女当子のもとに通っていたのが、それに気付いた内親王方の配意により通えなくなつて詠んだとされる。「絶えなむ」と「ぬ」が使われている。この時の作者の中には、自分としてはあなたへの思いを続けて行きたいのに、それが「絶え」ることになってしまうのは、あなた方が会うことを認めないからであり、それは自分の本意ではないという思いがあったからと考えられるのである。（八頁。傍線筆者）

右は先の『別巻』の説明（例文1）と相違がない。この見解が認められぬことは先に詳述したとおりである。

四（二）

ところで、先に例文6「きこえ給ひてむや」に関し命令・勧誘表現の問題について述べた。命令・勧誘表現形式には前述の如く文末に「ぬ」を持つ系列があり、そしてそれは先に表示したように「つ」の系列とびつたりと対応している。ここではその観点から「ぬ」の意味を検討する。

先ず、①型（命令形）の例を挙げる。

(イ) 消息つかはしける女の、又異人に文つかはすと聞きて、「今は思ひ絶えね」と言ひ送りて侍りける返事に(後撰集・一一・恋三・七五五詞書)

(ロ) 女を語らひ侍けるを、「いかにもあるまじき事也、思ひ絶えね」といひ侍ければよめる(千載集・一一九八詞書)

(ハ) 親、気色みて、いみじく騒ぎの、しりければ、「さらに対面すべくもあらず。はや、帰りね」とぞ言ひ出だしければ。「行く先はともかくもあれ、つゆにてもあはれと思はる、ものならば、今宵帰りね」とせちに言ひ出したりける。(平中物語・二四)

(ニ) (母代) 立ち走り、又、君(今姫)の臥し給へるかたはらにきて、(帳台の)床より(今姫を)ひき下しつゝ、「こゝらの宝を尽して、うへ(洞上)の思し急ぐ幸ひ(入内)を、(御身の)心として焼き失ひ滅ぼし給へるにこそあめれな。今(入内まで)いくばくの日数の心もとなさに、受領男を急ぎし給ふぞや。……若うより、ものした、かなる男は設け侍らぬものを。いづちにもいづちにも早く行き失せ給ひね」と、「恥知り給はぬか」と、爪弾きをしかくるさまの、いとおどろおどろしう恐ろしげなるに、……(洞上は)物ものたまはで帰りぬる気色を見るに、(母代は)いとど腹立ちまさりて、「はやうはやう尼法師になり給ひね。その受領の北の方にて居給ひたらむ後見、さらにさらにし侍るまじ。同じさまにて、又殿の中にえおはせじ。……」と額髪をひき上げて、「いでやいでや」と苦みかくる気色、やゝもせば、食ひつきぬべし。(狭衣物語・卷三。「大系」二五二)

右の(イ)(ロ)には問題の「思ひ絶え」に「ぬ」の接した例を挙げた。先ず(イ)の命令形「ね」の機能を詠語をもって示せば次のようになる。今はもうきつぱりと私のことをあきらめ切ってください。

右の波線部は「ぬ」の確述(強調)の意を殊更に訳出したものであるが、これは先に「思ひ絶えなむ」を

きつぱりとあきらめてしまおう、即ち、自らの断念の意思の表明(例文1の項)

と説明したのと全く同じ考えによる。

(ロ)は安性法師の歌の詞書である。法師が女を語らうとは何事であるか、きれいに断念してしまえ、と言われて詠んだ歌というのである。一読その言葉の厳しさが知られよう。

(ハ)の『平中物語』の例は、波線部にある如く、まさしく「せちに言ひ出した」物言いなのである。そして、動詞「帰る」には『記紀・

萬葉』以来「ぬ」しか接続しない。従って、勿論「つ」「ぬ」二語の中から話し手が「ぬ」を選択したものではない。

続く(二)の『狭衣物語』の例は、近々入内する筈の姫が、こともあろうに受領男を通わせていたと思ひ込んだ母代がすっかり逆上している場面であるが、姫を帳台の「床よりひき下しつ、」

何処でも彼処でも、早くすつかり行方知れずになつておしまい。恥知らず――。

と面罵し、ますます腹を立てて、

早く早くすつぱりと尼法師になつておしまい。

と「食ひつきぬべ」き気色である。まことに激越である。

もし、「ぬ」の意味が先に氏の言う如く「当事者の意図には基づかず自然と発生したことをいう」ものであるならば、右のせちなる物言い、激越なる詞の持つ、相手に働きかけ行為の実現を求める話し手の心的態度の表明を説明することは全く不可能である。そもそも、事態の自然的な発生と相手（聞き手）に行為の実現を求めることは全く相容れない。自発・可能の助動詞「る」「らる」には命令形がないことも考え合はれようと思う。

しかも、文末に「ぬ」を持つ命令・勧誘表現の系列は先に示したように「つ」の系列とびつたりと対応している。次には類似または同一の動詞による①・②・③型の例を挙げておく。

①型「今宵はなほ疾く帰り給ひね」(源氏・東屋・五・一六〇)

「早う、さぶらひにまれおはしね」(落窪・卷一)

「ただ、具しておはしましね」(讃岐典侍日記・上)

②型「はや、帰らせ給ひなむ」(源氏・夕顔・一・一六一)

「いとよき事。これは君得給はずともをのれあればおはしなん」(落窪・卷四)

「行くさきはいと近し。なほおはしましなむ」(同・卷一)

③型「渡らせ給ひなむや」(うつほ物語・蔵開上)

「渡したてまつらん所におはしなんや」(落窪・卷一)

「もしのたまふさまなるつれづれならば、かしこへはおはしましなむや」(和泉式部日記)

「ぬ」の確述(強調)の機能は①型(「ね」)・②型(「なむ」)・③型(「なむや」)に共通する。それは前述「つ」の場合のそれと全く変わることはない。

要するに、氏のいう「ぬ」の意味(無意図・自然発生)によって右の命令・勧誘表現―行為の確かな実現を求める話し手の心的態度の表明―を説明することは到底不可能である。これは即ち氏の「ぬ」の説を根柢から揺るがすに足るであろう。

五

五(一)

次の問題に移る。文献②では、先の例文2・3・4(「散りぬれば」の三例)、例文8(「今はただ」)の歌を取り上げた第三項とは別に第六項でも「ぬ」の意味を問題にしている。

「ぬ」は事態の成立を述べる語であるが、文の終止では次のように使われる。

- 9 春来ぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬかぎりはあらじと思ふ(『古今集』春上・一一)
- 10 梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてん(同・春上・二〇)
- 11 梅の花立よる許ありしより人のとがむる香にぞしみぬる(同・春上・三五)
- 12 秋きぬと目にはさよかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる(同・秋上・一六九)

(二) 例略

これを見て気付くことは、いずれも「ぬ」の示した事態はその時点で完了している。勿論それがすべての例に及ぶわけではなく、例えば

- 13 はや舟に乘れ。日も暮れぬ(『伊勢物語』第九段)

の例などは終止形で使われているが、① 未完了事態と考えるべきものである。この例の、先に示した例との違いは、② 警告の意味のあることである。この種の③ 「警告・威嚇」といった意味を含む時、④ 未完了事態の意味で使われることがある。この意味の生ずる理由は納得できる。(二三頁。記号・傍線筆者)

右『伊勢物語』の「ぬ」には「警告」の意味がある、という。まことに驚嘆すべき奇想である。これはほとんどまともな検討に値せぬ思いつき程度のものであるが、氏はこの例に執着し、この後も同じ主張を繰り返しているので、一往取り上げることとする。まず結論を述べ、後に具体例をもって検証する。

そもそも氏によれば、「ぬ」は当事者の意図には基づかず自然と発生したことをいうものである。それが如何にしてこの種の「警告・威嚇」といった意味を持ち得るのか。「ぬ」の意味と右の解釈とはどこにも接点を見出し得ないであろう。これが第一の問題点である。また、仮に一步譲ったとしても、これは勿論それぞれの具体的な場面や文脈に随伴する、その場限りのものであって、決して助動詞「ぬ」の普遍的な意味(意義)などというべきものではない。第一の問題点を別にしても、これ自体到底認められることではない。なお、氏は後々も右以外の用例を挙げることは無いのである。従って、ここで「渡し守」はある男の一行を「威嚇」していることになる。まことに恐ろしい「ぬ」ではないか。

次に氏の言う「ぬ」の用法と「警告・威嚇」の意味との関係を見る。傍線部を中心に図式的に整理すれば、順に

A ① 「未完了事態」の用法 → ② 「警告・威嚇」の意味

B ③ 「警告・威嚇」の意味 → ④ 「未完了事態」の用法

ということになる。A・B両者は相互依存の関係にある。即ちこれは循環論法である。

しかしながら、「ぬ」が右①の意味で使われるのは、何も②の場合(筆者は「威嚇」の例を知らぬが)に限られるのではない。更にまた、③は別に「文の終止」や「終止形」に限ることでもない(詳細後述)。従って、末尾の「この意味の生ずる理由は納得できる」というのも自らの思い込みを一人肯定し、合点しているに過ぎない。

次に具体例を挙げる。

〈Ⅰ〉

(イ) 石どもにおしかかりて、水やりたる樋の上に折敷ども据ゑて、もの食ひて、手づから水飯などするこち、いと立ち憂きまであれど、「日暮れぬ」などそのかす。(蜻蛉日記・中巻・天禄元年六月)

(ロ) 「日暮れぬ」とさわぎ立ちて、御燈明の事どもしたためてて急がせば、いと心あわたたしくて立ち別る。(源氏物語・玉鬘。二・三四八)

(ハ) 「雨降りぬ」といへば、急ぎて車にのるに、「さて此歌はここにてこそよまめ」などいへば、「さはれ、道にても」などいひて皆のりぬ。……などいふほどに雨まことに降りぬ。(枕草子・五月の御精進のほど)

〈Ⅱ〉

(ニ) また、雪の降る夜きたりけるを、ものはいひて、「夜ふけぬ。かへりたまひね」といひければ(大和物語・六五)

(ホ) 「更けさぶらひぬ。御帳に入らせ給へ」と申せど(狭衣物語・巻二、大系・一二九頁)

(ヘ) 通ひける女、山里にてはかなくなりければ、つれづれと籠りゐて侍りけるが、あからさまに京へまかりて、暁帰るに、「鳥鳴きぬ」と人々急がし侍りければ(新古今集・巻八・八四八。詞書)

右〈Ⅰ〉は氏の言う未了事態の例であり、〈Ⅱ〉は同じく完了事態の例である。これらの文はそれぞれある行為を勧め、促しているものであるが、それは主として波線部の表現によつてなされ、あるいはそれによつて知られるものである。換言すれば、「日暮れぬ」「雨降りぬ」「夜ふけぬ」等の「ぬ」がそれを表している訳では決してない。問題の

「はや舟に乘れ。日も暮れぬ」

においても、勧め、促しているのは波線部の表現である。特にこの場合は先の例文(ニ・ホ)と同様、それが「命令・勧誘表現」であることを見落としてはならない。「ぬ」自体は「日も暮る」という事態を確認し、それを強調しているだけである。従つて、文脈を捨象した場合、例えば、前掲の文から

(イ) 日暮れぬ。

(二) 夜ふけぬ。

だけを抽出して、それぞれ完了事態を表したもののか、未完了事態を表したもののか（延いて、「警告・威嚇」の意の有無）を論理的に識別することは何人にも全く不可能なことである。否、実際には前掲の具体例である(二)においても、そのいずれかを区別することは必ずしも容易なことではないのである。何故かというに

夜ガ更ケテシマイマス。お帰りください。

夜ガ更ケテシマイマシタ。お帰りください。

という二つの表現がともにあり得るからである。これらの事実は「ぬ」自体は事態の完了・未完了に直接関わりがないことを示している。このことは例文ハ)

「雨降りぬ」といへば、急ぎて車に乗るに……などいふほどに雨まことに降りぬ。

における二つの「ぬ」の相違が文脈に由来することを見れば何の疑いもなかるうと思う。

次は未完了事態の表現であつても全く「警告・威嚇」の意を含まぬ例を見る。

〈Ⅲ〉

(ト) 「されど、かく領じ給ひけるところなれば、まかり去りぬ。空しうなりなば親もいたづらになり給ひなむ。」（うつほ物語・俊蔭・「新編全集」一・七七）

(チ) 「かゝるついでに、内裏に奏すべき事あるによりなむ、いそぎ上りぬ」とて、たち去り給ひぬ。（源氏・明石・二・六二）

(リ) 「……翁、いたう酔ひす、みて無礼なればまかり入りぬ」といひ捨て、いり給ひぬ。（同・藤裏葉・三・一九〇）

(ヌ) 「この一つの思ひ、近き世にかなひ侍りぬれば、はるかに西の方、十萬億の国へだてたる九品の上の望み、疑ひなくなり侍りぬれば『今はたゞ、迎ふる蓮を待ち侍るほど、その夕まで、水草清き山の末にて、勤め侍らん』とてなん、まかり入りぬ」（同・若菜上・三・二八六）

(ル) 「この月の十四日になん、草の庵まかり離れて、深き山に入り侍りぬ」（同・若菜上・三・二八七）

右はいずれも話し手が自身のこれらの行為・事態を語る例である。これらに「警告・威嚇」の意が全く無いことは言うまでもあるまい。これによって、「ぬ」が「警告・威嚇」の意味を含む時、未完了事態の意味で使われる、とする氏の唯一の根拠は完全に崩壊する。

なお、(ヌ・ル)は明石入道が隠遁の意向を伝える消息の一節で、(ヌ)の二つの波線部「ぬれ」も未完了事態の表現であるが、「文の終止」や「終止形」の例ではない。即ち、未完了事態の表現は文中の位置や活用形の如何には関しない。

関連して次に「ぬべし」の形をとる場合を見る。

〈Ⅳ〉

(ヲ) 楫取りもののあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早く去なむとて、「潮みちぬ。風も吹きぬべし」と騒げば、船に乗りなむとす。(土左日記・十二月二十七日)

(ワ) 楫取りら、「黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。御船かへしてむ」といひて、船帰る。(同・一月十七日)

(カ) 「いで給ふべし」と(カネテ申シ附ケガ)ありつれば、人々、声作り聞えて、「雨降り侍りぬべし」などいふに(源氏・紅葉賀・一・二八七)

(ヲ・ワ)では発話中の波線部がそれに続く推量判断の根拠をなしている。また(カ)の波線部は、供人が殊更に咳払いをして合図し、「早くお出かけにならぬと……」と言っているのである。こうした文脈や場面を見逃してはならない。

更に(ワ)の「御船かへしてむ」は楫取り自らの決意の表明であつて、決して他者に向かってその行動を促しているものではない。この事実は極めて重要である。

以上、氏の言うところを全面的に否定した。「ぬ」は事態の完了・未完了に拘らず、確述(強調)の機能を持つことが理解出来れば事は足りる。

五 (二) 1

右に関し『広辞苑』について一言する。次は『広辞苑』第五版(一〇九八年一月)の「ぬ」の意味の第②ブランチの全文である。

②(文末に用い) そうなることへの警戒を相手に喚起する。…なってしまう。伊勢「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」

これを目にした時にはまさに愕然とした。余りのことに絶句した。

前項で、文献②の説が到底容認し得ぬものであることを明らかにしたが、それが同時期出版の『広辞苑』に逸早く取り入れられていたのである（右の文言は文献②とは相違するがほぼ同主旨と見てよからう）。

通常、辞書の記述の立場は通説尊重を宗とするものである。特に一般的な辞書の場合にその傾向は一層著しいものと思われる。しかるに、ここにはそうした姿勢は全く窺われない。無稽かつ奇矯の見解が学問的に何らの検証も経ぬまま、最も一般的な辞書と目される『広辞苑』に匆卒に取り入れられたことに筆者は愕き、呆れたのである。これでは一種の社会的公器を私するものではないか。

『広辞苑』は現在第六版まで刊行されているが、第四版以降は山口氏が編集に深く関わり、国語項目の総括責任者の任にある。そして第四版以降の山口氏執筆の国語項目には多くの問題を含んでいるが、これは氏が、第三版までの説を斥け、自身の考えを積極的に取り入れたことによるのであり、それによって、明らかに誤りとすべきもの、用例の不適当なもの等々が見られることとなったのである。右のブランチ②の問題もその一例である。

ただ、ここは『広辞苑』検討の場ではないのでそれらの詳細は予定の別稿に譲ることとする。）

五 (二) 2

さて、次に文献④『大辞典』の記述を見る。ここでは「ぬ」の「意味」として四ブランチを立てるが、次にその②ブランチの全文を引用する（記号・傍線筆者）。

②（終止形を用い）①相手に注意を促す意味で、②事態の実現の近いことを述べ、③次の行動に進むことを勧める。

「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」（伊勢・九）

（『大辞典』の「ぬ」の項には意味の「概説」はなく、単に四ブランチを並列するだけであるが、①ブランチの意味―詳細引用済―がそれに当たるものであろう。その内容は文献②の規定に等しい）。

氏はここでも『伊勢物語』の同一例をもって一ブランチを立てている。氏にはこのブランチの用例はこの唯一の例しかないのである。

である。既に検討を尽くしたが、これまでとの相違を中心に若干の検討を加える。

傍線部①・②・③中、僅かに認め得るのは③のみである。しかし、「ぬ」が未然の事態を表わし得るのはもともと「ぬ」が「時」には関係がないことによるだけのことである。

次に、右にはさすがに「警告・威嚇」や「警戒」の語は見られない。しかし、傍線部①はそれを和らげたに過ぎない。最も問題なのは傍線部③である。これは文献②や『広辞苑』（第五版）の説を更に一步進めたものであるが、未完了事態であれ、終止形であれ、「ぬ」が勧告の意を表すことなど断じてあり得ない。ここでその機能を担っているのは勿論この発話中の一文「はや舟に乗れ」である。その上に重ねて何を勧告しているというのか。右は要するに「はや舟に乗れ」とあるのに引きずられたものとしか解し様があるまい。根柢にあるこの思い込みから解放されない限り如何に説明の辞を弄してもそれは新たな謬妄を加えるのみである。

五 (三)

如上の、文献②以来の検討を経て次のように結論する。

- 一 そもそも、助動詞「ぬ」が如何にして「警告・威嚇」し、「警戒」させ、行動を勧告するといった詞（用言）的な意味を表し得るのか。
- 二 更に「ぬ」が如何にして上接する「日も暮る」の叙述内容とは全く無関係な意味を表し得るのか。
- 三 しかもまたこれは、自らの「ぬ」の定義にさえ合致せず、その埒外にある。無意図・自然発生の意を表す「ぬ」が如何にして右の如き用法を持ち得るのか。

右の中、三の自家撞着は論外として、一・二は日本語の助動詞の基本的な性質に乖離すること甚しい重大な問題である。この点が解明されない限り、右は到底何人の容認も得られまい。最後に一言すれば、氏は自らの思いつき―思い込みから遂に脱け出すことが出来なかったのである。と同時に、これは唯一無二の例を基に、好んで異を立て、奇を衒ったものと言わねばならない。

六

六(一) 1

新たな問題に移る。文献②には、右に検討してきた例文13に続いて次の二例を取り上げている。

更に次のような例も既に終った事態を表すものではない。

14 散りぬとも香をだに残せ梅の花恋しき時の思ひ出でにせむ(古今集・春上・四八)

15 みなせ河ありて行く水なくはこそつひに我が身を絶えぬと思はめ(同・恋五・七九三)

ここに挙げた「ぬ」が未完了の意味につながるのには、「散りぬとも」の例でいえば「とも」に、「みなせ河」の例でいえば「思はめ」に、それぞれよっているといえる。「とも」「む(め)」は共に未実現を指示するがこのように、他にそれを示す語と共に使うことでその語の表す時点に移るといえるのは、「ぬ」自体は、それが何時の事であるかを示す意味を本来的には持っていないからといってよいであろう。(一三頁。傍線筆者)

右もまた妄断にすぎないが、一往取り上げることとする。先ず例文14の「散りぬとも」に関し、「とも」の用法を一瞥する。

石上降るとも雨に障らめや妹に逢はむと言ひてしものを(萬葉集・四・六六四)

露霜の消やすきわが身老いぬともまたをちかへり君を待たむ(同・一二・三〇四三)

右もまた実現していない事柄を仮定したものである。これは先に氏の言う

「とも」は未実現を指示する。……A

に相当する。

ところで、文献①(『別巻』)の「とも」の項で氏は次のように述べていた。

「とも」は、仮定逆接と言われるが、終止形に付く語であって、現在の事態をもとに、そのような状態においても、これから先には次のようなことになるであろうの意を表すことがある。

鎖し籠めて、守り戦ふべきしたくみをしたりとも、あの国の人をえ戦はぬなり。弓矢して射られじ。かく鎖し籠めてありとも、

かの国の人來ば、みなあきなむとす。あひ戦はむとすとも、かの国の人來なば、猛き心つかふ人も、よもあらじ」(竹取物語)

「したりとも」「てありとも」「あひ戦はむとすとも(＝相手になつて戦おうとしていても)」の、^(ママ)どれの例も、その上に述べられ

ている内容は、現在の事態である。今、そうなっているけれども、未来においては、それに応じて予想される事態とはならず、以下のようになると述べるものである。(文献①一九三頁)

ここでは三例の「とも」は「どれの例も」「現在の事態である」という(ただし、第三例の解釈には問題があるが、今は措く)。これを先の氏の説明に準じて表せば

「とも」は実現を指示する。………B

となる。これによつて氏の論拠は完全に瓦解する。

「とも」は逆接仮定条件を表すが、その条件の内容までは規定しない。「とも」の「と」は単にその上接部を指示するだけである。これは例えば引用を示す格助詞「と」がならその引用部分の内容を規定しないと軌を一にする。要するに「とも」は決して直ちに「実現」「未実現」を指示するものではない。先の説明はおそらく「とも」が仮定条件を表すということから、それを「未実現を指示する」と短絡したものであろう。

ここで注意すべきは、右A・Bのいずれであるかを決めるのは場面・文脈によるのであつて、「とも」によるのではないことである。従つて、十分な場面・文脈が与えられなければ、その決定は困難であり、その故に解釈の揺れることがある。その点でよく知られた例は

ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも(萬葉集・一・三一)

であろう。佐伯梅友氏は夙に『國語史 上古篇』(昭和二年二月)において

この「淀むとも」も修辭的假定で、「淀んでゐるが、さう淀んでゐたところで」の意と見るべきであらう。「萬が一淀むといふやうなありうべからぬ事件が出来るとも」といふやうに見る説には従ひ難い。勿論語法上からはいづれとも決し難いが、事實さうなのでなからうかとも思はれ、またさう解した方が、歌としてもよいやうに思ふのである。(二一〇頁。ゴシック・傍線筆者)

と解している。なお、この説の詳細は初め「奈良文化」(三〇号、昭和二年六月)に『「淀むとも」考』として発表されたものというこ

とであるが、後の『萬葉語研究』（初版昭和一三年、再版昭和三八年）によって広く知られるようになったものであろう。現行の『萬葉集』の注釈書類もほぼこの説に従っている。

なお、右の傍線部には、修辭的仮定か否か語法上は決し難いとあるが、同じ「淀むとも」であっても

松浦川七瀬の淀は淀むとも我は淀まず君をし待たむ（同・五・八六〇）

の場合は文脈（「淀」が提示されていること及びその「淀」と「我」とが対比的に表現されていること）から容易に修辭的仮定と判断されるであろう。

次に同様の例を追加しておく。

高円の峯の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや（同・二〇・四五〇七）

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずともわれし知れらば知らずともよし（同・六・一〇四八）

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく（古今集・六・三三五）

右の第一例は高円の離宮即ち亡き聖武天皇の離宮を偲んで詠んだ五首中の一首であるが、最初の四五〇六番には

高円の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遠退けば

とあり、「離宮は荒れてしまった。しかし、たとえ荒れてしまったとしても、……」と解すべきものである。

第二例は二句に「人に知らえず」とあり、三例の「知らず」が既定の事実であることは言うまでもない。「人は知らない。しかし、たとえ人はしらなくても……」を繰り返したものである。

第三例も同じく「花の色は雪にまじりて見えない。しかし、たとえ見えなくても、……」の意である。次に、

わが身は女なりとも、敵の手にはかゝるまじ。（平家物語、一一・先帝身投）

これは二位殿（平清盛の妻）の言葉であるが、先ず「わが身は女なり」と断定し、次いで「とも」によって、「たとえば、女であっても」と仮定条件を形成して下に係ってゆくのである。

以上を踏まえ、一往の結論を示す。氏は二重の誤りを犯しているのである。一は「とも」を直ちに「未実現を指示する」ものとするこ

と、二は問題の「散りぬ」の「ぬ」を「未完了」の意とすることである。尤も、二は一の自らの勢であるから、これは結局最初の迷妄に帰すべきか。

六（一） 2

次に、この歌の「散りぬ」の意味を『古今集』の歌の排列の観点から一瞥する。

『古今集』の巻一春上の三二番から四八番までの梅の花一七首の内、三二番から四四番までの一三首は「咲く梅」、残る四五番から四八番までの四首は「散る梅」の歌である（松田武夫『古今集の構造に関する研究』、小泉弘『諸註集成古今和歌集選』）。「散る梅」の初めの四五番の歌を次に引く。

家にありける梅の花の散りけるをよめる

暮ると明くと目かれぬものを梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

右四五番で既に「散る梅」を詠み、かつ右両氏の見解によれば続く「散る梅」グループの最後に位置する問題の歌が未だ散る以前の状態を詠んだものとは到底考え難い。『古今集』特に四季部の精密な排列意識については既に周知の事と思われるが、その点に照らして、少なくとも、この歌で梅の花は散っている、散りつつあるものでなければならぬ。夙に『正義』に「散ゆく花に打向ひていへる也」と指摘する如くである。従って、山口氏の散っていないという説明（取意）はこの点から見ても成り立ち得ない。

六（二）

次に、いま一例の例文15について見る。ここで「思はめ」の「む」によって「我が身を絶えぬ」を未完了の意味とするのは例によって歌中の引用部と地の部分とを識別せぬことによる誤謬である。この歌は勿論

みなせ河ありて行く水なくはこそ「つひに我が身を絶えぬ」と思はめ

という構造であり、「思はぬ」の「む」は括弧内の意味にはいささかも関しない。即ち、右の「む」が「ぬ」の意味を左右することはない。更に「む」が「未実現を指示する」というのも分明を欠くが、仮にそれを認めたとしても、右でそれは「む」の上接部「思ふ」についてのみ言うべきものであって、決してそれ以外に及ぶものではない。それが日本語の助動詞の基本的な性質である。以上はほとんど自明のことに属しよう。類似の問題をこれまで既に繰り返し指摘してきた（拙稿④・⑤）。これは謂わば古文解釈の初歩に属するが、この程度の解釈を基に助動詞の意味を論じられたのでは読者は随分と迷惑しよう。

以上、文献②において氏が問題とする「ぬ」の例のほとんどを取り上げ詳細に検討したが、そこには先の「つ」の説と同様一として認むべきものがない。文献②は大学の紀要論文であるが、概言すれば、それはほとんど論文以前のものでしかない。

七

七（一） 1

次の新たな問題に進む。以下は文献③『日本語を考える』の一節である。ここでは「つ」「ぬ」と上接する動詞の意味との関連を明確に否定するなど、先の文献②「古代日本語における時間の意味」における見解が一層顕然化しており、やや繰り返しの感があるがその一部を引用する。先ず、

I 「つ」は、前に来る動詞の表す内容の実現が、誰かそれを意図する人があつてしたことを示す働きがあり、「ぬ」は、その事態が誰の意図にも基づかず、自然と生じたことを示す働きがある。

II ①以前から前に来る動詞の意味内容に基づいて使い分けられるとされることがあるが、②「つ」「ぬ」のどちらを選ぶかは、そこに誰かの意図が介在したかどうかの、話し手の判断によると考えるのが妥当である。

として、「雀の子を犬君が逃がしつる」（若紫）の例を引き、

III 「逃がしつる」と「つる」（「つ」の連体形）を使ったのは、③前に来る動詞が「逃がし」であるからそうなのでなく、「逃がす」事態を招いたのは、犬君のせいだと、④彼女の犬君を責める思いがこもったからである。（中略）。その結果、動詞は「逃がし」

になり、事態を招いた犬君を責める気持ちが「つ」に現れたと考えられるのである。

㉔そういう意味で、「つ」「ぬ」の区別は主観的である。(一九九頁。記号・傍線筆者)
とする。右について一言する。

Iの「つ」「ぬ」の意味は文献②を承けるが、それが到底認め難いものであることはこれまでの検討によって既に明らかであろう。IIで、「つ」「ぬ」が「前に来る動詞の意味内容に基づいて使い分けられる」ことを否定し、その選択はそこ(事態の実現)に誰かの意図が介在したか否かについての話し手の判断によることを主張している。しかし、ここには一切その論拠が示されていない。根拠なくして「妥当」と言うのは単なる強弁にしか過ぎない。後述(七(二)1項以後)の検討によってそれが明白となるであろう。

具体例を述べるIIIでは、動詞が「逃がす」の故に「つ」が用いられたのではないとする。けれども「逃がす」には「つ」しか接続しない(既述「三(二)2(1)」項参照)。これは客観的な事実である。従って、これは話し手の判断によって「つ」を選択したものではない。この一事も右IIの主張を明確に否定する。

根本的な問題はこれに尽きるが、以下若干補足する。

意図の介在についての話し手の判断(III㉔)と、話し手がその行為の主体を「責める」こと(III㉔)とは別な事である。氏はほとんど無意識的に、無造作に二つを同一視しているが、両者を混同することは許されない。既に「三(二)4(5)」項で見たとおり、氏は文献④では、意図的な事態の発生の場合(「伏籠の中に、籠めたりつるものを」他)をプランチ①、「責める気持ち」の場合(「雀の子を犬君が逃がしつる」他)をプランチ②として両者を区別している。つまり「責める気持ち」などという事は(仮にそれを認めたとしても)決して「つ」の意味のすべてを覆うものではない。事は主張の中心に関わる重大な問題であるが、先の説明には明らかにその認識が欠如している。

因みに言う。本稿の最初に詳細に検討したように『別巻』ではまさに上接する動詞の意味に合せて「つ」「ぬ」の意味を規定していたのではなかったか。にも拘らず右の「以前から……とされることがあるが」(IIの㉔)などという表現はまるで他人事のような書き振りではないか。(5)

七(一) 2

次は文献④『大辞典』の「ぬ」と「つ」の違いの項で、「つ」「ぬ」の前に来る動詞の意味の区別をめぐる諸家の見解の表示(前掲「三(一) 2」項)に続く説明である。なお、表示の松下説の語句についての若干の説明(引用略)を含め、これが文献④の「ぬ」と「つ」の違いの説明の全文である。

I これらの説で「つ」は意図的、「ぬ」は自然的という差で捉えることが多い。しかし、それでは「見えつ」などの例で、「見え」は意図的でなく自然的であり、それなのに、「つ」が付く理由が理解できないことになる。

II それよりも、①この二語は助動詞であって、②話し手の判断を主とすると考えると、「つ」「ぬ」は前に来る動詞の意味に関係なく、そこで表されている内容が、③当事者の意図に基づき生じるならば「つ」、意図がなく自然に生じるのであれば「ぬ」と、それぞれ区別するべきである。④確かに、「雨降る」であれば「ぬ」が使われて「つ」が使われないことがあって、動詞の違いに基づく使い分けがあるようにも見えるが、それは、「雨降る」という事態が誰かの意図に基づいて生じるなどがあり得ないので、その言い方が行われないからである。⑤つまり、「つ」「ぬ」共に、前の動詞の意味に基づき使い分けられるのではなく、そこで表された内容と直接にかかわる語ではなく、事態に対する⑥当事者の意識の問題なのである。(六〇〇頁。段落・記号・傍線筆者)

右は、Iで諸家の説を否定し、IIで「つ」「ぬ」の意味は当事者の意図の有無によるとの自説を主張する。中心をなすIIを見る前に先ずIについて一言する。これは表示した諸家の見解を正しく伝えていない。Iの波線部は、諸家が「つ」「ぬ」自体の意味をそれぞれ意図的・自然的と捉えているとしか読めないが、これらは明らかに事実と反する。しかもまた、そもそも先の表示は「つ」「ぬ」に上接する動詞の意味の区別をいうもの(表示の実際はともあれ、その意図で示したもの)であった。従って、これは次のようにあるべきものである。

これらの説で「つ」は意図的、「ぬ」は自然的《な意味の動詞に接続する》という差で捉えることが多い。

以上は単なる舌足らずで済むような問題ではない。また、右の如く補充して初めて「しかし」以下との整合も保たれようと思う。

しかも、先のⅠは、「つ」は有意的・意図的な意味、「ぬ」は自然的・無意図的な意味を表すとする氏の文献②以来の持説をも自ら否定するものであって事は重大なのであるが、氏には更にその意識はないようである。

次にⅡの検討に進むが、このさして長くもない説明にもまた幾つかの問題を含む。右には

①話し手の判断

②当事者の意図

③当事者の意識

とあるが、先ずこの「話し手」「当事者」「二語の意味的な関係が分明でない。勿論、「当事者」とは通常「その事に直接関係している人」の意であるが、氏自身はこの語をどう説明しているであろうか。次は右『大辞典』と同時期発行の文献①の「つ」の項の記述である。

当事者（その行為をする人のみでなく話し手のこともある）（八五二頁、〔学習〕欄。傍線筆者）

更に『広辞苑』は「話し手など当事者の意図……」と説明している（第五・六版の「つ」「ぬ」の項。山口氏執筆。『広辞苑』については「五（二）1」項で触れた）。

右によってもこの語の意味は依然として明らかでない。即ち、前者は行為の主体を中心としながら、話し手をも含む。後者は「話し手など」とあり、話し手を中心としながら、それ以外の何者かを含む。なお、ここでは話し手と第一人称とを区別していないが、そのことも話を甚だ分かり難くしている。要するにいずれにも厳密な規定は見られず、遂に曖昧さを免れ得ない。ただし、前掲Ⅱ③の「当事者」は（行為の主体）の意であろう。これは『大辞典』「つ」のプランチ①に「その事態の発生がそれをした人の意図に基づいた云々」とあることによっても確かめられようと思う。

以上をおさえた上で次に問題の中心に入る。Ⅱ①の部分には次のようにある。

④話し手の判断を主とすると考えると、

「つ」「ぬ」は前に来る動詞の意味に関係なく、

⑥そこで表されている内容が、当事者の意図に基づき生じるならば「つ」、意図がなく自然に生じるのであれば「ぬ」と、それぞれ区別するべきである。

しかし、右⑥は前提である①を承けたものになっていない。即ち①「話し手の判断」と②「当事者の意図」とは勿論その義を異にし、かつ無関係である。また前者は決して後者を包摂し得ない。従って、右は次のように説明しなければならぬ筈のものである。（なお、傍線部「そこで表されている内容」を先の文中の「事態」で代表させる）。

事態が当事者の意図に基づき生じたと話し手が判断したならば「つ」を用い、

事態が当事者の意図によらず、自然に生じたと話し手が判断したならば「ぬ」を用いる。

右は前掲「七（一）1」項所引文献③のⅡ⑥によっても確認されよう。次にこれを具体例をもつて示す。先ず「つ」の場合、先の例文

5「雀の子を犬君が逃しつる。伏籠の中に籠めたりつるものを」の例で言えば順に次のようになる。

事態が犬君（当事者）の意図に基づき生じたと紫上（話し手）が判断したから「つ」を用いた。

事態が紫上（当事者）の意図に基づき生じたと紫上（話し手）が判断したから「つ」を用いた。

次に「ぬ」の場合、例文1同8の「今はただ思ひ絶えなむ」の歌の例で言えば次のようになる。

事態が道雅（当事者）の意図によらず、自然に生じたと道雅（話し手＝作者）が判断したから「ぬ」を用いた。

（内親王の許に通うことを厳しく止められた事実を「自然に生じた」ことと言いか否かはこの問題ではない。）

先に、氏には「話し手」と「当事者」との区別が曖昧である旨指摘したが、先のⅡ①では更に「話し手の判断」と「当事者の意図」とが識別されていないのである。しかし、事態の発生が「当事者の意図」によるか否かは「話し手の判断」の対象であって、両者は峻別すべきものである。

問題は更にⅡ末尾にも顕著に現れている。③の「つまり」以下はこの項の結論と思われるが、ここでは「当事者の意図」を「話し手の判断」と同義に用いているようである。しかし、これは到底容認し難い。既に見たように「当事者」を無限定に「話し手」とすることは出来ないだけでなく、「意識」と「判断」とは全く異義の語だからである。（なお、この③の「当事者の意識」という言い方は直接にはそ

れに先立つ⑥の「当事者の意図」を承けたものであろうが、「意図」を「意識」と換言し得ないこと、また言うまでもなからう。

用語がこれほど杜撰では如何なる主張も成り立たない。否、これは単に用語の問題に止まるまい。氏には自らの論旨が明確に把握されていないと見るべきであろう。それは右に筆者が敷衍・整理したところと比較すれば瞭然たるものがあると思う。因みに先の氏の説明は、諸家の説を紹介する、前掲の、あの信じ難いほど粗雑な表示に続くものである。

次は右の説明中の具体例について見る。

『雨降る』という事態が誰かの意図に基づいて生じるなどがあり得ないので、その言い方（「雨降りつ」が行われない」という（Ⅱ②）が、これは明らかに事実に反する。（後に触れるように、文献⑤では氏自身が「降りつ」の三例を挙げているのであって、ここは何の調査・考察にも基づかぬ故の誤謬であろう）。

次に降雨・降雪を「降りつ」と表現した例の一部を挙げる。

わが袖に降りつる雪（萬葉・一〇・三三二〇）

秋の夜に雨と聞こえて降りつるは（後撰・七・四〇七）

日ごろ降りつる名残の雨、いま少しそ、ぎて（源氏・蓬生、一・二五一）

はだら雪、ふたたび許ぞ降りつる。（蜻蛉日記・末尾）

氏によれば、これも誰かが意図的に降らせたことにならねばならぬ。否、氏によればそもそもかかる表現はあり得ない筈ではないか。次に動詞「見ゆ」の場合について見る。「つ」はその事態が当事者の意図に基づき生じたことを示すという（Ⅱ①取意）。ならば、次の例は誰か当事者の意図によって生じたことになるのか。『萬葉集』には「見えつ」が七例あるが、次にその中から「夢に見えつる」の二、三の例を引く。

生きてあらば見まくも知らず何しかも死なむよ妹と夢に見えつる（萬葉・四・五八一）

門立てて戸も閉したるを何処ゆか妹が入り来て夢に見えつる（同・一二・三一七）

波の上に浮寝せし夜何と思へか心悲しく夢に見えつる（同・一五・三六三九）

右三首で、夢に相手が現れたのは歌の作者自らの意図によるものなのか。それぞれの波線部（疑問詞）の意味を無視することは許されない。しかも、古く「夢に見えぬ」といった例は皆無なのである（『萬葉集』及び八代集）。従って、ここでも「夢に見えつる」「夢に見えぬ」という二つの表現の中から作者が前者を選択したのではない。更に、「見え」は意図的でなく自然的であらうというが、その「自然的」なるものを当事者の意のままに操る事が出来るのか。自ら然るものを他者の意図によって左右することは出来ない。自発の「る」「らる」に命令形がない事を思え。

更に、先に検討したように『大辞典』の「つ」の項のブランチ③では「見えつ」（思ひつつ寝ればや）他の例を挙げ、右とは全く異なる規定をしていたのではなかったか。これではその場で適当に場当たり的な説明をしているとしか言い様があるまい。

先の主張において具体例は僅かに二語、しかも「見ゆ」「降る」といういずれも「つ」「ぬ」が共に接続する動詞をもって説明しようとしたことがそもそも誤りなのである。これでは最初から動詞による使い分けの当否を説明出来る道理がないのであり、右の如き自家撞着もその自らの帰結である。この問題の解明には地道な調査と深い洞察とを必須の条件とする。

以上、氏の言う「つ」「ぬ」の意味、延いてその相違が到底認め難いものであることを氏自身の説明によって確認した。

要するに、氏はここで自らの旧説を含め、動詞の意味による「つ」「ぬ」の使い分けを否定しているのであるが、この見解は現今の諸家の見解とは大きく異なる。以下、この問題について検討する。

七（二） 1

さて、「つ」「ぬ」の使い分けは、動詞の性質によるとするのが一般である。これは現在ほとんど通説と見做してよからうと思う（詳細後述）。しかし、山口氏はそれを否定し、それは話し手の判断によるとしたのであるが、氏の最近の「つ」「ぬ」の見解は本居宣長の『玉あられ』の説に密接に関わっている。よって次に『玉あられ』の説を示す。

I 詞によりて下を、「つる」といふべきと、「ぬる」といふべきとの差別あり。たとへば「あり」といふ詞の下は、必「有つる」との

みいひて、「有ぬる」といふことはなし。「見る」「聞」も、「見つる」「きゝつる」といひて、「見ぬる」「聞ぬる」とはいはず。又「ちり」「ふり」などは、「ちりぬる」「ふりぬる」といひて、「ちりつる」「ふりつる」とはをさをさいはず。

Ⅱ 又「つる」にても「ぬる」にてもよき詞もあり。

Ⅲ 又「つる」「ぬる」といふを、事によりては、「たる」といひてよき所あり、「ける」といひてよき所もあり。

Ⅳ 然るに近き世の人は、これらのわきをしらず、みだりなる中に、①「つる」といふべきを、「ぬる」といふことの殊におほき也。大かた初學の輩などは、「つる」といふことをば、しらざるが如くにて、皆「ぬる」といへり。

② 又「たる」或は「ける」といひてよき所をも、今の人多くは其味をしらず、皆「ぬる」といふ。これら古の歌に心をつけて、つねによく見おきて、その例をしるべき也。(『本居宣長全集』五・四七八頁。「つる・ぬる・たる・ける」の項。いま私に改行し、記号・傍点線・「」を附す)

右が該部分の全文である。山口氏は文献⑤『日本語の論理』(第六章第一項「『つ』『ぬ』、これまでの解釈」)において右全文を引用し、次のように言う。先ず、前半部について見る。

(一) ここで、宣長は、「有り」「見る」「聞く」の後には「つ」とだけいって「ぬ」とはいわず、「散る」「降る」の後には「ぬ」とだけいって、「つ」とはいわないとして、^④動詞の中には、後に「つ」が付くか、「ぬ」が付くかの決まっている語があった。ただ、その後に、「『つる』」にも「ぬる」にもよき詞もあり」といって、後に「つ」「ぬ」のどちらも付く動詞があり、^⑤語によって使い分けるといふ区別がすべての動詞に及ぶわけではないことも示した。(二四三頁。記号・傍点線筆者)

右は『玉あられ』の内容を要約・紹介したもので、殊更言うべきことはない。では、後半部についての次の解釈は如何。

(二) 更に、「つ」「ぬ」というのを、「たり」を使っても、「けり」を使ってもよい場合があるとしている。これは、「つ」や「ぬ」が使われる所に、「たり」や「けり」を使っても意味が変わらないと言っているとしたか思えないが、語が違っても意味が同じという考えは、今の立場からは納得できない。……この部分での宣長の真意は理解できない。この四語は、それぞれ、平安時代までは、それぞれ、独立した機能を持ち、異なる意味で使われていたのであるから、互いに取り替えても意味が変わらない場合があるとい

うのは納得できない。宣長の中には、或いはもっと別の深い考え方があったのであろうか。(二四三・二四四頁)

これを読んで啞然とした。なんと、氏は、宣長が「つ」「ぬ」と「たり」「けり」とを同義と解しているとし、その真意は理解できない、納得できない、という。まことに驚くべき読み方であり、ほとんど論評の限りでないが、一往、若干の検討を加える。先のⅢには「事によりては」とある。即ち、宣長は表現内容によつては「つる」「ぬる」でなく「たる」或は「ける」と表現してよい所もある、としているのである。更に、これを承けてⅣでは「然るに近き世の人は、これらのわきを、みだりなる中に」「たる」或は「ける」といひてよき所をも、今の人の多くは其味を失はず、皆『ぬる』といふ」としている。これは右四語の「わき、」(区別)を混同してはならない旨を明確に述べているのである。氏は「宣長の中には、或いはもっと別の深い考え方があったのであろうか」などと言うが、宣長の文章は「初学の輩」を対象として簡潔・平明、段落の構成も整然としており、その論旨に寸毫の疑念をさしはさむ余地はない。なお、改めて例示するまでもないことであるが、Ⅲの「事によりて」の表現例を補注に挙げておく。(6)

次は右の引用に直接するものである。

(三) A 宣長は、語によつては、「つ」も「ぬ」も、どちらも付く動詞があり、動詞によつて区別されることはないとしている。(二四四頁)

B 既に宣長もいつていたことであるが、用例から見ると、「つ」「ぬ」の使い分けを動詞に求めることは正しくない。また、宣長が挙げた語の中でも、必ずしもその例は多くないが、「降る」などは「降りつる」といった例も認められる。(二四五頁)

として、その後に「降りつる」の三例(詳細後述)を挙げ

「つ」「ぬ」の二語が、前の動詞如何で使い分けられるという考えには賛成できない。更に、「見ゆ」には「つ」「ぬ」どちらも続いているとして、各二例を挙げる。(詳細後述)そして、そこから

C 同じように、「つ」も「ぬ」も続く動詞の例は多くあるのであつて、そこから考えても、この二語の使い分けが前に来る動詞によつて決定されたのではないことは明らかである。(二四八頁)

ここに至つて氏は宣長説を全面的に否定する。しかしこれは到底認められることではない。第一にAは甚しい誤解である。否むしろ曲

解というに近い。宣長は前掲Ⅰで「つ」「ぬ」が「詞」（動詞）によつて区別されることを言い、続くⅡでは「又」例外の「詞もあり」としているのである。Ⅱは決してⅠを否定したものではない。それは前掲Ⅳの①を併せ見れば何人にも瞭然たるものがあるろう。

次に、Bの「用例」云々も認め難い。全く事実を無視したものだからである（詳細後述）。また、それを「既に宣長もいつていたことである」というのも既に確認したように誤解乃至曲説なること明らかである。

要するに氏には『玉あられ』の文章が全く読めなかったのである。あるいはそれを曲解したのである。氏の「つ」「ぬ」の説（動詞の意味による使い分けの否定）はかかる信じ難いほどの解釈によつて『玉あられ』の説を否定したところに発したものであることを先ずここで確認しておく。

Cは、動詞による使い分けを強く否定する。しかしながら、右の傍線部はなんらその論拠たり得ない。これは僅かに「降る」と「見ゆ」との二語の場合をもとに「同じように、「つ」も「ぬ」も続く動詞の例は多くある」として一挙に拡大解釈したものであり、そこにはなんら実証の裏づけがないのである。更に、このような問題の場合、単に「多い」とか「少ない」とか言うだけで、その実数乃至比率を示すことがなければ、それはほとんど説得力を持たない。この問題について多くの頁を費やしながらどうしてその実態を提示することが出来ないのか。また、この問題は少なくとも時代ごと、あるいは『萬葉集』『源氏物語』といった作品ごとに調査する必要があるが、果たして氏はそうした調査を尽しているのだろうか。

七 (二) 2

ここで動詞と「つ」「ぬ」との関係についての従来の研究業績を一瞥する。先ず、諸家の研究中、管見の論の一部を挙げる。

- ① 小林好日「上代に於ける助動詞『ぬ』『つ』の本質」(『國語學の諸問題』所収。昭和一八年八月)
- ② 山崎良幸「詞と辞の接続における意味的關係」(『高知女子大学紀要』昭和二八年一二月)
- ③ 小松登美「連用形に続く助動詞『つ・ぬ』」(『解釋と鑑賞』昭和三二年一一月)
- ④ 山崎良幸「過去の助動詞」(『解釋と鑑賞』昭和三八年六月)

- e 宮田和一郎「助動詞『つ』『ぬ』の論」〔平安文学研究〕昭和三十八年六月
- f 宮田和一郎「語法的にみた助動詞『つ』『ぬ』上下」〔國文學〕昭和三十八年一一・一二月
- g 木下正俊「助動詞『ツ』と『ヌ』の区別は何とみるべきか」〔解釋と鑑賞〕昭和三十九年一〇月
- h 大坪併治「過去（回想）・完了の助動詞『ぬ』『つ』（國文學）昭和三十九年一〇月
- i 井出至「古代日本語動詞の意味類型と助動詞ツ・ヌの使いわけ」〔國語國文別刊「遠藤博士還暦記念國語學論集 特輯」昭和四一年六月）

① 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』（昭和四十八年三月）

k 伊藤慎吾『源氏物語の助動詞完了態用例の新研究上』（昭和五三年一〇月）

① 滋野雅民「今昔物語集における『つ』『ぬ』とにつく動詞」〔馬淵和夫博士退官記念國語學論集〕昭和五十六年七月）

先ず文献aの小林氏の論は宣長の『玉あられ』の指摘以後この問題に本格的に取り組んだ現代における最初のものである。本文九〇頁の他「紀記萬葉集に於ける『ぬ』『つ』一覽」一二頁を添える大部なもので、「つ」「ぬ」の接続例のすべてを具体的に挙げている。例えば、最初の動詞「あかす」は「あかしつらくも」（萬葉・四・四八五）の一例、第二の動詞「あく（明）」は「あけにけりわざも」（紀）以下「あけにけるかも」（萬葉・一五・三七一四）までの一〇例をすべて挙げる。最多数の例は「く（来）」の六六例、「つ」三例、「ぬ」六三例である。これは氏の論拠をなすものであると同時にこの問題を考える上で重要な資料となるものでもある。以下これを「一覽」と呼ぶ。右「一覽」について筆者が数えたところによれば、①「つ」の接続する動詞の異なり語数は七六、②同「ぬ」は一二三、③「つ」「ぬ」が共に接続しているもの一八である。

右に基づく氏の結論を次に引く。

以上「ぬ」「つ」の動作態につき、余の論じたことを約むれば、畢竟「ぬ」は動作の完了を云ひ、「つ」は完了と共にその結果の観念を伴ふものである。是を従来のやうに、その結び付く動詞の種類によって分たうとし、若しくは動作の有意自然などの差によって分たうとするのは、皆いづれも非であると云ふのである。（二二九頁。傍線筆者）

ここでは「つ」「ぬ」をその上接する動詞によって区別することを誤りとするのであるが、その論拠をなす実例の処理には幾つか問題を含む。即ち、「一覽」では接続助詞の「て」や終助詞の「てしか」「てしかも」「なむ」の「て」「な」をそれぞれ助動詞「つ」「ぬ」と解したり、あるいは例文の訓に誤りがあったり、あるいはまた動詞の自他によるとすべきものを一括したりした結果、同じ動詞に「つ」「ぬ」が共に接続する例が増えてしまったのである。

この点を正しながら考察したのが文献⑥・⑦の論である。特に後者は「記紀万葉祝詞宣命風土記をはじめ、歌経標式琴歌譜や仏足石歌正倉院文書に至るまでの、目に触れた限りのツ・ヌ全用例を集め」て考察し、右を補正したもので、その結論は次の如くである。

これを見て、上代に関する限り、ツ・ヌの使いわけは十中八九まで上に来る動詞の自他によると判断するのは自然の帰結であろう。

(中略)

やはり、最初にあげた宣長の「玉霰」の言は、厳しい実証主義と深い洞察力の持主にしてはじめて口にした言葉であったのである。この文献⑧の趣旨に従って筆者が「一覽」を補正した結果を次に示す。

①「つ」の接続する動詞の異なり語数は七四、②同「ぬ」は二二六、③「つ」「ぬ」が共に接続するものは存疑の二を除いて九である。削除あるいは分割等の補正の結果、それぞれの数値が変動しているが、最も注意すべきは③が半減していることである。動詞の異なり語数計二〇九中の九であるから、その比率は僅かに四、三%にしか過ぎない。この数値はやはり上代において動詞による「つ」「ぬ」の使い分けがあったことを如実に物語るものであると思う。

参考までに③の九語を挙げておく。

ぬ	つ	
一	三	在り
四	八	寝ぬ ^い
六三	三	来
一	六	偲ぶ
九	三	為 ^す
一〇	五	鳴く
二	一	降る
二	七	見ゆ
三	一	行く

次いで中古は如何ということになるが、文献⑥によれば、上代に比し「つ」「ぬ」いずれをも取り得るものが増え、その変化は上代「ぬ」が付く原則だったものに、「つ」がつくようになったのが多く、その逆は少ない、という。

文献⑥は『源氏物語』における「ぬ」「つ」と上の語との接続関係を追究したものである。文献④はこれを承け、簡約・補正したものであり、いま後者の結論を示す。

「ぬ」は客観界における必然的な事実の推移を述べるような場合に用いられる。(一九六頁)

「つ」は対象に対する言語主体の積極的、意欲的な関心を表現するような場合に用いられる。(一九八頁)
次に宮田氏の文献④の結論を見る。

宣長翁は、「つ」は他動詞につき、「ぬ」は自動詞につくといった。(中略) わたしは、宣長翁の説が確固不動なものだと信ずる。わたしの語法研究の結果からすれば「つ」は他動詞に、「ぬ」は自動詞に、という考えかたは絶対にただしい。一見、混乱しているがごとくに感じられる接続形式にはつねに出あうのであるが、注意ぶかく観察すれば、そのあいだに一定の秩序があり、語法がさだまっているのである。

氏の語法研究の精緻さは夙に知られるところであろうが、右は文献⑥とともに永年に亙る研究の結果として尊重すべきものと考えらる。

④の大坪氏の論では「つ」「ぬ」は動詞の意味によって八・九割ぐらい区別され、妄りに混用されなかった、としている。なお、この論は後若干補筆され、平安時代の調点語について

「ぬ」のつく動詞と「つ」のつく動詞とは、八・九割ぐらい区別され、自・他の相違に並行している。

とする(『古典語現代語助動詞助動詞詳説』昭和四四年四月・一二七頁)。調点語においても右の区別があるとの指摘は重要である。

①の吉田氏の論は『萬葉集』(塙本)について調査したもので具体例(使用頻度も)を挙げ、詳細である。二語の相違を次のように結論する。「ぬ」は自然的な様態としての時に、「つ」は故意的な様態の時に付く。「ぬ」「つ」の別は根本的には上接動詞の本来性によって区分されるが、二次的には上接動詞の用法の様態によっても変わってくるものである。(五七〇頁)

アスペクト

以上、上代・中古の論の一部について触れた。紹介しなかった論を含め、諸家の説は（文献①を除き）ほぼ動詞による「つ」「ぬ」の使い分け、別けてもその自他による使い分けを認めているものと解される。

右の諸家の研究業績と先の山口氏の所説との落差は余りにも大きい。諸家の業績に鑑みれば氏の言うところはほとんど研究の名に値せぬものであると言わざるを得ない。

七(二) 3 (1)

さて、次は文献⑤第六章第一項の一節である。ここでは「つ」「ぬ」について、「この二語の使い分けが前に来る動詞によって決定されたのではないことは明らかである」（二四八頁。前掲、宣長説否定の項）として次のように述べる。

I 「つ」には「つ」の意味、「ぬ」には「ぬ」の意味がそれぞれあった筈である。それが動詞との関係で使い易い・難いが出る。例を挙げて考えてみよう。例えば、「散る」であれば「散りぬ」となる場合が多いが、これが「散らす」であれば「散らしつ」となる場合が多い。恐らく、前者「散る」には「つ」が付きにくく、後者「散らす」には「ぬ」が付きにくかったのであると思う。

II 動詞の違いを考えると、「散る」は誰かがそうしようとしてなった事ではなく、事の自然な動きとしてそうなった。これに対して、「散らす」は誰かがそうなるように仕向けた結果の動きである。

III 《そして、それに応じて、「つ」「ぬ」が使い分けられ、そこから二語の意味を、動詞の意味に合せて、それぞれ、意図的な完了、自然的な完了と考えるのならば、「つ」「ぬ」の二語には、独自の意味がないことになって、それでは異なる二語を用意する必要はないのではないか。……》。やはり、「つ」「ぬ」の二語にはそれぞれ独自の意味があったと考えたい。

IV もし、意味の違いがあったとして、それでは動詞との結びつきに偏りが出るのを、どう考えたらよいのだろうか。その時考えられるのは、「つ」「ぬ」には違う意味があった。そして、右に述べたように、「散らす」の意味は「つ」の意味とはつながり易いが、「ぬ」の意味とつなげることは不自然になり、「散る」の場合は、これと逆な関係になるということである。（二四八頁。段落・記号・傍線筆者）

いま私にⅠからⅣに四分し、Ⅲの途中を一部（補足的な内容。約三行）省略したが、それを含め右のすべて（一頁余）が改行無し的一段落なのである。長文の引用を憚って何度か要約を試みたのであるが、結局それは断念せざるを得なかった。それは右の一段の論旨が実に分り難いことによる。実は原態のままでは何度繰り返し読んでもその論旨を理解し得なかったのである。内容の検討に入る前にその前提として先ず右一段の構成を確認しておく。

右の主旨は先ずⅢを除いてⅠ・Ⅱ・Ⅳによって把握すべきものであらうと考える。何故かと言えば、Ⅲは最後の「やはり」以下の一文を除き、この一段の論旨（「つ」「ぬ」には意味の違いがあった筈であること及び「つ」「ぬ」と動詞との結び付きに偏りが出ること）とは全く関係がないからである。そしてこれが分り難さの主因である。そのことを次に述べる。

ⅡとⅢの《Ⅱ内の前半部（考える）まで》との内容はこの論の冒頭（「（一）（一）」項）に検討した文献①（『別巻』）における「つ」「ぬ」の区別説そのものである。勿論、このような見解は氏の他には全く例がないから、右のように見て間違ひなからう。そして、Ⅲは結局その自らの旧説を否定したものと考えられる。ただし、Ⅲの表現はさながら他者の説を言うが如くである。何故かかる他人事のような表現がなされるのであらうか。ともあれ、こうした異質の問題が入り込んだ為にこの一段の論旨が甚だ理解し難いものになったのである。しかも、Ⅲは「そして、それに応じて」とⅡを承ける形で始まっていることもあり、何人もこれが本旨から逸脱したものとは考えないであらう。また、この語句もあつて、ⅢはⅡの内容をも否定するものとさえ錯覚させるのである。更に、初めに指摘したように、右全体が全く改行なしの一段落なのである。例によって、連想のままを書き流してなら顧みることのない結果であらうが、これでは読者は堪ったものではない。

右によってⅢを除くⅠ・Ⅱ・Ⅳの部分を検討する。

Ⅰは「つ」「ぬ」には「動詞との関係」で「使い易い・難い」があること、Ⅱはその「動詞の違い」について述べる。最後のⅣは「動詞との結び付きに偏りが出る」理由を述べているものようである。先ず、Ⅰ・Ⅱの要をなるべく原文に即し整理すれば次のようにならう。

散るⅡ事の自然な動きの結果……………「散りぬ」となる場合が多い。……………恐らく「つ」が付きにくかった。

散らすⅡ誰かの意図による結果の動き……………「散らしつ」となる場合が多い。……………恐らく「ぬ」が付きにくかった。

先ず右の二つの「多い」について一言する。この表現は精確ではない。何故なら、右は当然それとは異なる少数の例が存在することを含意するが、「散る」には「ぬ」のみが接続し、「つ」が接続することは全くないからである。また同様に、「散らす」には「つ」のみが接続し、「ぬ」が接続することは全くないからである（上代は前掲文献^{a・g}、『源氏』は筆者の調査、『今昔』は文献^①による）。氏の言は事実に基づいたものとは思われない。

更に、「恐らく」以下はそれぞれの「多い」理由を説明したものであろうが、これは無意味である。何故ならこれは、

「ぬ」が多いのは「つ」が付きにくかったからであらう。

「つ」が多いのは「ぬ」が付きにくかったからであらう。

というに等しい。ともに他の語に置き換えて推測しているだけで、一種の堂々めぐりに陥っているに過ぎない。

また、IVは「動詞との結び付きに偏りが出るのをどう考えたらよいのだろうか」というのであるから、その理由を述べた心算であらう。いま「もののようである」とか「心算であらう」とかいった言い方をしたのは何故か。それは氏の言うところは別に理由になっていないからである。即ち、「散らす」の場合、

「散らす」の意味は「つ」の意味とはつながり易いが、「ぬ」の意味とはつなげることは不自然にな（る）

とあり、「散る」の場合はこれと逆な関係になるというのであるから、

「散る」の意味は「ぬ」の意味とはつながり易いが、「つ」の意味とはつなげることは不自然にな（る）

ということになる。これはIの「多い」を「つながり易い」に、同「付きにくかった」を「つなげることは不自然になる」としたもので、Iと同様ただ他の語に置き換えたに過ぎない。それぞれ、何故「つながり易い」のか、何故「つなげることは不自然にな（る）」のか、問われなければ、何事も説明したことにはならない。氏は果たしてこれで理由を説明したことになると思っているのだろうか。

ここで、何故「つなげることは不自然になる」のかを「散らす」の場合について考えてみる。前述したように「散らす」には「つ」のみが接続し、「ぬ」が接続することは全くなかった。これは客観的な事実であり、言語の社会的慣習である。この客観的・社会的慣習に従わず、話し手の主観的な判断・恣意によって「ぬ」を「つなげ」た場合には「不自然」になるのである。「不自然」というのは当然「自

然」を前提としている。即ち社会的慣習として客観的に「自ツカラ然アル」ことに背馳するから不自然になるのである。

ともあれ、先の記述を整理すれば

「散る」の如く「ぬ」のつながり易い、自然的な動きの意味を表す動詞の一群（仮にA群と呼ぶ）

「散らす」の如く「つ」のつながり易い、意図的な動きの意味を表す動詞の一群（仮にB群と呼ぶ）

があることになる。氏は「動詞との関係」「動詞の違い」によって「つ」「ぬ」と「動詞との結びつきに偏りが出る」とするのであるから右は氏が躍起になって否定する通説―動詞による「つ」「ぬ」の使い分け―と同じことではないのか。どこに相違があるというのであろうか。

更に右に関して言う。A群・B群の動詞に共通する性質は何か。そしてそれは、例えば動詞の自他とは如何なる関係にあるのか。①自他と重なるのか、それとも②全く無関係なのか、あるいはまた、③それ以外の何かであるのか。右の如く「自然的な動き」の意味の動詞に「ぬ」、「意図的な動き」の意味の動詞に「つ」と整理し得るところを見れば、①を意味するものと解してよからうか。

重ねて言う。この段の氏の意図は前述の如く通説の否定にあるものと思われるが、右はその点一向に明らかではない。否、むしろ氏の意図とは裏腹に通説と同じことを言っているのではないか、更に言えば、それは自らの主張と矛盾し、それを否定するものではないかとさえ思われる。

以上、氏の言う「つ」「ぬ」と動詞との結び付きの問題を検討した。ところで氏の説はこの後果たしてどこへ向かうであろうか。

七 (三) 1

次は右に続く文献⑤第六章第二項「助動詞とは」の部分に見られる結論的な内容である。なお、これは文献⑤の結論であると同時にこれまでの氏の説の到達点ということになろう。（小段落の記号は前項に続く）。

V 「つ」「ぬ」は、前に来る動詞の違いによって使い分けられると考えられることがあった。A 実際は、それで区別できないことは、宣長も認めていたし、B 実例からもそうでないことは明らかである。しかし、そうと考えられる程に、前に来る動詞に偏りがあつたことも事実である。宣長の示した語でいえば、「見る・聞く」には「つ」が、「散る・降る」には「ぬ」が付くということになる。

VI 本書では、このような偏りが生じた理由を、①動詞の意味と「つ」「ぬ」それぞれの意味との間に、共に使われやすいものがあるからと考えた。②これまで考えたことに併せて、その点③(a)、も加えて、「つ」「ぬ」の意味を考えると、次のようになると思う。即ち、

VII 1 「つ」は①前に来る動詞の表す事態の発生に、自分もしくは誰かの思いがこもると話し手が判断したことを表すと考えられる。②これが「つ」の基本義なのではないか。

そして、③もし、動詞の表す内容が自分の行為であるならば、或る場合はその達成を誇る気持になるし、或る場合はその事を起こしたことでの自らを責める気持が加わることもある。また、それが誰かの行為であるならば、それへの賞讃となることもあり、また、非難となることもある。もちろん、このような、誇り・自責・賞讃・責めなどの意味は、「つ」の置かれた文脈上現れたものといべきであろう。

それに対し、

2 「ぬ」は①話し手を含めて動詞の表す内容の発生に誰の思いも加わっていない。いわば②自然にそうなったと話し手が判断したことを表す

と考えられる。(二五一頁。段落・記号・傍線筆者)

右Vの傍線部A・Bが否定されることは既に述べた。続くVI④では「つ」「ぬ」の付く動詞に偏りがある理由を述べる。

(先には「使い易い」とあつたものをここでは「使われやすい」とする。両者は観点を異にするが、その点は意識にないもののようにある)。

続く⑤の「これまで考えたこと」とは右Vの直前の「助動詞とは」と題する氏の助動詞説をさすものと思われる。その、約二頁に互る、例の初歩的な助動詞の解説から当面の問題に関してその要を引けば

付属語の表す内容は、自立語の内容に対して、話し手がそれをどう考えたかにある。「つ」「ぬ」の基本的な意味もその中で捉えられる。ということにある(取意)。

以上をおさえた上で右の論法を整理すれば次のようになろう。

VI ①動詞の意味と「つ」「ぬ」それぞれの意味との間に、共に使われやすいものがある。

②付属語としての「つ」「ぬ」の基本的な意味は、自立語の内容を話し手がどう考えたかにある。

故に

VII 1 「つ」は事態の発生に誰かの「思い」がこもると話し手が判断したことを表し、

2 「ぬ」は事態の発生に誰の「思い」も加わっていない、自然にそうなったと話し手が判断したことを表す。

(右は別に所謂三段論法ではない。従ってVIの①・②の前後は問わない。この二項は単に並列しているだけである)。

結論を先にすれば、この推論は到底成り立ち得ない。なぜなら一見して知られるようにここには論理的に大きな飛躍があり、VIIは如何にしてもVIの帰結たり得ないからである。

具体的に検討する。まず前提のひとつである①と結論のVIIとの関係について見るに、VIIに①が反映した跡は全然見られない。即ち、動詞の意味との間に共に使われやすいものがあるという「つ」を用いることによって何故誰かの「思い」がこもると話し手が判断したことを表すことになるのか。また、同様の「ぬ」を用いることによって何故誰の「思い」も加わっていない、自然にそうなったと話し手が判断したことを表すことになるのか。①は、動詞と「つ」「ぬ」との関係という客観的な事実をいうものと思われるが、それが如何にして直ちにVIIの「自分もしくは誰か」、同2の「話し手を含む誰か」の「思い」といった心情的なものに連なり、更にその有無についての話し手の判断を導き出すことになるのか。①とVIIとの内容には全くなんの関係も認められない。「その点も加えて」などというが、果たして何を加えたというのであろうか。どうしてこういうことが言えるのか、筆者には到底理解の限りでない。

次に前提のいまひとつの②は付属語としての助動詞一般の意味を「つ」「ぬ」に宛てたに過ぎず、従ってそれは結論の内容をなんら具体的に規定し得ない。

要するに、①・②はなんら前提の意味を持たない。換言すれば、VIIとVIの①・②とは完全に遊離している。即ち、結論には全然根拠がない。これが全く容認すべからざるものであることは以下の検討によって一層明白となるであろう。

七 (三) 2

さて、Ⅶについてのこれ以上の検討は後に譲り、ここで文献⑤に至るまでの氏の言う二語の意味の解釈の推移・変転を整理・要約し通覧する。なお、以下、《》の部分は筆者が意をとって補ったものである。

文献① (『別巻』一九八八年)

「つ」 意図した動作・作用の動詞につき、意図した事の完了。

「ぬ」 何の意図もなく生じた動作・作用の動詞につき、自然に生じた事の完了。

文献② (『古代日本語に於ける時間の意味』一九九七年)

「つ」 何者かの意図によって事態が発生したこと。動作主(自・他)への責めの意識が含まれる《こともある》。

「ぬ」 当事者の意図には基づかず自然と発生したこと。

文献③ (『日本語を考える』二〇〇〇年)

文献②に同じ。ただし、「つ」「ぬ」の選択はそこに誰かの意図が介在したかどうかの、話し手の判断による、とする。

文献④ (『大辞典』二〇〇一年。各ブランチの意味を記す。ここは特に文言を整理して示す)

「つ」 ① 事態の発生が動作主の意図に基づくことを表す。

② 動作主の意図的な行為ではなくとも、当事者からはそれを責める気持ちで用いた語。

③ 動作主の意図的な行為ではなく、当事者のそうしたらしいという気持ちから生じることを示す語。

「ぬ」 ① 誰の意図にも基づかず、ある事態が自然に生じることを表す語。

② (終止形の例、略)

まず、文献①は動詞の意味の差に応じ、それに合せて、「つ」「ぬ」の意味が規定されるというものである。この見解の当否については既述拙稿①に譲る。なお、この見解は後氏自ら否定していることは前述したとおりである。以下、文献②以降の推移を見る。

文献②・文献③では事態の発生に関わる意図の有無が「つ」「ぬ」を分かつ基本である。

続く文献④では「つ」の単独用法の意味が三分されるが、文献②・文献③で附属的乃至派生的な意味に過ぎなかった「責める気持ち」がここで独立したブランチとして立てられ、また併せて、「当事者のそうしたいという気持ち云々」も独立した一ブランチとなった。こうした経緯を経て遂に前掲文献⑤（『日本語の論理』二〇〇四年）の見解が出て来たのである。即ち、ここでは「つ」「ぬ」の相違は「思い」の有無になってしまった。しかも、それが「つ」の「基本義」だという。まことに驚くべきことであるが、しかし、問題はこれではない。「つ」についての次の記述（Ⅶ③波線部）を見よ。

もちろん、このような、誇り・自責・賞讃・責めなどの意味は、「つ」の置かれた文脈上現れたものというべきであろう。

「つ」の基本義が文脈上の意味とは何事であろうか。これには覚えす絶句した。この甚しい論理の破綻、矛盾はほとんど信じ難い底のものである。今更言うまでもない事であるが、助動詞の意味とは、個々の用例における具体相・特殊性を捨象し、そこに共通する内容を抽象したものである。その意味で、文脈上の意味と基本義とはまさしく具体と抽象、特殊と普遍との対極にある。従って、先の定義は先ず論理的に到底成り立ち得ない。この一句によって氏の説は根柢から自壊する。そしてこれは単にここ文献⑤に止まらず、文献②以降の氏の説のすべてに及ぶのである。

実は、右の記述を目にした時、筆者は一種の違和感を禁じ得なかった。碎いて言うと、「あれつ、変だな」と感じたのである。これは従来の氏の説とは全く相容れないものではないか、と。しかしながら、翻って思うに、先の

②基本義即ち③文脈上の意味、換言すれば、③文脈上の意味即ち②基本義

における②と③との関係は氏にとってはなんら矛盾・悖反せず、両立するものであるのかも知れない。「つ」の意味を

自分もしくは誰かの思いがこもると話し手が判断したことを表す。

とする限り、これは当然の帰結ということになるう。何となれば、個々の例の説明に際し、まさか

これも誰かの思いがこもっていると話し手が判断したことを表す。

かれも誰かの思いがこもっていると話し手が判断したことを表す。

とだけで済ます訳にはゆくまい。当然それぞれの「思い」の内容が問われるであろう。従って、例文ごとにそれぞれの文脈上の意味を当

てて説く他はない。その意味で、先の定義における②・③の並立は氏にとっては何の不思議もない。そこには寸毫の疑念もないから、以下「つ」の例文の説明はすべて氏の言う文脈上の意味を論うものになっているのである。

一方「ぬ」については「誰の思いも加わっていない」という。しかしながら、これも後述する氏自身の用例解釈によって忽ち破綻するのである。

なお、氏は右の「基本義」の他、「き」「けり」についても「本来の意味」「本義」「二語の本質」等の表現を繰り返しているが、それらについての概念規定は全く見られない。ここでは右の「基本義」の意味を各用法に共通する基本的な意味といたくくらいに解しておく。

七(三) 3

では、先の定義に基づく解釈の実際は如何なるものであろうか。氏は

この「つ」「ぬ」の解釈から、先の、「見えつる」「見えぬる」を例に考えてみる
として

- 16 思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを（『古今集』恋・五五二。小野小町）
 - 17 吹く風の色の千種に見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり（『古今集』秋下・二九〇。よみ人知らず）
 - 18 世の中を思ひ捨ててし身なれども心弱しと花に見えぬる（『後拾遺集』春上・一一七。能因法師）
 - 19 大将殿、かう静かにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、ましてことわりと思しなして（『源氏物語』賢木）
- について次のように説明する。（二五二～二五三頁）

16 小野小町の歌でいえば、「思ひつつぬれば（毎晩あの人のことを思つて寝たので）」ということ自分を自分から「私の思いが通じて、あの人が夢の中に現れたのか」というように、この場合でいえば、「私の夢にその人の姿が現れる（その人が私を思うようになった）」という事態は、私が思った結果であるという、いわば①喜びの思いが「つ」によって表されたと考えられるのである。……②前記

の思いがあったから「つ」が使われたのである。

右の解釈の当否の前提として、まず「見えつらむ」とは言うが「見えぬらむ」とは言わないという点についてだけ再確認しておく。既述のように「つらむ」と「ぬらむ」とが同一の動詞に接続する例は動詞「す」「来」の二語しかないのである（伊藤氏文献③三六八頁）。要するに、「つ」は「喜びの思い」を表すために選択されたものではない。右の解釈はこの点から見て初めから成り立ち得ないのである。本題に入る。右の「喜びの思い」は歌の上の句の内容をそっくり「つ」の意味に持ち込んだものであって、それは決して「つ」自体の意味ではない。

しかも、右は先の定義に則った説明にはなっていない。確認のために先の定義の内容を簡条的に示せば次のようになろう。

(イ) 「つ」は話し手の判断を表す。

(ロ) 判断内容は「……事態の発生に……思いがこもる」ということである。

ここで特に注意すべきは「つ」は右の判断を表すのみであつて、それ以上の意味を持たないということである。

この定義に即して、小町の歌を説明すれば次のようになる筈である。

「つ」は、私の夢にその人の姿が現れたという事態の発生に自分の思いがこもると話し手（作者）である私が判断したことを表す。

（ただし、この波線部は意味をなさぬであろうが）

「つ」自体が「喜びの思い」を表すものではないことはこれを見ても明らかであり、先の説明は明らかに定義を逸脱している。

次は例文17について見る。

17 「吹く風の」の歌でいえば、「色の千種に見え」たのは、「秋の木の葉の散」つたからであるが、実際にはそうではない物がそう見

えたということ、①「風」の方から、自分の視野に入つて来て、しかも、②その感動を捉えた自分の心の働きが③「つ」となつ

たと考えられる。④作者の感動の現れであらう。（記号・傍線筆者）

先ず右の行文を整理する。

①「風」の方から、自分の視野に入ってきて、しかも、

②その感動を捉えた自分の心の働き

が③「つ」となった。④「つ」は「作者の感動の現れであろう。」

右で①・②が何故に「しかも」(「その上、更に」)によって展開するのか。両者は全く異質であり、②は①に累加すべきものではない。また、氏は右の①・②を「つ」となった「理由とするが、

①「風」の方から、自分の視野に入ってきて

というのは、むしろ、氏の言う「ぬ」で表さるべき内容ではないのか(後の例文19『源氏物語』(賢木)の説明を見よ)。

以下、問題の核心に入る。ここには「感動」という語が二度出て来る。②の「その感動」とは「事態の発生」即ち「風」の方から、自分の視野に入ってきて」という事実の中にこもる感動を意味するものである。そしてそれを捉えた「自分の心の働き」が③「つ」となり、その「つ」は④の「作者の感動の現れであろう」という。ということは、「つ」は「事態の発生にこもる感動を捉えた作者の感動」約めて言えば「感動を捉えた感動」を表すことになる。この意味は筆者には何としても理解し難いが、ともあれ、ここで「つ」は感動を表すものであるとされたことは間違いないであろう。とすれば、これは明らかに定義と齟齬する。しかもこれは重大な相違と言わねばならない。前例同様、定義に即した説明をすれば次のようになるべきものである。

「つ」は、吹く風の色が千種に見えたという事態の発生に自分の感動がこもると話し手(作者)である私が判断したことを表す。

(ただし、この波線部も意味をなさぬであろう。そもそも、右の「事態の発生」(「風の方から…」)という外界、客体界の事実の中に、如何にして話し手他の主體的、主情的な「思い」が「こもる」と言い得るのか)

要するに氏は「動詞の表す事態の発生に」こもる「思い(感動)」と定義外の「つ」の意味(感動)とを混同しているのである。右の二つが識別されていないために例文の説明が訳の分からぬものになったのである。氏は果たして自らの定義の内容及び例文16・17の説明の文言の意味するところを把握しているのであろうか。

なお、右の説明（定義ではない）によれば、いずれにしても「つ」は感動の助動詞ということにならねばならぬ。（延いて、対する「ぬ」は無感動の助動詞か）。

さて、右の歌から直ちに想起されるのは

春霞色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも（古今集・春下・一〇二）

の歌であるが、この「つ」も同様に「感動を捉えた感動」を表すものとなるのであろう。類歌は幾つも見られるが、次に例文17同様結句に「なりけり」とある例（後撰集の第一例もそれに準ずる）の一部を引く。（ただし、結句の形式如何は上の句の「つ」の意味には全く無関係なことは言うまでもないが）。

草の糸にぬく白玉と見えつるは秋の結べる露にぞありける（後撰集・秋上・二七〇）

白雲の下りゐる山と見えつるは降り積む雪の消えぬなりけり（同・冬・四八四）

吉野山消えせぬ雪と見えつるは峰続き咲く桜なりけり（拾遺集・春・四一）

梅の花匂の深く見えつるは春の隣の近きなりけり（同・春・一一五六）

氏は先に例文13「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」の唯一の例をもつて、『広辞苑』（第五版以後）及び『大辞典』の「ぬ」の項で「ブランチを立てていた（既述、「五（二）1」・「五（二）2」項。それに比し、右には十分の用例がある。氏は何故「つ」を感動の助動詞とせぬのか。新奇な一説となったであろうに。

一方、「見えぬる」についての説明はどうなっているであろうか。

18 世の中を思ひ捨ててし身なれども心弱しと花に見えぬる（『後拾遺集』春上・一一七。能因法師）

これは、「花に見」られたのであって、自分の本意ではないという話し手の思いを「ぬ」で表したと考えられる。（二五二頁）
右の「ぬ」の意味は「自分の本意ではないという話し手の思い」だという。一読、啞然とした。氏は今、「ぬ」は誰の思いも加わっていないと定義したばかりではないか。

目を疑う自家撞着。一体、どうなっているのか。

これは読者を愚弄するものか。はたまた、著者の惑乱を示すものか。また、これでは「思い」の有無による「つ」「ぬ」の区別は無くなるから、これは延いて文献⑤の定義の否定をも意味する。氏は果たしてそのことに気付いているのであろうか。いずれにせよ、これはもはやまともな検討に値しない。問題はかかる尋常ならざる記述の所以が奈辺にあるか、であろう。同じことを既に拙稿④（二四頁他）でも指摘した。問題は右例文18に限らぬのであって、これは近年の氏の言説に常につきまとう疑団なのである。

なお、右の言葉から直ちに想起されるのは氏が文献①・文献②で繰り返していた「今はただ思ひ絶えなむ」の歌の説明である。そこには「ぬ」は「自分の本意ではないという思い」を表すであった（例文8）。氏はこれを強調・力説していたのではなかったか。ここではそれについて一言半句も触れることはないが、先の「ぬ」の定義（誰の思いも加わっていない）を主張するにはこの解釈を明確に否定・撤回しなければならない。同時にまた定義と右例文18との矛盾・撞着を解決せねばならない。ともかくにも右は正気の沙汰ではない。

19 『源氏物語（賢木）』の例は、「世ははかなきものに見え」たのは、そこに自分の働きかけがあったからでないことは、勿論である。「ぬ」が使われて当然である。（二五二頁。傍線筆者）

右で「見え」たのは「自分の働きかけがあったからでない」という。しかし、「自分の働きかけ」というのは、氏の言う「つ」で表さるべき内容ではないか。何故、自らの「ぬ」の定義を離れて他によつて説明するのか。これは「誰の思いも加わっていない」という自らの定義による説明が出来ないために他に求めたものではないのか。更に、ここは動詞「見ゆ」の性質から説明しているのであり、これは直ちに自説と矛盾する。何故なら、氏は上接する動詞の意味による「つ」「ぬ」の区別を否定しているのだからである。

なお、氏は各例文に訳文を添えているが、右を

大将殿は、このように静かでいらつしやる時に、世はあつけないものと見えたのを、一層、道理と思いなざつて

と訳している。ここは三位中将（頭中将）の心中思惟を表現したものであるが、右はそれを大将殿（源氏）のそれと取り違えた、甚しい誤訳である。例文が正しく理解出来ていなければそもそも例証の意味はない。

次は「降りつる」の三例を見る。

20 秋の夜に雨と聞えて降りつるは風に乱る、紅葉なりけり〔後撰集〕秋下・四〇七。よみ人知らず

21 この夕降りつる雨は彦星のと渡る舟の櫂のしづくか〔新古今集〕秋上・三二四。赤人

22 我が袖に降りつる雪も流れゆきて妹が手本にい行き触れぬか〔万葉集〕十・二三二〇

右について次のように説明する。(二五三―二五四頁)

20 ①宣長がないといった「降りつ」の例が実際にはあったと述べた。

②「(雨が) 降る」などは、そこに人の力の及ぶことはないから、「降りぬ」が一般となるのは当然である。しかし、「降りつ」の例もあった。
③「秋の夜に雨と聞えて降りつるは」は、これまでのことから考えれば、そこに何らかの作者の気持がこめられたことになる。もし、秋の夜、雨が降るに対する思いがあるとすれば、それは紅葉の色増すもとなる雨ということである。明日は一段と美しい紅葉という期待が裏切られることになるが、その意味を表すのが「つ」であろう。「雨」は自然現象である。誰かがそうする「降らす」ではなく、「降る」が妥当な表現である。その「降る」ことに思いが加われば、それは「降りつ」になる。(傍線筆者)

先ず①について言う。「降りつ」の例は早くからその実例が指摘されている。例えば前掲小林氏の文献①(昭和一八年八月)では中島廣足の『かたいと』(一八五三年)の説を引き、また自らの調査結果について触れている(三三八頁)。更に前記「二覧」でも「降りつる雪も」(萬葉・一〇・二三二〇)の例を示しており、何人も容易にその実例を確かめることが出来る。また、その後の諸家の研究でもこの「降りつる」「降りぬる」の問題は幾度か取り上げられている。要するに、「降りつる」は夙に周知の例である。先の氏の言は、研究史を顧慮せざるが故の文言か、さもなくば、取えて自らの新発見として功を誇らんとするものか(先に引用した文献④では「降りつ」の例なし〔取意〕としていた。氏にとっては新発見なのであろう)。

次に②の前半部について言う。ここも先の『源氏』の例の「見ゆ」同様、「ぬ」の付く理由を動詞の性質から説明しているのである。「つ」「ぬ」の選択は上接の動詞によるものではないとしながら、かかる説明が繰り返されるのはまことに不思議という他はない。

問題の中心である、③の「つ」の説明に移る。この「つ」にこめられた作者の「気持」「思い」は、氏によれば次のようになる(波線部「そ

の意味」の内容は次の二項と解するのが自然であろう。

① 紅葉の色増すもとなる雨ということである。

② 明日は一段と美しい紅葉という期待が裏切られることになる。

③は期待を表すものであろう。しかるに続く④では「期待が裏切られる」という。とすれば、「つ」は期待と失望という、まさに相反する二つの心情を同時に表すものであるのか。なお、③の「期待」は歌の上の句から、④の「失望」は下の句から恣に導き出したものであろう。

この歌の氏の訳は次の如きものである。

秋の夜に雨が降り、これで紅葉も一段と色増すと期待したのは実際は風に吹かれて散る紅葉であった。

右は表現の眼目を成す「雨と聞いて降りつるは」が全く理解されておらず、その無神経ぶりは「秋の夜に雨が降り」という訳に如実に現れている。これは著しく歌の趣を損なうものである。

21 「この夕降りつる雨」では、①「夕」「雨」の結びつきがある。②「夕」は訪れる人待つ思いになる。③「雨」は訪れを妨げる。

④その憂さをこめた思いが「つ」であったと解される。そして、⑤それを慰めるのは、雨を「彦星の櫂のしづく」と思うことであつたと解されるのである。(記号・傍線筆者)

ここでも「つ」は③の期待、④の憂いという二つの思いを同時に表すのか。それを含め、①から⑤までのすべての論理は筆者には到底理解の限りでない。なお、氏の訳文は

この夕べに困ったことに降った雨は彦星が川を渡る舟の櫂のしづくであるのか(傍線筆者)

である。「困ったことに」とあるが、これは誰が困っているのか。歌の作者か。彦星か。はたまた彦星を待つ織女星か。いずれにしても甚だ恣意的な訳であることに変わりはない。なお、「彦星の……櫂のしづくか」の意味づけが説明文(慰め)と訳文(困惑)とで全然別になっているが、これもその場その場のこじつけの結果忽ち辻褄が合わなくなっただけのことであろう。所詮は根本的な妄説の破綻を露呈するものに他なるまい。

残る一例の説明は次の如くである。

22 『万葉集』の歌は「我が袖に降りつる雪」とあるが、袖に吹く雪は決してよいものではない。ましてや「妹」がもとを訪れる場合であれば尚更である。その思いが「つ」であったのではないか。そして、私が訪れられなくともその雪がせめて自分と愛する妹とに通じる物となってくれたらと、降る雪に対する作者の思いがあつたのではないか。そしてそう解釈すれば、そこに「つ」が使われた理由も納得できるのである。

ここでも、「つ」は、「袖に吹く雪」に対する不快感とともに「降る雪」に対する期待感を表すという。そして、それによって「つ」が使われた理由が納得できるといふ。自説が「納得できる」のは結構な事であるが、それによって読者が納得するか否かはまた自ら別な事である。

以上、「つ」の意味を文脈上のものとする氏の例文解釈の実際を明らかにした。いずれもその場の思いつきの羅列に過ぎず、余りに放恣、余りに荒唐無稽な放言という他はない。また、先の「ぬ」の二例について見るに、一はまさに自らの定義を否定するものであり、一は自らの定義を逸脱し、それと矛盾するものであつた。まさに論外と言うを憚らない。

七(三) 4 (1)

ここで改めて、「つ」「ぬ」についての先の定義(Ⅶ)の内容を検討する。というのは、この定義には既述以外にも以下に見る如く多くの問題があるからである。先ず、「つ」「ぬ」の説明の要点を比較する。

「つ」は事態の発生に自分もしくは誰かの思いがこもると話し手が判断したことを表す。

「ぬ」は事態の発生に誰の思いも加わっていない。いわば、自然にそうなったと話し手が判断したことを表す。

右の定義における、波線部の意味は何か。

例えば、推量の助動詞「む」の定義について言えば、

推量の意味を表す。

あるいは

話し手の推量判断を表す。

とするのが普通であつて、

推量の意味を表すと話し手が判断したことを表す。

とはしないであらう。まして

話し手の推量判断を表すと話し手が判断したことを表す。

などとすることはあり得ないであらう。先の一句はどこから来たものであらうか。

この一句は既に「七(一) 1」項で引用確認したとおり「つ」「ぬ」の選択について言うものであった。(文献③・一九九頁)。ところがここではそれを「つ」の意味の説明に持ち込んでしまったのである。即ち、先のⅦ①の定義は次のa・b二つを短絡して一文にしてしまったものであらう。

a 「つ」には自分もしくは誰かの思いがこもる。(に)は筆者の補充

b 「つ」「ぬ」の選択は話し手の判断による。

この結果、意味の説明と二語の選択の基準(話し手の判断)との二つが一文中に分ち難く混在してしまったのである。これでは文意が不明になるのも当然である。

七(三) 4 (2)

以上は主として氏の意識を辿ったものであるが、では、先の定義を文字通り、解釈すればどうなるか。ここで前掲「つ」のⅦ①の部分を再掲すれば次のようになる。

「つ」は〈前に来る動詞の表す事態の発生に、自分もしくはだれかの思いがこもる〉と話し手が判断したことを表す。

繰り返しになるが、「つ」は話し手がある判断をしたことを表す。そしてその判断内容は、動詞の表す事態の発生に自分もしくは誰かの「思

い」がこもる、というものである。これがこの一文の意味である。そして、「つ」は右の判断を表明するのみであって、それ自体は決して「思い」の内容即ち氏の言う「意味」を表すものではない（これがⅦ③で改めて文脈上の意味に言及しなければならなかった所以である）。先の小町の例に続き具体例を追加すれば、例えば「見えつる」「降りつる」の場合「見えるコト」「降るコト」という事態の発生の中に「思い」が「こもる」と話し手が判断したことを「つ」が表しているというのである。これが右の定義の内容である。とすれば、これは、次のように言うべきものであったのである。

〔事態の発生に、自分もしくは誰かの思いがこもる〕と話し手が判断した〕から「つ」を用いた。

右のように、Ⅶ①は「つ」を選択する条件を規定したもので、意味を説明したものではない。ただし、氏にその認識は無いものと見なければならぬ。その故に、続く②でこれを「基本義」としたものと思われる。更に③では、「つ」自体が誇り・自責・賞讃・責め等の意味を表すとして、これを「文脈上」のものとする。しかしながら、前述の如く助動詞の「基本義」が「文脈上」の意味であるなどということはそもそも論理的にあり得ない。なおまた、「基本義」であるか否かを問わず「文脈上」の意味は決して文法的な意味ではない。これも今更言うまでもないことである。

ここに至って、「つ」の定義はまさに支離滅裂、ほとんど收拾不能のものとなってしまうたのである。要するに、「つ」の定義はそのすべてが否定されなければならない。尋常では到底考えられぬことであるが、氏は自らの文言の意味が全然分かっていないのである。あるいは錯覚しているのである。何故このようなことになったのか。それは一に氏が「つ」「ぬ」の使い分けを動詞に求める通説の否定に甚だ急であつたことに因らう。文献⑤の定義の記述もまさにその流れの中にあつたのである。なお、右にはいま一つ、氏が「つ」「ぬ」二語それぞれの独自の意味を求めることに同じく甚だ急であつたことも与つていよう。

一方の「ぬ」については如何。「ぬ」の定義形式は「つ」とは大きく異なるが、意をとって纏めて言えば、これも「つ」と同じく

〔①事態の発生に誰の思いも加わっていない。いわば②自然にそうなった〕と話し手が判断した〕から「ぬ」を用いた。

と解すべきものと思われる。ただし、先の定義（こもるそれを承ける）は二文から成るが、①・②を「いわば」によつていとも簡単、無造作に結びつけている。しかし、後述のように、この二つは全く異質なことであつて、軽々に換言出来るような内容ではない。どうし

てこのような定義が出て来たのか。

先に氏の「つ」「ぬ」説の推移を通覧したが、改めて「つ」「ぬ」に関わる「事態の発生」の要点を最も簡約して示せば次のようになる。先ず文献②から文献④までを示す。

A 「つ」……①「意図に基づく」≡②「有意的発生」

「ぬ」……①「意図に基づく」≡②「自然的発生」

右「つ」「ぬ」の①の内容と②の内容とはそれぞれほぼ換言可能と見てよからう。ここでは一往割り切つて等号で結んでおく。続く文献⑤では右の内容がそれぞれ次のように変化した。

B 「つ」……①「思いがこもる」

「ぬ」……①「思いが加わらず」≡②「自然的発生」

右の如く「つ」「ぬ」を「思い」の有無によつて区別する考えは、文献⑤で、突如、〈動詞の意味との間に共に使われやすいものがある〉との、ほとんど訳の分からぬ理由によつて出て来たものである。ここBでは①の変化にも拘らず「ぬ」の②はAの儘であるが、これは決して「いわば」によつて結びつけるべきものではない。何故なら、①は誰かの「思い」の有無という主体的な事実を表し、②は事態の発生の有り様という客体的な事実を表すものであり、この両者にはなんら関係がないからである。不等号で示した所以である。(Aの場合は、①の「意図」に基づくか否かが②の事態の発生の有り様を左右している。即ち、主体的なものと客体的なものといわば一種の因果関係にある。この点がBとの相違である)。

単なる思いつきとしか思われない定義が不備を含むのはむしろ当然というべきか。

なお、「つ」は意図的・有意的な事態の発生を表したとするのが、氏の従来のもも中心的な考えであった。それが右B(文献⑤)では単に①「思いがこもる」のみになり②「有意的発生」はなくなつてしまった。しかし、これはまことに重大な変説と言わねばならない。仮に、右の持説を引き継ぎ、先のⅦ2の「ぬ」と同様に定義すれば

「つ」は①事態の発生に、自分もしくは誰かの思いがこもる。いわば②意図的・有意的に事態が発生したと話し手が判断したことを表す。

となるであろう。ただし、もし右の如く規定したならば、例えば、例文 20・21 は

秋の夜に①紅葉が色増すとの期待に反し降った雨は②私の意図によって降ったものである。

この夕べに①困ったことに降った雨は②私が意図的に降らせたものである。

ということにならねばならぬ。しかし、氏もさすがにこうは言いかねたのであろう（尤も、氏がこのことを意識したか否かは推測の限りでない）。

なお、先の B「ぬ」の①・②は謂わばダブル・スタンダードなのであって、事実、氏は「ぬ」の具体例の説明に当たってほとんど②、しかもその裏返しというべき（意図的な行為）ではないことによって説明しており、二つを都合よく使い分けているように見える。ともあれ、文献⑤の定義にはこれだけ多くの問題を含む。氏の混迷は広範にしてかつその根は深いのである。

七(三) 4(3)

以上、氏の所説を辿って来たのであるが、ここに至って更に重大な疑問がある。しかもこれは氏の説の根幹に関わる重要な問題である。これまで氏の取り上げる「つ」の例は総て和歌乃至会話文の例であって、何故か地の文の例は全く無視されている。例えば、次に挙げる第二例の波線部は氏が繰り返し取り上げた例（例文 7）であるが、続く「とて、簾垂おろしつ」の部分は遂に引用されることがない。この引用の方法は尋常ではないが、これは事実を覆うものではないか。

氏の定義は果たして地の文にも適用し得るものであるのか。ここで改めて地の文の例を問題とする。次は『源氏物語』の前半部に見られる地の文中の「つ」の例を抄出したものである。

御さきの松明ほのかにて、いと忍びていで給ふ。半蔀はおろしてけり。（夕顔・一・一二八）

「あな、いみじや。いとあやしきさまを人や見つらん」とて、簾垂おろしつ。（若紫・一・一八六）

「さらば、その子なりけり」とおほし合はせつ。（若紫・一・一九〇）

殿におはして、なき寝に臥しくらし給ひつ。（若紫・一・二〇六）

楊貴妃の例もひき出でつべうなりゆくに（桐壺・一・二七）

人の見咎めつべければ、御念誦堂にこもり給ひて、日一日泣き暮らし給ふ。（薄雲・二・二三二）

ひねもすに、いりもみつる風のさわぎに、さこそいへ、いたう困じ給ひにければ（明石・二・六一）

日ごろ降りつる名残の雨、いますこしそ、ぎて、をかしきほどに月さし出でたり。（蓬生・二・二五一）

御供の人、寄りてぞ（門を）開けつる。（末摘花・一・二五九）

年老いたる尼君たちなど、まだ更にかゝる人の御有様を見ざりつれば（若紫・一・一九九）

侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれはてぬ者にて、さぶらひつれど（蓬生・二・二四二）

これらの「つ」には誰の「思い」がこもるのか。右の地の文の「つ」は、物語作者乃至語り手が、「自分もしくは誰か」の「思い」がこもると判断して用いたのか。然りとすれば、それは如何なる「思い」か。否、翻って、そもそも作者や語り手が「つ」に托して自らの「思い」を吐露するなどということがあり得るのか。

地の文の例に適用し得ないのであれば、それはもはや「つ」の意味などと称すべきものではない。

七（三） 5（1）

以上、文献⑤の内容を見てきた。通常なら例文22の解釈までで終るところであろうと思われるが、氏はこの後も第三・第四の二項に互つて『源氏物語』他の例を挙げ自説を主張している。けれども、その説明はいずれも定義を逸脱し、その埒外にある。更に、定義との関係を別にしても、その解釈はあまりにも恣意的な妄説の羅列に過ぎないが、一往検討することとする。なお、ここでは動詞「驚く」に接続する「つ」「ぬ」の問題が中心になっている。

次は第三項「何故『つ』が使われたか」中の一例である。

- 23 かの廊のつま入りつるほど、風の騒がしかりつる紛れに、簾のひまより、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、世を背きたまへるあたりに誰ぞとなく見驚かれつる（手習）

右を説明して次のように言う。

これは、尼君の亡くなった娘の婿で、今は中将になっている人が、横川を訪ねる道すがら小野の里に立ち寄った時、そこに不似合いな、若い女性（浮舟）の姿を見て、その驚きを、亡くなった人の女房であつて、前々から親しかった少将の尼に語った言葉である。ここでは、「入りつる」「騒がしかりつる」「あるまじかりつる」「見えつる」「見驚かれつる」と「つ」が使われる。もし、^aそれを一つの出来事として語るのであれば、このように「つ」が使われなくともよかつたであらう。^bこの文脈には、思いもかけない、若い女性の姿を見ていぶかしむ思いがこめられており、それが、「つ」に現れたと考えられるのである。この家の女性たちは、中将を好ましい人とする思いがあり、できることなら、^c中将と浮舟との結びつきがあつたならと願つており、^dそれに通じる思いが、中将にもあつたのかも知れない。（二六〇頁、傍線筆者）

波線部^a「それを一つの出来事として語る」とは何のことか。そして、続く文言によれば、ここは「それを一つの出来事として」語つたものではないことになるが、ならば、何故個々の「つ」の意味を説明しようとならないのか。この一発話中に連続する五例の「つ」の意味、即ちそこにこめられたそれぞれの「思い」は、如何に空想を逞しくしてもさすがに説明出来なかつたということか。そして「一つの出来事云々」はそれを糊塗するものではないのか。これで、この例文が説明出来たと考えているとしたらもはや尋常ではない。

さて、^bこの文脈にこめられた「いぶかしむ思い」がこれらの「つ」の意味だという。けれども、先ず右五例の「つ」が如何にして「いぶかしむ思い」の表現たり得るのか。例えば、第一例で話し手の中将は「かの廊のつま入り（つる）」自らの行為を何故にいぶかしむのか。これは勿論何人にも到底理解出来ることではない。しかも、そもそもカリ活用の「騒がしかり」「あるまじかり」には「ぬ」は接続しない。従つて、ここで「つ」が採られたのは話し手の判断によるものではない。氏の論はここでもそもそもその前提が成り立たないのである。

末尾の「見驚かれつる」について一言する。この「れ」の意味は自発である。『源氏物語』にはこのような（動詞―る・らる（自発）―つ）の例が七例見られるが、ここもその例である。「驚く」は心理作用を表す動詞であり、無意志動詞であるが、ここはその「（見）驚く」に自発の「る」が添加されたものである。「見驚かれつる」はそうした自発的・自然的な事態の発生に自分の「いぶかしむ思い」がこもつていると中将が判断して「つ」を用いたという事になるのか。中将は若い女性の姿を見て「世を背きたまへるあたりに誰ぞ」と驚いたの

であつて、まさか、自分が覚えず、「る」「見驚」いたことを不審がつてゐるわけではあるまい。

更に、続いて、この家の女性たちの思いや願ひに通じる思いが中將にもあつたのかも知れない(c・d)、などと言うが、これをしも「この文脈」上の意味だといふのであるうか。物語の前後から関連する内容を適当に取り出して来てそれと関連づけければ如何なる説明も可能であろう。けれどもそれがこじつけに過ぎぬこと、また言うを俟たぬ。また、仮に中將に右の思いがあつたとしたら、それは先の「いぶかしむ思い」とどのように関わるのか。余りのことに言葉もない。

因みに、次はこの後、横川を訪れた中將が、右の件を弟の禪師に語つたものである。

「風の吹きあげたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりと思ひつらむ、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。明け暮れ見るものは法師なり。」

おのづから目慣れておほゆらん。不便なる事ぞかし」との給ふ。(手習・五・三六六)

ここにも一発話中に「つ」が五例使われている。氏はこれも「それを一つの出来事として語る云々」という意味不明の文言によつて五例の「つ」を一括してしまうのであろうか。そしてその「思い」とは如何なるものであると云うのであろうか。

右の五例の「つ」についてそれぞれ一言する。

吹きあげたりつる……「……たりぬる」という言い方はない。これは上の動詞如何に関らない。

見えつれ……「見えぬれ」という言い方はない。

思ひつらむ……「思ひぬらむ」という言い方はない。

入りつる……「入る」には基本的に「ぬ」が接続する。

見えざりつ……「……ざりぬ」という言い方はない。これは上の動詞如何に関らない。

これを見ても、氏の説が根柢から成り立ち得ないものであることは明白であらう。

右の中「入りつる」(これは前例にも見られた)についてだけ補足する。「入る」には上代以来「ぬ」の接続が基本である。『源氏物語』の場合もその傾向は変らぬが、ただ三例だけ「入りつる」の例が見られる(前例の「かの廊のつま入りつるほど」他後掲「空蟬」巻の一

例の計三例である。これについて伊藤氏は次のように解している。

これら三例の「入り、ツル」は家屋の中にはいる時のみに使用されている。これに対して、ヌの系統のものは、単に家のみならず、その他いろいろの事に使用されている。即ち月、夜、海底、木蔭などにはいる時に使用されているので、この点ツルとは少し使用が相違しているかと思われる。(文献⑤、三二二頁)

また、中西宇一氏は

簾垂のはざまに入り、給ひぬ。(源氏・空蟬)

この入り、つる格子はまだささねば隙見ゆるに(源氏・空蟬)

他の例について、

すなわちこれらは「ぬ」を伴う一方、また「つ」をも伴いうるものであるが、これら「つ」を伴う場合は、それが「ている」結果状態を現出する発生的変化動作としては示されておらず、動作それ自身の完了を表わす継続動作として示されている場合である。

〔「つ」の研究〕「國文學」第四卷第二号、七七頁

と説明している。両氏の観点は異なるが、いずれにしても「入りつる」について既にこれだけの検討がなされている事を知らねばならない。先の「手習」の例で山口氏は右の「入りつる」を含め数例を一括して論じ、かつまた、その「思い」も唯一「いぶかしむ思い」としているが、その強引・粗笨さには言うべき言葉もない。

なお、氏は右三例の「入りつる」には「自分もしくは誰かの思いがこもり」、他の多くの「入りぬ」(引用外)には「誰の思いも加わっていない」と話し手が判断したものだと言明するであろうか。

次に「浮舟」の例を見る。ここでは

24 匂宮が、あたかも薫であるかの如くよそおい浮舟の許へ忍び込む場面で、彼女の侍女である右近に向かって、ひたすら薫の声づかいをしながら、

物へ渡り給ふべかなりと仲信が言ひつれば、驚かれたるまゝに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづあげよ

と言う。(二五六頁)

として、右の背景について氏は約二頁半に及ぶ説明を加えているが、いまその長文の紹介は省略する他はない。氏の趣旨は次の如くである。
 「言ひつれば」「驚かれつる」と、匂宮が「つ」を使つたのは、薫の立場であれば、当然、相手の落ち度を責めて相応しい内容であり、そこで「つ」を用いた。自然とそうなったと考える「ぬ」では不十分な表現であり、「つ」でなければならなかったのである。「つ」を通して、その薫の気持が伝わることで、右近は後ろめたい思いになったであろう。そして、「いとこそわりなかりつれ」の部分でも「つ」が使われている。前もって知らされていれば、こんなことにはならなかったのに、そうでなかったためにひどい目に遭つたという意味に解され、ここにも匂宮の同じ姿勢が見てとれる。(二五九頁、傍線筆者)

ここでは、「つ」は相手の落ち度を責める気持で用いたものだという(ここで氏が「相手の落ち度」というのは、浮舟が物語での件を直接薫に知らせず、薫はそれを家司の仲信から聞いたこと——これは匂宮の拵え事を指す)のであるが、これはまた、自らの定義から逸脱すること甚しい解釈と言わねばならない。先の定義の「つ」の「思い」とは

動詞の表す内容が、自分の行為であれば誇り・自責、誰かの行為であれば賞讃・非難・責めの気持

をその内容とする。即ち、「思い」は行為の主体に対するものである。では、右の「言ひつれば」以下の行為乃至心情の主体は誰かというに、順に、仲信・話し手(薫を装った匂宮)・話し手(同)であって、右近はそのいずれの場合にも全く無縁、単にこの場の聞き手であるに過ぎない。右近が如何なる意味で行為の主体として、右の「つ」の「思い」——責めの対象たり得るのか。氏の論法は完全に自らの定義の埒外にある。

最も肝腎な点について言う。「言ふ」には「つ」しか接続しない。即ち、ここでも話し手がある意図をもって「つ」「ぬ」の中から「つ」を選択したものではない。従つて、「薫の立場」をよそおつて「つ」を用いたとか、「自然とそうなったと考える『ぬ』では不十分な表現」だから「つ」でなければならないとかいうことは初めから問題にならぬ空論である。また、同様にもともと「つ」しか接続しない「かり活用」の「わりなかり」に接続した「つ」に「匂宮の同じ姿勢が見てとれる」などというのも全く根拠がない。しかも波線部は「いとこそわりなかり(つれ)」の叙述内容そのものであって、これは勿論「つ」の意味ではない。

次に「驚かれつる」についてみる。この話し手自身の心理作用（「驚かる」）に接する「つ」が右近を責めるべくして選択されたなどということは余りにも牽強附会の言である。（『源氏物語』に「驚かれぬる」という例がないことを思え。しかも、この事実は氏が言及していることでもある。文献⑤二五六頁）

要するに、右はこの場面の背景的事実によって強引に「つ」の意味を割り切ったものである。氏は右に続いて、「つ」「ぬ」が使い分けられる必然性があつた、「つ」を用いた作者の意図を考えるべきであろう、あるいはまた、そう解釈することで、物語の面白さも増すのではないかなどとしているが、いずれも全く空疎な冗語という他はない。

七 (三) 5 (2)

次に第四項「『ぬ』の解釈」を見る。第三項と同じくこも「驚く」に接続する場合が中心である。

25 やがて御覧すれば、いと、すぐれてしもあらぬ御手を、たゞかたかどに、いと（いたく）筆すみたる気色ありて、書きなし給へり。
歌もことさらめき、そばみたる古言どもを選びて、たゞ三行ばかりに、文字すくなに、このましくぞ、書き給へる。おとゞ、御覧
じ驚きぬ。

「かうまでは、思ひ給へず（こそ）ありつれ。さらに筆投げ（捨て）つべしや」（梅枝。へ）内は脱落補充部分）
右について次のように説明する。

螢兵部卿宮の見せた冊子の字のよさに源氏が驚く場面である。「御覧じ驚きぬ」と①「ぬ」が使われるのが当然の文脈である。なお、続く源氏の言葉では「ありつれ」「筆投げつべし」と「つ」が使われるが、②前者はこの程度と予想したことがはずれたからであり、③後者はもう筆など持ちたくないという思いからであるから「つ」となっている。（二六二頁）

先ず、「思ひ給へず（こそ）ありつれ」「筆投げ（捨て）つべしや」について見るに、これを傍線部②・③と説明しているが、これはまさにそれぞれの「つ」に上接する述語部分の内容そのものである。これでは「つ」の文脈上の意味とも言えない。先の例文24の場合を含め、氏は一体何を説明している心算なのであるうか。そしてまた、ここでも「……すこそありぬれ」「投げ捨てぬべしや」という言い方は

ないことを確言しておく。

問題の「御覧じ驚きぬ」については、「ぬ」が使われるのが「当然の文脈」だという（傍線部①）。思うにこれは『驚く』ことに、誰かの意図が含まれたという意味はなく、それが『ぬ』本来の使い方である（第三項二五八頁）との考えが前提になつていよう。つまりここは、動詞「驚く」の意味から「ぬ」の使用を説明したものである。第四項では数例「驚く」に「ぬ」の接した例を挙げているが、それはすべて右によつて説明されているのである。例えば、

- 26 夜の更け行くまゝに、物の調べどもなつかしくかはりて、青柳遊び給ふほど、げに、ねぐらの驚も驚きぬべく、いみじくおもしろし（「若菜上」）

についても、

驚が目覚めるのは誰がそうしようとしたことでもないから、「ぬ」が使われて当然である。

という。次も同様の論法である。

- 27 さしとむる葎やしげき東屋のあまり程ふる雨そゝぎかな

と、うち払ひ給へる追風、いとかたはなるまで、東の里人もおどろきぬべし（東屋）

（前略）これも「驚く」ことなど全く意図しないことであるから「ぬ」が適当である。

以上を要するに、「驚く」ということは意図的な行為ではないから、「ぬ」が使われて当然である、として専らそれによつて各例文の用法を割り切つてゆくのであるが、これは明らかに自家撞着である。何故なら、これは動詞の意味によつて、「ぬ」が選択されたと言っているに等しいからである。氏は動詞による「つ」「ぬ」の使い分けを強く否定しているのではなかったか。

更に言えば、「意図的な行為」というのは氏の「つ」の意味を通底するものである。従つて、例えば

誰がそうしようとしたことでもないから「ぬ」が使われて当然である。

というのは

「つ」ではないから「ぬ」が使われて当然である。

と言っているに等しい。これでは「ぬ」自体の意味を説明したことにはならない。

いま一例「驚きぬ」について検討する。

28 小君、近う臥したるを、起し給へば、うしろめたう思ひつゝ、寝ければ、ふと驚きぬ（空蟬）

源氏は小君の手引きで空蟬の家に忍び込む。しかし、それと察した空蟬は身をかわし、そこには義理の娘に当たる軒端萩がいた。

源氏は空蟬の残した薄衣を取つて部屋から出、そばに寝ていた小君を起こし立ち去つた場面である。源氏に起こされ、しきりに氣にしていた小君は、すぐに目を覚ます。その文脈で考えれば、ここは「ぬ」が適切である。（二六一頁）

ここでもまた「文脈」で考える、という。ただし、右傍線部の内容（氏のいう「文脈」に相当しよう）はむしろ「つ」の定義に結びつくべきものではないのか。右の説明は筆者の理解を超える。

更に、「驚く」に直接する場合（即ち「驚かれ」とある場合を除く）には「ぬ」しか接続しない。即ち、「驚きつ」という言い方はない。従つて、この場合如何なる文脈においても、「つ」「ぬ」の中からいずれかが選択されるということはない。その故に、そこには「適切」か否かが問題になることも当然ながらない。しかもこれは例文25から例文28までのすべてに通ずる重要な事実である。

また、この例は地の文である（例文25以下の「驚きぬ（べし）」同じ）。とすれば、これは、一体誰の「思い」の有無を問題としているのか。物語作者乃至語り手が、事態の発生に自らの「思い」が加わっていないと判断した事を意味するのか。ここは草子地でもないが、作者や語り手が自らの「思い」の有無を問題にするなどということがあり得るのか。これは以上の数例を貫く基本的な問題である。

七 (三) 5 (3)

以上、第四項の「ぬ」の説明を見てきたが、これは自らの「ぬ」の定義からは決して出て来る筈のものではないか。しかも、実は、これは遡つて第三項以来の一貫した？論法である。次は第三項で、例文24の「驚かれつる」に続いて取り上げられた和歌の例である。

29 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる（古今集・秋上・一六九。藤原敏行）

30 降る雪のみのしろ衣うちきつゝ、春きにけりと驚かれぬる（後撰集・春上・一。藤原敏行）

31 郭公おのが寢覚めの初声に待つ人さへぞ驚かれぬる（散木奇歌集）。（以下一首省略。二五六頁）

右について次のように説明している。

『古今集』の例は、「風の吹く音で秋の到来に突然に気付いた」というのであって、作者の意図に基づかない事態であるから、「ぬ」が使われて当然である。他の三首の場合も、そこに誰の意図も含まれてはいないから、同じように「ぬ」となって当然である。「ぬ」直前の「る」が自発の意味に解釈されるから、その点からも「ぬ」が自然といえる。（二五八頁）

右の末文で、「る」の意味が自発なるが故に「ぬ」の使用が自然である、とするが、既に例文23の項で確認したように、「驚かれつる」の「る」も自発である。とすれば、この「る」と「つ」との関係を如何に説明しようとするのであろうか。この表現は「不自然」ということになるのか。自ら両表現を取り上げていながら一方の「る」は無視する。これでは余りにもお座なりという他はない。

ところで、繰り返しになるが、氏の「つ」「ぬ」の意味を分かつものは、「思い」の有無であった。「つ」の場合は「思い」がこもることが「基本義」とされ、従って、各例文はそれぞれの「思い」によって説明されたのである。ならば、「つ」と対照的に説明される「ぬ」の場合も、当然、「思い」が加わらぬことを「基本義」としなければならぬ。それを何故に「思い」ではなく、定義外の「意図」の有無によって解釈するのか。かくして、自らの定義に則った「ぬ」の説明はこれまで遂に一例も見られないのである。

どうしてこのような信じ難いことになったのか。答は極めて明白である。それは氏の定義がそもそもなら実証に基づくかぬものであったことによる。即ちそれは実例の帰納によって得られたものではない。なんの根拠もなく、単なる気紛れとでも言うしかない無稽の定義（七（三）1項）を押し立てた結果、自ら取り上げた用例にさえそれを適用することが出来なかったのである。尋常では到底あり得ないことと言わねばなるまい。

では、右を「ぬ」の定義に則って説明すればどのようなになるであろうか。先ず、例文29『古今集』の例は

（秋が来たと目でははっきりと見えなくても風の音を聞いた時、秋と気づいた）。しかし、秋の到来に気付いても私にはなんの感懐もありません。自然に、自ずと気付いたのだ、と私は判断しています。

となろう。（）内は氏の訳文をそのまま引用し、波線部は定義による「ぬ」の意味を筆者が添えたものである。念のため一言すれば、右の「自

然に、「自ずと気付いた」というのは決して筆が滑って剩語を連ねたものではない。「る」の意味は自発であるから「驚かれ」即ち「自ずと気付いた」ことが定義の「自然にそうなったと話し手が判断した」の「そうなった」に相当する。つまり

〈自然に、（自ずと気付いた）と話し手が判断した。〉

ということである。このことは「る」のない「驚きぬ」の場合の

〈自然に（気付いた）と話し手が判断した。〉

と比較すれば判然と思うと思う。以上が先の波線部の根拠である。

初句の「秋来ぬ」との「ぬ」についても同様の説明をしなければならないが、今到底その煩に堪えない。この歌は『古今集』巻四「秋歌上」の巻頭歌であるが、二つの「ぬ」を右の如く解するしたら一首は一体なにを詠っていることになるのか。

続いて例文30について見る。

（降る雪を防ぐ衰の代わりに、戴いた大桂を着る度に我が身にも春が来たと驚いております）。けれども、この驚きに私はなんの感激もありません。自然に、自ずと驚いたのだ、と私は判断しています。

右の『後撰集』巻一春上の巻頭歌については若干の説明を要しよう。この歌は詞書に

正月一日、二条の後の宮にて、しろきおほうちきをたまはりて

とあるもので、一首は

新年を賀する気持と自分にも春が来たと喜ぶことによつて相手に対する感謝の心を示す寿歌のパターン。

と説明される（『新大系』脚注）。仮に、「ぬ」が波線部の如き意味を表すとしたならば、二条の后に対してこれ以上の無礼はあるまい。

右二首の波線部は定義を忠実に宛てたものであつて、もとより筆者がここで戯言を弄しているわけではない。けれども、この解釈が到底成り立ち得ないこと、また言うを俟たない。（第三例以下も同断であるから省略に従う。）

なお、これは何も「驚かれぬ」の場合に限らない。定義はもとより普遍妥当すべきものである。以下、若干他の例を見る。

珠藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近づきぬ（萬葉集・三・二五〇）

……玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十隈毎に 万たび かへりみすれど いや遠に 里は放りぬい
や高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が門見む 靡けこの山 (同・二・二・三二)

小竹の葉はみ山もさやに乱げどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば (同・二・二・三三) 右反歌二首中の一首

ここには人麻呂の歌から例を挙げた。これらの「ぬ」も定義に拠った解釈の不可能なること、もはや毫末の疑いもなからうと思う。ここでは第二例以下の長歌及び反歌について作品としての面から一言する。

この歌は「柿本朝臣人麻呂、石見の国より妻に別れて上り来る時の歌」で、長歌は三九句から成る。一首の眼目は「夏草の」以下結びの五句にあり、伊藤博氏は

この結びが放つ響きは強烈である。古代人は、山を精霊の支配する神秘の地と見た。……ところが、人麻呂の愛のたかぶりは、

この神々のこもる、不動の山に、「靡け」と号令した。まさに愛の雄たけびである。(『萬葉集釋注』)

と説いている。そしてこの五句の「雄たけび」の前提・機縁をなすのがその前三四句の叙述であり、その収斂が問題の

いや遠に 里は放りぬ。 いや高に 山も越え来ぬ。

という二句である。ここまで来れば、右「ぬ」にこめられた「思い」について敢えて言葉を加える必要はあるまい。

反歌は「われは妹思ふ」と揚言する。力強い四句切である。「別れ来ぬれば」はその理由である。そして、この一句は右の長・短歌三首の締め括りでもある。もし、かかる句中の「ぬ」に作者人麻呂の「思い」が加わっていないなどとするならば、それは決して何人の容認も得られないであろう。

右によって、氏の「ぬ」の定義を実際に適用することが全く不可能であることが確認されたであろうと思う。これは定義の現実性の決定的な欠如を示すものである。

以上、文献⑤の「つ」「ぬ」の説を詳細に検討し、その定義及び例文解釈の実態を明らかにした。多くの例を見て来たが、氏の言う「つ」の意味はまさにその数を知らず、例文ごとに次々と新奇な意味が続出した。尤もこれは当然の帰趨である。何故なら、氏は「つ」の意味

を文脈上のものとするのであるから、その数は「つ」の用いられた文脈の数と等しいだけ存在することになるからである。

一方、「ぬ」についてはほとんど「驚く」「驚きぬ」「驚かれぬる」の例を挙げるのみであるが、自らの主張である「誰の思いも加わっていないと話し手が判断したことを表す」と説明する例はただの一例もない。更に、「驚く」以外の「見ゆ」の例では逆に「ぬ」を「話し手の思い」を表したものとするなど、自らの定義を真つ向から否定するような文言も見られた。

要するに、如上の定義及び例文解釈は悉く容認すべからざるものであることを確言する。

七(四)

因みに、文献⑤第六章は「再論・助動詞「つ」——『源氏物語』をどう読むか」と題する。先ず、この「再論」の意が明らかでない。前提となる筈のものが不明なのであるが、氏は一向にこの表題の意を説明することはない。第二にこの表題と論の内容との関係について見る。この章は四項から成り、次が各項の見出しである。

一 「つ」「ぬ」、これまでの解釈

二 助動詞とは

三 何故「つ」が使われたか

四 「ぬ」の解釈

この見出しを一通り見ても知られるようにここでは一貫して「つ」「ぬ」の二語を問題としているのである。(なお、第二項は「助動詞とは」とあるが、この項の中心をなすのは「つ」「ぬ」の定義及びそれに基づくという例文の説明である)。それが何故に右の如き「つ」に限定された表題になるのか。この点もまことに不思議としか言い様がない。

おわりに

以上、文献①から文献⑤に互る氏の「つ」「ぬ」の論を検討してきた。変転・錯綜しかつ多くの自家撞着を含む意味規定と、単にその場の思いつきに過ぎぬ極めて恣意的にして牽強附会の例文解釈とを辿り、その一々について検証、論駁した。如何に詳細な検討を尽くしても、遂にそこから何らか生産的な見解を見出すことは出来なかった。否、見るべきものが全くないだけではない。すべて既に批評の限りでないが、ここでは特に文献④『大辞典』についてのみ一言する。右『大辞典』の「つ」「ぬ」の記述は、従来の諸説の紹介・整理の過誤及びその批判の不当、更にはその根柢にある自説の妄を含め、そのことごとくが世を誤ること甚だしきものであると言わねばならない。ほとんど尋常の思考の所産とは考えられない文言を書き連ね、書き散らして恬然としてあるのは論文以前の問題であるが、その所以は推測の限りでない。そして氏の挙例が悉く例証の意味を持たないのであるから、この上更に反証を追加提示する必要もなからう。甚だ長文にしてまた幅濫した記述とならざるを得なかったが、この点読者諸賢の御海容を乞う次第である。

先の拙稿④・⑤・⑥と合せ、これで氏の言う「時の助動詞」の中、主要な「き」「けり」「つ」「ぬ」について検討したことになる（残る「たり」「り」については氏に特別の論がない）。なお、かかる長文の批判・論駁をものする所以は既に拙稿⑤の末尾に記したとおりであり、ここで改めて繰り返すことはしない。

【補注】

1

『源氏物語』には動詞「逃がす」はこの一例しかない。また中古の仮名文学作品では、僅かに『うつほ物語』に二例見られるがこれとは別に「つ」「ぬ」の接続例ではない。なお、「逃ぐ」は『源氏物語』に八例あり、うち「ぬ」の接続した例が三、「つ」の接続した例はない。その他中古の若干の仮名文学作品に「逃ぐ」の例が散見されるが、接続は「ぬ」に限られ、「つ」の例はない。

更に『今昔物語集』には動詞「逃ガス」「逃ゲ」の例が多いが「逃ガス」一八例中「ツ」の接続例は六、「ヌ」の接続例は〇である。一方「逃ゲ」二八〇余例中「ヌ」の接続例は約八〇、「ツ」の接続例は四である。この「ツ」の四例中「逃ゲ候ツル」(ツレ)が三例あるが、「候」に続く例はこの場合に限らず別扱いにすべきものようである。なお「逃ゲ候ヌル」という例はない。残る一例は「汝、何二思ヒテ……棄テテ逃ゲツルゾ」の例であるが、これは「汝、何二思ヒテ」と相手の行為の意図を質したもので、それがここで「ツ」をとった理由であろうかと思う。『今昔物語集』については滋野雅民氏に論があり、そこでは「逃ガス」については「ヌ」のみ六七例の接続例があるとしている。なお、「ツ」のみ・「ヌ」のみが接続する例は十例以上のものに限って挙げている関係であろう、「逃ガス」については触れていない。用例数は筆者のそれと相違するが、それは主として底本の相違によるものであろう。氏は「国史大系」本により、用例は「日本古典文学大系」と一致するものをとっている。筆者は「大系」本によった。

以上、中古において、「逃がし―つ・逃げ―ぬ」即ち「他動詞―つ・自動詞―ぬ」という使い分けがあつたと見て間違いないであろう。要するに、問題の「逃がす」には「つ」しか接続しないのである。

なお、上接動詞と「つ」「ぬ」との関係の全般については後に取り上げる。

2

助動詞「つ」「ぬ」の意味について筆者は従来山田孝雄氏の説に従っている。次は『日本文法學概論』の「つ」「ぬ」の説である。

「つ」は主観的には陳述を確むる意をあらはし、客観的にはその事の完く了れるを示す。(三四〇頁)

「ぬ」は「つ」と同じく主観的には陳述を確むる意をあらはし、客観的にはその事の完く了れるを示す。(三四二頁)

周知の如く助動詞「つ」「ぬ」の意味については多くの説があるが、山田説に拠るのは、現在のところこの説が最もその射程距離において勝る、即ち用例への適合範囲が広いと考えるからである。具体的に言えば、活用形の相違・下接語の有無・文脈の如何等に拘らず、右による一貫した解釈が可能だからである。

また、次の龜井孝氏の見解は右の山田説に繋がるところがあろう。

たとえば、「許してよ」といえば、単なる「許せ」の意味のうえに、すっかり許してしまつてほしいという感じがこめられてくる。あるいはまた、「わが心なぐさめかねつ」といえば、単なる「なぐさめかね(なぐさめがたい)」の意味のうえに、なぐさめきることの、とても、できない感じがこめられてくる。

3

完了の助動詞は、単に、事件の完了を客観的に述べるだけでなく、表現に主観的な感情の色づけを加えるものである。『概説日本文法』一六四頁。傍線筆者) 拙稿「助動詞『つ』『ぬ』の確述的用法」(『王朝』第六冊 昭和四八年四月)。後「助動詞『つ』『ぬ』の所謂確述的用法について」(『命令・勧誘表現の体系的研究』平成一七年五月、おつふう所収)

4 命令・勧誘表現形式中の前述「つ」「ぬ」の系列の位置づけについて附言する。この点に関し、いま一、三の物語の用例数を概観する。

	動詞命令形				総用例数			
	「…給へ」	「…てよ」	「…ね」	「…給ひてよ」	「…給ひね」			
竹取	一七	一四	一	一	一	四三		
うつほ	二八四	三九四	一	一一	二	七	八三九	
落窪	一一九	二二九	六	四	〇	〇	三二三	
源氏	二〇〇	三〇二	六	一一	一一	一一	六四二	
寝覚	四七	六九	二	二	三	五	一四三	

(右には①型の主要な形式のみを挙げており、六項目・動詞命令形から「…給ひね」まで―の和は総数即ち作品の総用例数とは一致しない)。

一見して、命令・勧誘表現形式の基本をなすのは動詞及び補助動詞「給ふ」(尊敬)の命令形によるものであることが知られよう。『竹取物語』のような総用例数の少ないものを別にすれば、「つ」「ぬ」系列の用例数の比率はほぼ数%に限られる。これによって「つ」「ぬ」系列の例は二次的な形式であることが窺われようと思う。そしてこれは単に用例数という数量的な観点からのみ言うのではない。

「さきなる車とく遺れ」(落窪物語・二)

右で、相手に働きかけ、行為の実現を求める話し手の心的態度は動詞「遣る」の命令形によって表明されている。次に、

「その衣ひとつとらせてとく遣りてよ」(枕草子・職の御曹司に)

の「遣りてよ」の場合は、そこに「つ」の持つ確認・完了、主として強調の意味が加わったものである。この二例の比較によって、「つ」の持つ強調の機能は命令・勧誘表現に必須の要件ではないことが知られよう。(因みに『萬葉集』には命令形「てよ」は三例に限られる。なお、「ぬ」の命令形の例はない)。要するに、①型では命令形であることが必要なのである。

②型・③型(「てむ」「てむや」)の場合については既に本論中で述べたように、「つ」は確認・完了の意味を表すのみである。

以上、命令・勧誘表現は「つ」の有無に関わらぬことが理解されようと思う。用例数並びに意味機能の面から見て、「つ」は命令・勧誘表現上、必須の要件ではなく謂わば副次的なものである(「ぬ」の場合も事情は全く変らない)。

5 『別巻』とは文献①『国文法講座別巻 学校文法』の略称であるが、この巻は「学校文法」古文解釈と文法に当てられたものである。従って、この変説の影響は決して小さくはなからう。氏はこれまでしばしば高等学校の文法教育が誤っていると慨嘆し、特に「き」「けり」の意味について高校では「害にさえる」ような「誤った知識」を与え、「ゆゆしい事態を招いている」などと激しく非難していたのではなかったか。(ただし、これが事実無根の謂れなき妄言であることは既に拙稿⑥で明らかにした)。『別巻』の「つ」「ぬ」の説を否定・撤回するのであれば、それについて説明するのが責任ある態度ではないか。

6 なるべく簡明な例を示す。例えば、「言ふ」には「つ」が接続するが「たり」「けり」が接続した例もある。

「さて、この男はたれとか言ひつる」と言ひければ、名を言ひければ(平中物語・二五)

男、音せねば、女のもとより、しもつきのついたちの日言ひたる。「年はいくとせにかなりぬる」と言ひたるに（同・三二）

さて、この男来て、簾のうちにて、もの言ひける。（同・二七）

「思ふ」には古く「つ」、後「ぬ」も接続するが「たり」「けり」が接続した例もある。

かくて、まことに、この男、「もの去なむ」と思ひたる気色を見て（同・二）

消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。（伊勢物語・七三）

また「入る」（四段）には普通「ぬ」（稀に「つ」）が接続するが「たり」「けり」が接続した例もある。

月も入りぬ。（源氏・桐壺）

几帳のきはすこし入りたる程に、桂姿にて立ち給へる人あり。（同・若菜上）

ただ、もてなし用意によりてぞ選びに入りける。（同・少女）

右の「たり」「けり」の例は何れも「事によりて」の表現であること言うまでもない。